

# 【完結】僕は、ポケモン を燃やした

@早蕨@

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その記憶は、頭にこびり付いたまま離れない。  
ある事件をきっかけに、主人公・貫太は再び大きく揺さぶられていく。  
ゆらゆらと燃える炎の先にある景色は、果たして。

ここに載っている小説は、POKENOVEL様へマルチ投稿されています。

目

次

[十二]	[十一]	[十]	[九]	[八]	[七]	[六]	[五]	[四]	[三]	[三]	[零·二]
67	63	59	56	48	44	39	31	24	13	8	1

[三十五]	[三十四]	[三十三]	[三十二]	[三十]	[十九]	[十八]	[十七]	[十六]	[十五]	[十四]	[十三]
138	129	125	122	119	109	103	99	94	89	83	78

〔三十六〕

〔三十七〕

〔三十八〕

〔三十九〕

〔三十〕

〔三十一〕

〔三十二〕

〔三十三〕

〔三十四〕

〔三十五〕

〔三十六〕

〔三十七〕

〔三十八〕

209 204 196 186 181 176 171 168 164 160 148 145 141

〔三十九〕

〔四十〕

〔四十二〕

〔四十三〕

〔四十四〕

〔四十五〕

〔四十六〕

〔四十七〕

〔四十八〕

〔四十九〕

〔五十〕

〔了〕

314 310 302 289 275 267 254 246 239 234 228 220

# 【零・一】

僕は、ポケモンを燃やしたことがある。

動いているものを燃やすとどう反応するのか見たかつた。動いているものを見ると襲いたくなる子どもだつた。小さな生き物を理由なく殺す征服感が堪らなかつた。道徳心のかけらもない浅はかな子どもだつた。

半ば他人事のように、客観的な言い訳はいくらでも並べられる。ただ、当時の自分を顧みて、何故ポケモンを燃やしたのか正確に説明することは、今の自分には不可能だつた。

記憶の中にはその光景が油汚れのようにベトついていて、まるで神になつたかのように、俯瞰した光景が記憶の中に現れる。その状況を説明出来ても、何故そうしたのかは説明出来ない。

あれは幼い自分が行つた事で、今の僕とはなんの関係もない。言つてしまえばそんな気持ちが強かつた。ひどい事をしてしまつた。それは理解できるのだが、ひどい事をしてしまつた、という罪に苛まれるような、自己嫌悪に陥るようなことは決してなかつた。正直に言えば、反省していないんじやないかと思う。気持ち悪い、楽しい、悲しい、い

ろんな気持ちが搅拌され、言いようもない、何かを超越した感覚に陥つた。燃やす前、その感覚が手に入ることだけは、わかつていたような気がする。どうしようもなく抽象的大が、そんな気分を味わいたかったのかもしれない。僕が出来る説明は、これで精一杯だつた。

僕は、ポケモンを燃やしたことがある。タマムシシティにある大きな公園の林の中で、キヤタピーを燃やした。ゆらゆらとした赤い炎に包まれ、ぐにやりぐにやりとうねる姿は、二十歳になつた僕の記憶から、未だ消えない。

高校卒業後、やりたい事も目標も何もない、ただ飯を食つて寝ているだけの、自堕落な生活を過ごしていた。

親は特に何も言わなかつた。好きにしなさい、とそれだけ。ただ家に居るなら金は入れると口酸つぱく言われたので、僕はバイトを始めた。

大都会タマムシのサラリーマンや、大騒ぎする大学生、カツプルなど、皆が鬱憤を晴らす大衆居酒屋だつた。

ポケモンを連れて入店出来る居酒屋なので、それはもう毎日めちゃくちやだ。退屈したポケモン達が暴れる事もあつたし、トレーナーが酔っ払つているものだから、ポケモ

ン同士喧嘩を始めても誰も止めなかつたり、トレーナー同士酔つ払つて喧嘩を始めるもんだから、バトルかバトルか、と勘違いしたポケモンが暴れだしたり、果てには酒を飲んで酔つ払うポケモンが居るほどだ。とにかく賑やかで、うるさくて、基本的には一人一人のモラルが全て。

近年厳しくなつてきた未成年飲酒以外については、基本的には何が起きてても店側があれこれ口を出すこともなく、ただどんなポケモンなら連れてきて良いかとか、汚したり壊したりは全て自己責任で、そんな荒れ果てた無法地帯な雰囲気を気に入つて、僕はなるべく多くシフトを入れてもらつた。生まれて初めてもらつたバイト代には感動したものだし、毎日毎日入れ替わりいろんなポケモンが見られるのも面白いもので、全く飽きもしない。

「貫太、もう入つて二年だよな。このまま続けてくれるのは俺としては大助かりなんだけど、なんか他にやりたい事とかないの？　ないんだつたら、正社員になつちやう？」

深夜一時前、店の閉店作業で机を拭いでいる僕の背後から店長の声。一旦作業を中断し、一応、認めてくれている店長へ僕は居直つた。

「お話は大変ありがたいのですが、御断りさせていただきます。お店は好きですし、仕事も好きですけど、お店の看板を背負う社員になるのはちょっと」

「アルバイトだって、お店の看板背負つてる氣でやつてもらいたいもんだけどな」

恰幅の良い身体で肩を怒らせ、両手を腰に当てた店長は、随分と不満気だつた。この人はすぐやめてしまうかもしない僕のようなバイト相手にも、徹底した教育を欠かさない人だつた。

「わかつてますよ、この会社のお店に雇われてるんですから、一応わかつてるつもりです。でもほら、正社員となると、アルバイトの面倒も見なきやいけないでしようし、お店の売り上げのためにあれこれ考えたり、僕には荷が重いですね」

「そうすんなりうんと言うとは思つてないよ。とりあえず、今日は伝えるだけ伝えたから、今もう答えが決まつても、またどこかで考えてみてよ。その気になつたら、俺に伝えて」

掃除しつかりな、と店長は片腕をひらひらさせて厨房へ戻つていった。

正直、タマムシの繁華街にあるこの店は、アルバイトが学生である事も多く、出入りも激しい。僕のように、学校へ通いながらとか仕事の副業ではなくアルバイトをする人を、店長や社員はよく可愛がってくれる。シフトに入る回数も多いから、仲良くなつてしまふというのもあるだろう。ぼけつとした僕なんかを雇つてもらつて、ポカをやらかして怒られながらも、決して僕自信を否定せず使つてくれた店長には感謝していた。特に人に自慢できる人生ではないが、こうやつて一つの店で仕事を続けられることは、僕にとって一つの自信になつている。

「作業終わりました、お先上がりります！」

店長はまだ厨房で仕事をしている。社員と二人、明日の仕込みだ。もう時間も深いのに、本当によく働く人達だ。

「おう、お疲れさん！」

二人に挨拶して、僕はバツクヤードで着替え始める。明日はお店が休みなので、ゆっくり家で寝てるか映画でも見るか、とにかくゆっくりしよう、と思っていると、バツクヤードの扉が乱暴に開いた。店長だ。何か急いでいる様子。

「着替え中すまんな」

「どうしたんですか」

「明日暇か？」

「え？」

「明日暇かつて聞いてんの」

何故か若干怒り口調。

「暇、ですけど」

「よし、じゃあ十三時にゲームコーナー前な

「ちょ、ちょっとどういうことですか？ ゲームコーナーって、僕スロットとかパチンコしないですよ」

「いいんだよ、教えてやる」

店長が何をしたいのかよくわからなかつた。そもそも店長と店以外にどこかへ行つたりした事なんて、この二年間で数回程しかない。それが突然ゲームコーナーというのは、どういうことだろう。

「お前の分も出してやるから、勝負しに行こう。その後酒でも奢つてやる。大手を振つて飲みにいけるんだからな。いいな！」

「わ、わかりました」

僕の返答を聞いたかどうか、店長は自分の言いたいことを言つて去つていつた。相変わらずバタバタしている人だな、と思いながら、僕は机に貼られた名簿に載つているバーコードから、退勤処理を行つた。モニターで正常に処理された事を確認する。

「あ、なるほどね。そういうことか」

表示された日付。自分でも忘れていた誕生日。めでたく成人を迎える日だつた。

基本的に雇い雇われの関係だから、普段からお店以外で会う事もない。忘年会や何かのタイミングがあれば、外へ食事しに行くか、店でパーティをする程度だつた。

「素直じやないんだから」

まつたく、とぼやきながらも、照れくささがぬぐい切れず乱暴な口調になつてしまふ店長は嫌いじやない。そんな店長の珍しい誘いなら、特に誰かに祝われる予定もない

し、行つてみたいと、僕は思つた。

## 【二】

普段の黒いシャツに前掛け姿と違うから、一瞬店長だとわからなかつた。ジーンズ姿も新鮮だつたし、グレーのパークー姿も見慣れない。町で見れば普通のおっちゃんだ。

「お疲れ様です。待ちました?」

「俺も今来たところだ」

挨拶もそこそこに、入場していつた店長の後を僕はついていく。初めての経験だ。

全方位から音が集中し、うつ、と一瞬ひるんでしまう程店内はうるさい。思わず耳を塞いでしまいそうになるが、横を歩く店長は平然としていた。

「でも、なんでゲームコーナーなんですか?」

「え?」

「なんで! ゲームコーナーなんですか!」

どれくらいの声で喋れば伝わるのか、いまいち分かりづらい。

「そりやお前! 俺ここしか休みの日行くところないから、連れてつてやれるのここしかないんだよ!」

とんでもなく大したことない理由だった。でも、一度くらい行つてみてもいいと思つ

ていたし、良い機会だ。

目的の台があるのか、スロットコーナーへ向かう店長はずんずん歩を進めていく。若い人から老人まで、とにかく幅拾い年齢層の人が台の前に座っている。嬉しがつたり悔しがつたりするというより、皆無感情かというくらい淡淡とレバーを叩いていた。

自分のお金を賭けてスロットを打つてているのだから、そりや真剣にもなるのかもしないが、もうちょっと楽しそうにしても良さそうなものだ。

「ここですか？」

「ここ」俺の隣で打つとけ

スロットコーナーを何週かした後、店長が座つたのは、伝説のポケモン、サンダー・ファイヤー・フリーザーを主にした台のようだ。暴れる三鳥の攻撃をかいぐり、三つの島へ宝を収める、というのがストーリーらしい。昔、遠い島で伝説のポケモン達が大立ち回りをやらかす騒動があつたが、その時の話をストーリー仕立てにしているのかもしない。

「店長はこの台が好きなんですか？」

「ああ、やっぱ伝説のポケモンっていうのはわくわくするだろ」

「何言つてんだこのおっさん。と思ったが、伝説に心躍る事に若いもおっさんもない。「ほら、この金をそこに入れて。入れたらそのボタン押して」

店長から手取り足取り教わり、スロットを回し始める。何をどうすればいいのかわからぬまま、とりあえず言われた通り回す。この耳を四方八方からつんざくような音の中で、決められた動きを繰り替えす。ぼうつと画面を見て、絵柄を見て、手を動かす。だんだんと頭がからっぽになっていくような感覚に陥る。ふと回りを見ても、全員が同じ動きをする。自分のお金をどんどんつぎ込み、出るかわからないメダルを求めてレバーを叩き続ける。正直、初めてながら異常な光景だと思ってしまう。横にいる店長も煙草を咥えながら同じようにレバーを叩く。

平和な町のシーンからボーナスに入ると、山鳥のいづれかをメインとしたステージに切り替わり、宝を收めにいく話へ変わるようだ。

「お、サンダーレバーカ！」

いろいろ説明していた店長が僕の画面を見て、何か興奮している様子だつた。よくわからぬがあれよあれよと僕の手元にはメダルが溜まっていき、箱が増えていった。

「ルギアが出たら凄いことになるぞ。お！　俺の方も来た！」

何やら店長は楽しそうだ。普段はきっと一人で打っているから、こんな風に隣の人には喋りかけながら打つこともなく、他のお客さんと同様、黙つて打っているのだろう。

「こんだけ出るんだ。今日はいい飯を食おう」

店長は楽しそうだが、僕は頭の中が豆腐を潰したみたいにぐちゃぐちゃになりそう

だつた。演出はそれなりに楽しめるが、音と、同じ動作と、同じような画面をずっと見つめるのは、きっと慣れないと辛いのだろう。

数時間打ち続けた後、僕と店長は上がり下がりしながら両者プラスのまま、ゲームを終えた。

金銀銅に替えられたコインは、交換所で買取という形でお金にしてもらえる。トレーナーは、珍しい技マシンや珍しいポケモンをここで狙うらしい。

小さく窪んだスペースにトレイがあった。交換したコインをそこに置くと、トレイの中に引き込まれ、見合った代金が計算され、返つてくる。モニタに表示された額がそれなりだつたので、僕はぎよつとした。

「あ、あの、今日勝つたお金、店長にお渡ししますよ。元金も、店長のお金ですから」「いいんだよ今日は。全部とつとけ」

勝つたからいいものの、店長が負けて僕だけ勝つていたらなんて気まずかつただろう。店長がその状況で僕に当たり散らす。その状況を想像する自分も嫌だつた。次があつたら絶対自分のお金で打とう。僕は固く決心する。

店長がお金を受け取つている間、交換所の他の景品を眺める。台にラミネート加工された紙が置いてあり、景品名の隣に、必要なコイン枚数が明記されていた。トーナーではない僕には技マシンなんて何が高価で何が珍しいかなんて全然わからなかつたが、

ポリゴン、の名前は僕でも知っていた。人工的に作られたポケモンだ。テレビで見たことのあるくらいで、トレーナーが店に連れて来たことはない。他にも店で見たことのないポケモンのラインナップが書かれている。「景品」という名目でここに置かれていることは、なんというか、道徳的に怪しい気がするが、価値があるものが取引されるのは世の常だ。しようがないと言い切る団太さや、自分勝手さを持つていらないとこんなところで働けない気がした。僕には到底無理だと思ったが、人の事を言えた身分ではない。「さ、飯でも食いにいくか。いい酒奢つてやる。成人祝いだ」

店長は上機嫌で景品交換所を出ていった。置いて行かれてはいけない、と後を追おうとしたが、目に入った名前が、どうしても気になつて僕の足を止めた。

「ケーシイって、こんな少ない数で交換出来るのか」

一番安く設定されているポケモンだつた。恐らく、誰にも交換されないんだろう。ランナップの中では確かに珍しいポケモンではない。僕も何度か見たことがある。それだけに、ただ比較対象として、引き立て役みたいにそこに並んだ名前が、あまりに寂しく思えた。

「どうした、行くぞ」

店長の声に引かれ、僕は気になつたその名前を目に焼き付け、その場を後にした。

## 【三】

成人祝いでひたすら飲まされた僕は、覚束ない足取りで家路へついた。実家ではなく、バイト先の同僚、綾子の1Kのアパート。

インターフォンを押して、返事も待たずドアを開ける。

「何、酔っ払ってんの？ 酒臭いよ」

「酔っ払ってる」

迎えに出てきた綾子を横切り、ふらふらしながら廊下を歩く。流し台に置いてあつた綾子のコップをひつつかみ、水を入れて一気に喉へ流し込んだ。口の中のアルコール臭さが消えるわけではないが、幾分か気分がすつきりする。

「貫太が酒飲むなんて珍しいじやん。友達いないくせに」

「綾子がいるよ」

「私とだつて飲まないでしょ」

会話を勝手に切り上げて、僕はベッドへ飛び込んだ。いい匂いがする。気分は未だ悪だが、この匂いがあればゆっくりと眠れそうだった。

「誰と飲んでたの？」

部屋へ戻ってきた綾子が、壁を背に立膝で煙草に火を着けた。長い脚。その長い脚が妖精ポケモンのように綺麗な色をしていて、美しいのを僕はよく知っている。

「権田さん」

「珍しいねまた」

権田は、店長の苗字だ。綾子は店長の事を権田さんと呼ぶ。理由は聞いたことないが綾子がそう呼ぶので、一緒にいる時は僕まで権田さんと呼んでいた。

「スロットして、その金で飲み屋。変な人だよな」

「あの人博打と店しか知らないからね。でもその様子だと、勝つたんだ。負けてたら権田さん機嫌最悪で帰されてたよ」

「やっぱそうなの?」

「店でも機嫌悪い時あるの知ってるでしょ」

灰を落とす指の動作一つ一つが綺麗だ。

「知ってるけど、成人祝いで誘つておいて、負けたからつて帰すかな」

「そういう人よ」

「随分詳しいんだね」

綾子の吐いた煙が、天井へ上がっていく。会話が数舜程膠着した。

「随分、詳しいよね」

「そうでもないって」

煙草を灰皿へ押し潰し、綾子は立ち上がる。

「今日はもう早く寝な。ベッドで吐いたら殴るから」

去り行く足音。バスルームの空く音。そういうえば綾子は祝ってくれないのかな、と小さな願望が一瞬頭を過ったが、シャワー音を聞いていると、僕は急激な眠気に襲われ、そのまま意識を落とした。

朝起きると、脳がまだふんわり浮いているかのようで、頭がガンガンして、明らかに一日酔いだつた。

「おはよう」

綾子は昨日僕が寝る直前に見た時と同じ座り方で部屋にいる。

「おはよう。二日酔いだね」

「うん。きついけど、起きられない程じゃない」

酒が抜けきらない身体を無理やり起こし、僕はベッドから這い出て立ち上がる。

「ごめん、寝床取っちゃって。昨日眠れなかつた?」

「寝たよ。貫太の隣」

「そつか」

「朝は?」

「味噌汁飲みたい」

「いいよ」

綾子はバイト先の先輩だ。一生懸命働くんだね、と声をかけられてから何となく仲良くなり、気づけば一緒に住むようになつた。付き合つてる訳でもない。親友な訳でもない。でも、一緒にいると心地よい。綾子はあまり自分のことを話さなくても一緒にいるのが楽だから、と僕のことを気に入つてくれている。そしてそれは僕も同じだった。

一人でいるのは寂しい。綾子がしおらしい事を言つたのは、僕が最初にこの家に来た晩だけだ。

「シャワー浴びてくる」

「ごはんはいらないよね」

綾子の質問にいらない、とだけ返して、僕はバスルームで熱いシャワーを頭から被つた。汚れとともに、まとわりついている二日酔いの嫌な感じも落ちていくし、気分もすつきりする。

バスルームには、柄のついたトランセル型のボディブラシが置いてある、それ以外にも、ポケモンが描かれた布団を使つていてるし、同じような小物や柄物が多くつた。好きなんだろう、と思つたから特に何も聞いていない。綾子もトレーナーではないからポケ

モンを持つていなーいし、持とうと言う話も聞いたことがなかつた。

バスルームを出ると、綾子が台所で味噌汁を作つてくれてゐる。いい香りがする。豆腐とわかめ。僕が好きな具だ。

「もう出来るから、座つてて」

「うん」

大分すつきりした身体になり、新しい服に着替えてから僕はゆつくりと腰を落ち着ける。今日はバイトだから、それまで大人しくしていたいところだ。

「食べな」

「ありがと」

コト、と丸テーブルに置かれたお椀。立ち上る湯気。味噌のいい匂い。酒でどうにもどこか重い身体に、とても染みそうだ。綾子は僕の横に脚を伸ばして腰かけ、テレビをつけた。

「そ、う、い、え、ば、さ、最近、ポケモンが行方不明になつてゐる事件つて知つてゐる？」

ニュースを見ながら、そんな事件があつたことを思い出す。

「ネットで見たよ。タマムシで起きてる事件でしょ？ 行方不明になつてゐるだけじゃなくて、中には燃やされた死体が出てきてるつてやつ」

作つてもらつた温かい味噌汁をゆつくり飲んでいると、二日酔いの身体に効いてく

る。

「そう、それ」

「それがどうしたの？」

「何のために燃やすんだろう」

何のために。そんなのわかる訳がない。ポケモンを燃やして殺す理由なんかあつてたまるか。それは人だろうがポケモンだろうが同じだ。

「燃やしたいから燃やすんだろうけど、どうして燃やしたいかなんてわかんないよ」「あ、ほら、これこれ、このニュース」

テレビのニュースでは、丁度事件の話をしていた。被害者が所持しているモンスター ボールへ戻せるかどうかで判別するらしく、見つかった死体全てが行方不明になつたポケモンであることが判明しているとのことだ。狙われているのは小さいポケモンばかり。お金になりそうな珍しいポケモンというよりは、誘拐しやすそうなポケモンを狙つたという感じだ。一人でやつているのかもしれない。本当に燃やすためだけに選んでいるのだとしたら、それは本当に理解不能な異常者だ。

「ひどいね本当に。早く捕まればいいけど」

綾子は露骨に不快そうな顔を浮かべていた。あまり感情を表に出すことないので、その表情は珍しかつた。

「なんか、思うところあるの？」

「ちょっとね」

「そつか」

テレビには、燃やされたポケモンの名前が羅列され、注意喚起と共に防犯強化を促している。僕でも知っているし、店に来るトレーナー達が所持しているポケモンが多い。ポッポ、コラツタ、マダツボミ、色々並ぶ名前から、ふと頭に記憶した名前が思い浮かんだ。

「ケーシイカ」

ゲームコーナーにあつた、一番安いポケモン。あそこに並んだポケモンなんて、燃やす対象としては一番足がつきにくそうだ。

「……ねえ綾子。僕がポケモンを持つって言つたら、どう思う？」

「貫太がポケモンを？ ポケモンのこと全然知らないのに？」

「やっぱり駄目？」

「駄目というか、なんでそんな気になつたのかそっちの方が気になる。どつちかというとポケモンを持つ怖がつてたというか、遠ざけてたじやん。嫌いなんだと思つてたけど

「嫌いだつたらあんなところでバイトなんかしてないよ」

「それもそうね」

何故ポケモンを持つ気になつたのか、何故そんな事を口走つたのか、正確に説明することは今は出来なかつた。少なくともあのケーシイが可哀想だから、という訳ではないと思う。こんなニュースが流れていて、標的になりそだから引き取りたい、というのも違う。それならあそこに並んでいるポケモン達全員引き取らないと変な話だ。では何故なのか。わからないが、あそこにいるポケモンならば持てると、僕は今そう思つてゐる。

「理由は、話せない。今は自分でもうまく説明出来ない」

「捕まえるにしても、貫太ポケモンを持つてないでしょ。借りてくるの？」

「いや、捕まえるんじやないんだ」

「捕まえないの？」

「捕まえない。ゲームコーナーのポケモンだから」

「そう。じゃあ、また勝たなきやね」

ふうん、と綾子はもう半ば興味を失いかけていた。ポケモンを持つ僕を綾子が嫌だと言えば持たないつもりだつたが、特に嫌な訳でもなさそうだ。

バイトまで時間はある。今日はゆっくりしていようと思つたが、もう一度あのゲームコーナーへ行つてみよう。

「綾子も一緒にゲームコーナー行く?」

「行かない。お金がもったいない。後、ポケモンを持つならいろいろ調べておきなよ。放つておいたら嫌われるよ」

「わかってるよ。やれるだけは、やるつもり」

「言つたはいいが、自分がポケモンを持つところなんてまだ想像出来ない。何がやれるのかもわからない」

それに、自分がポケモンを持つて良いなんて思つたこともなかつた。あの事件の犯人と同じ事をしたことがある奴なんて、トレーナーの資格があるとは思えない。

何故ポケモンを持ちたいのか。燃やしたいからではない。そうではない。絶対に違う。それだけは断言出来る。なら何故。ただのきまぐれか、ケーシイを不憫に思つたのか。

今までだつて、捨てられたポケモンとか、迷子のポケモンなんていくらでも見てきた。ケーシイの何に惹かれたのか、自分でも本当にわからない。

テレビでは、既に例の事件から次のニュースへ移つていた。

「多分さ、燃やしている人つて普通の人なんだよ。普段は私達と同じように生活している人だけど、ちよつと人とずれた感覚を持つてているというか、この社会では認めてもらえない性癖みたいなものを持つてるんだと思う」

それはある意味で、半分正しい。

「それが、僕だつたら？」

綾子はきつく僕を睨んだ。冗談でもちやかすような返答が気に障つたようだ。

「笑えない」

かつてない不快感を示していた。僕が犯人だと、綾子は嫌なのだ。それはそれで、嬉しいが。

「貫太が何をしていてもいいけど、ポケモンを燃やすのはダメだね」

「わかってる。じゃ、僕はもう行くよ。味噌汁ありがとう、おいしかったよ」

適当に返答し、僕は二日酔いの身体に鞭打つてアパートから逃げるように出た。カンカン、とアパートの階段を降りていると、踏み外しそうになるくらいには動搖していた。僕は、ポケモンを燃やした。

その事実は揺るがない。

そしてその事実に、僕は今この歳になつて改めて怯えている。

あのニュースが、色々な事を思い起させた。

何故綾子があれだけきつい顔をしていたのかわからぬが、僕の事を咎めているようで、生きた心地がしなかつた。普段はどんなニュースにも大した興味を示さない綾子が、何故あれだけ憤つてゐるのか。理由を尋ねるのは難しそうだ。

このざわつく気持ちを抑えるには、スロットでも打つのが良いだろう。  
僕は今日もまた、ゲームコーナーへ足を運ぶ。

## 【四】

ビギナーズラックというのは本当にあるものなんだと僕は痛感した。昨日はあれよあれよと箱が増えていったのに、今日は稼いだはずのお金が焚火で燃やす紙みたいに消えていく。欲を出しすぎてはいけないとは言うが、そんな多くを求めているわけではない。僕が求めているのはあのケーシイを交換できるだけのメダルだ。

やつと出始めたと思ったら、今度はやめるタイミングがいまいち分からず、次第にまたメダルが減っていく。時間を潰せるのは良いが、自分のお金でやるとひやひやしてしようがない。

結局、バイトが一時間後に迫ったところで、僕は切り上げることにした。本当にケーシイを交換出来る枚数と、プラスアルファだけだった。途中、本当にマイナスが続いて焦つたが、どうにか持ち直してよかつた。こんなゲームを続けていたらどうにかなってしまいそうだつた。

とにかく、枚数を確保出来たので僕はゲームを終え、コインと交換し、すぐに交換所へ出向いた。

ラミネート加工された紙をもう一度上から追つていくと、やっぱり見間違いはない。

一番安い値段でケーシイが景品として並んでいた。隣に用紙と鉛筆があつたので、欲しい景品に丸を付け、メダルと一緒に提出する。そうするよう、フローを示すぼろぼろの紙が壁に貼られていた。

「……本当に出てきた」

余つたメダル分のお金と、モンスター・ボールがトレイに乗っていた。こんな簡単に、ポケモンが僕の手元に。

その小さなボールを手に取るだけなのに、随分遠くにある気がする。まごまごしてい ると、後ろに人が並んでしまった。

僕は意を決して、モンスター・ボールを掴んでポケットにしまい込み、まるで万引き犯 が店から出て、誰かに追いかけられないか気にするかのように、バイト先へ走った。

今日も、バイトが終わるとすぐに綾子の家へ向かつた。

彼女は友達と朝まで飲んでくるとのことなので、部屋には僕だけ。冷蔵庫には朝作つ てくれた味噌汁の鍋が冷蔵庫に入っていた。明日の朝、また飲みたい。 僕はベッドへ腰掛け、ポケットからモンスター・ボールを取り出した。学校の授業で手 に持つて以来だ。使い方は、うろ覚え。

「えっと、確かこのボタンを押して、と」

小さかつたボールが、手のひら大に収まる。

「この状態なら、投げるか、手で開けられたはず、だけど」

部屋は狭く、下手な事はできない。僕はボールの上下をもつて、ゆっくり力を入れてみた。有名なトレーナーが、かつこよく片手で掴んだままボールを開けていたのを思い出す。卵を片手で割るようなものだ。

「お、おお」

赤い光がぐにやぐにやと揺れ動き、やがてポケモンの形に形成されていく。

ケーサイが、丸テーブルの上にポトリと落ちた。足を延ばした態勢で、どさつと座つている。

「こ、こんばんは」

咄嗟に挨拶してしまったが、特に反応はない。寝ているのかと思い、おそるおそる触ろうと手を伸ばしてみると、ケーサイはびくりと身体をビクつかせる。その反応に僕の方がびっくりしてしまって、思わず手を引っ込めてしまった。

「ごめん。いきなり、怖いよね」

深夜だというのに、外に出すのはまずかつたのだろうか。そういえば、今日はケー  
シイに何も食べさせていない。

僕は絶望的なまでにポケモンのことを知らなかつた。とりあえず、触れ合うにしても何かきっかけが必要だ。

「綾子が料理をする人でよかつた」

男の一人暮らしみたいな、ビールとお茶しか入っていない冷蔵庫ではなく、それなりに生活感のある冷蔵庫。何かケーシイが食べられそうなものはないかと漁つていると、ビニール袋に入つたモモンがあつた。

「ほら、お腹空いてないか?」

取り出してきたモモンをケーシイの前にそつと置いてみる。すぐに手は出さず、ケーシイはじつとその甘い実を見つめていた。

「もしかして、モモンは駄目?」

携帯を取り出して、僕はすぐに「ケーシイ」の文字を検索欄に放り込んだ。色々調べていると、どうやらモモンは食べそうだと分かつた。ついでにケーシイのことを色々調べてみよう。

「あ、食べた」

気づけばケーシイがモモンを手に取り齧つていた。咀嚼し、飲み込むと、嬉しそうに一鳴き。その姿に、思わず微笑みかけてしまつた。携帯を放り出して次の瞬間をじつと見ていると、ケーシイはモモンを置いてまた眠つたように固まってしまう。恥ずかしが

りやか、警戒されているのか。よくわからないが、僕が見ていると食べ辛いのかもしれない。

携帯を見る僕とケーシイのだるまさんが転んだが何回か続いた頃、ようやくモモンはなくなつた。ペロ、と手をなめると、また元のだらんと座つた状態で固まる。

「おいしかつたのかな。明日もうちょっと色々揃えるから、今日はモモンで我慢してくれよ」

まだ冷蔵庫にあつたモモンをいくつかもつてきて、ケーシイの前に置いておく。

ケーシイの情報をネットから拾えるだけ拾つてみた。エサは木の実でもいいが、基本は好みのポケモンフーズを与えるのが良いらしい。明日タマムシデパートで買おう。

とにかく睡眠時間は長いようだが、警戒するとテレポートで逃げてしまつたため、ケーシイのトレーナーは苦労する事が多いらしい。果てしなく不安だ。

超能力を使えば使う程睡眠時間も長くなり、バトルもしないのに寝ている時間の長いケーシイ程そのトレーナーの力のなさを露呈するらしい。ケーシイつてそんなに難しいのか、と頭を抱えた。

更には眠つても警戒状態は続いているらしく、危険が迫るとテレポートしてしまうケースもあるようだ。

事故ケースの一つに、トレーナーを警戒したケーシイが、テレポート先を誤つて家の

外に出てしまい、車に轢かれるというケースがあつた。これは読むんじやなかつた、と後悔。

とにかく、いろいろ調べてみてわかつたのは、ケーシイは育てるのが難しいということだつた。

「僕でごめんな」

モモンの実をすべて食べ終えて、又元の体勢に戻つてゐる。おそるおそる近づくと、まだ身体をビクつかせる。どうしたらしいのかわからず、とりあえず僕は手を差し伸ばし続けることにした。一体僕はどう映つてゐるのか。エサをくれるいい人、くらいに映つていて欲しい。

ケーシイが僕の事を何も知らないように、僕はケーシイの事を何も知らない。どういう経緯でのゲームコーナーにいたのか知らないし、どこで生まれたのかも知らない。どういう扱いを受けていて、そもそも誰のポケモンで、

「……誰のポケモン？」

そういうえば、このケーシイは誰のポケモン？

おや、という意味では僕なのか？ それとも、最初にケーシイをボールに入れたトレーナーがおやか？ いろいろ考えていると、ケーシイがおそるおそる僕の方へ寄つてきて、その眠そうな顔をペトンと僕の手のひらへ乗せてきた。ああ、よかつた。いろいろ

ろ考えることはありそなうだけど、一先ず考えるのはよそう。ゆっくりと抱き寄せ、僕達は一緒に布団へ入つた。弱弱しい力で頭を寄せ、小さく鳴いたケーシイに、お礼を言われた気がする。

感想は二つ。

かわいい。

これは僕の素直な感想。それともう一つ、バイト先で見ているから分かつた氣でいた。

ポケモンとは、生き物だ。

人間にも大して明るくないが、ポケモンにはもつと明るくない僕だからこそ、そう感じる。ケーシイを抱いていると、ざわついていた心が、落ち着いていく気がした。鼓動が聞こえる。生きているんだ。

眠つたのかどうか、そんなこともわからない僕だが、ケーシイが心地よさそうに寝息を立てているのを見届け、僕も目を閉じた。

# 【五】

朝起きると、ケーシイはベッドの端にちょこんと腰かけていた。

「おはよう」

と声をかけると、跳ねるように飛び上がり、そのまま宙に浮かんで僕の方へ向き直つた。

びっくりさせたのを謝る前に、浮かんでいる姿に僕がびっくりしてしまった。知つてはいたけど、浮かんでいるというのは間近で見ると凄いものだ。

「驚かせるつもりはなかつたんだ」

ベッドから出て立ち上がり、宙に浮かぶケーシイに両手を差し出すと、またおそるおそる僕の腕の中に入つてくる。かわいい奴だ、と思いながらも、ポケモンつてこんなにも臆病なものなのかと、不思議に思つた。店に来るポケモン達なんて、皆ある程度ふてぶてしいというか、トレーナーに臆している様子なんて見たことがない。

抱きかかえたまま座り、テレビをつける。手の中に入つてしまえば、大人しい。テレビの話が頭に入つてこない。あくびは止まらないし、まだ眠り足りない気がする。

「いや、駄目だな。今日はいろいろ揃えるんだから」

すつきり起きるため、シャワーを浴びることにした。ケーシイをそのままテーブルの前に座らせ、僕はバスルームへ向かう。

熱いシャワーを被りながら、今日どうするか頭の中で考える。まずは一緒にタマムシデパートへ向かおう。食べ物と、何かおもちゃみたいなものも買えれば良い。薬も用意は多少しておこう。寝床もあつた方が良いか。後は、少し外を一緒に散歩でもしてみよう。

中々いいプランだな、と起きてきた頭とすつきりした身体で気分良くバスルームを出ると、綾子が帰ってきていた。

「ただいま」

「おかえり」

と、挨拶はいつも通りだが、胡坐をかけて座った、綾子の黒タイツの足の上にケーシイが乗っていた。羨ましい。

「ポケモン、貰つて来たんだね」

「まずい？」

「いいよ、別に」

そう言つて、綾子はケーシイの頭を撫でた。

「そいつ、臆病じゃない？」

「そうだね。私が帰つて来たとき、バタバタ音を立てて布団の中に隠れてた」「で、もう綾子にはなついていると」

「そういう訳じやないと思うよ。貫太、ポケモンに触る時おつかなびつくり手出したでしょ」

「昨夜の事を思い返すと、確かにそうだ。」

「あんまりおつかなびつくり手出すとポケモンも警戒するし、怖がつちやうよ」

「綾子はポケモンの事詳しいんだな」

「そういえば、店でもお客様のポケモンと自然に触れあつてている。」

「詳しくないから」

「詳しいよ。少なくとも僕よりは」

「詳しいって言わないで」

「綾子が僕を睨んでいる。不快にさせる様な事を言つてているとは思わなかつたので、面食らつてしまつた。」

「わ、わかつたよ」

「ちよつと寝るから」

「ぶすつとして明らかに機嫌を悪くした綾子は、ケーシイを僕に預けると、いそいそと寝巻へ着替え始め、さつさと布団に入つてしまつた。よく分からぬが、嫌だつたのだ。」

これからは言わないようしよう。

綾子の様子に怯えてしまつたケーシイは、ぐりぐりと僕の胸に頭を擦りつける。

「大丈夫だよ。きっとすぐに機嫌直してくれるから」

皆それぞれ、事情は様々。話したくなつたら、分かる時がきたらそれでいい。僕と綾子は、そういう関係なのだから。

ケーシイにはモンスター・ボールに入つていてもらおうかと思ったが、初めて外出するので一緒に歩く事にした。と言つても、ケーシイは隣をふわふわ浮かんで移動している。

タマムシで何か買い物をすると言えば、タマムシデパートに行けば間違いない。それはタマムシの人だけではなく、カントー地方に住む人全員に共通だと思っている。個人の好みはあるから、地元の商店とか、町のフレンドリイ・ショッピングが好きだと言う人もいるだろうが、僕みたいな素人が行くならタマムシデパート程助かるものはない。行けば大抵、欲しいものは揃っている。

「さ、着いたね」

特に用もないから普段は来ないため、随分久しぶりだつた。タマムシの中でも随分大きな建物。賑わう人々。きっと、流行りのレストランやカフェなんて洒落た店も入つて

いるのだろう。いつもだつたら人込みでやかましくてあまり好きな場所ではないが、昨日一昨日とゲームコーナーを経験しているからか、随分ましに思える。こちらの方が、まだ健全だ。

ケーシイは、タマムシのメインストリートに出た途端、人込みに怯えて浮かぶのをやめ、僕の頭にしがみついている。迷子の心配はないが、まあまあ頭が重い。

「まずは食料かな」

エスカレーターで上階へ。あまり気にして見たことなかつたが、とにかくどこを見渡してもポケモンだらけだ。広告、着ぐるみ、インテリア、店を闊歩する本物のポケモン達。売っている物もポケモン用品を占める割合が非常に多い。ポケモン用品とポケモンに関係しない品物がフロアで分かれているため、目的の三階に降りれば、僕のほとんど知らない世界が広がっていた。

ポケモン用品の店に入つたのはいつが最後だつたか、覚えていないくらい前のことだ。両親もポケモンを持つていないし、それくらい僕には縁がない場所だ。

何がどこにあるかわからず表示板を確認しながらうろうろしていたが、思つたよりすぐり見つかった。

「ポケモンフーズはここか。ケーシイ、何味が好きなんだ？」

袋を頭越しに見せると、首を横に垂らしてじつと見ていて、何が何だか、という風

にきよとんとしている。そりやそうだ。

「そういえば、性格によつて好みの味の傾向がわかるなんて書いてあつたな」  
携帯で調べると直ぐに分かつた。性格は見たまんま臆病だとすると、

「あまいものが好きなのか」

どおりでモモンをおいしそうに頬張つていた訳だ。個体差はもちろんあるだろうが、甘いものは好きで間違いない。

「一種類じや飽きるし、いくつか買おうな」

食べ物だということはわかつているのか、いくつか持つていた袋を籠に放り込んでいくと、ケーシイが頭の上で揺れて喜んでいた。買いがいのある奴め。

一先ず食べ物を買い込み、次は何か遊べるものも買おうと店内を歩いていると、モンスター・ボールのガラスケースが目に入つた。一応、今ケーシイが入つていたモンスター・ボールは持つて来ている。新しいボールを買つてもそれに入れ替える事が出来ないのは、僕でも知つていた。小さい頃に習つた、と思う。

どんなボールがあるのか気になり、ボールコーナーのショーケースを眺めていると、昨夜の事を思い出した。

「こいつは一体、誰のポケモンなんだ？」  
「あの、ちょっとお聞きしたいのですが」

「はい。何でしようか?」

ショーケース越しに、男性店員に話しかけると、良い笑顔で返事が返ってくる。

「トレーナーが購入したボールでポケモンを捕まえれば、そのトレーナーがおやになるんですね?」

店員さんは快活に返事をくれ、そんな雰囲気だつたが、何を今更そんな当たり前の事をとでも言いたげに、急に不審そうな顔を浮かべた。

「ええ、そうですね」

「人からもらつたポケモンだと、どうなります?」

「ええと、人からもらつても、元の持ち主がおやである事は変わりません。ボールの個体番号は、購入時提示いただくトレーナーカードのIDナンバーと紐づきますので、モンスター・ボールを調べれば、それが誰の所有物なのか判別する事が出来ます。ですので、ボールに入つたポケモンは、そのボールの所有者がおやとなりますね」

「なるほど。ご丁寧にありがとうございました」

「他にも不明点がございましたら、気軽にお声がけ下さい」

不審がりながらも、丁寧に答えてくれるのは流石タマムシデパートの店員といったところか。

ポケモンとトレーナーの関係は、IDナンバーやおやがどうとか、それだけで決まる

話ではないはずだが、今の話だとケーシイのおやは手続き上僕ではないということだ。ではこいつは一体誰にどう捕獲され、どこから来たのか。自分とケーシイの関係性があまりに不安定なのでどうも気になつてしまふが、言つてしまえば僕と綾子の関係と同じようなものだ。

相手の事をよく知らないまま、関係を続けていく。そこに居心地の良さを僕は感じていたんじやなかつたのか。

そう考えれば、おやが誰かなんて大した問題ではない気がする。僕らは僕らの関係を作っていく。まだ、今はまだ、それでも良いと思う。

## 〔六〕

買ったかつた物は揃つた。

タマムシのメインストリートを歩きながら、ポケモンフーズをケーシイに渡してやる。肩車をして、頭の上で機嫌良さそうに鳴きながら揺れているから、気に入つたのだろう。甘い味で正解だつた。

バイトまではまだ時間があるので、散歩がてら予定通りタマムシ公園へ向かうことにした。スポーツの出来るグラウンド、多種多様な遊具、ジョギングやウォーキングコースもある、大きな公園だ。タマムシの発展と平和を象徴したモニュメントが入口に設置されており、よく待ち合わせの場所にも使われていた。

僕は専ら友達と遊ぶ目的で通っていたが、もう何年も行つていない。

「変わつてないなあ」

バスに乗つて十分程。タマムシの都会風景に一見そぐわない木々が見え始める。懐かしい光景だ。公園前のバス停で降りてすぐ前の入口から入つてみれば、まつたく昔と変わつていない。入口の柵の塗装が若干剥げているのを見れば、時が過ぎているんだな、ということは分かる。

遊具で遊んでいる子ども達を横目に、公園を横切る。螺旋状の大きな滑り台は、滑りが悪いのに昔から大人気だ。

ゲームコーナーにいた時はこんな風に外をうろうろすることもなかつたのか、ケーシイは興味深そうに僕の頭から離れ、キヨロキヨロしながら浮かんでいる。

「来てみたはいいけど、本当に散歩しかする事ないよなあ。バトルなんか、全然分からな  
いし」

ベンチに腰掛け、騒ぎながら駆け回る子ども達を眺める。昔は僕もあんな風に遊んでいた。

そして、この公園だ。僕が昔ポケモンを燃やしたのは、この公園の林の中だつた。  
「十年以上前、なんだよな」

夕方だつた。夕を知らせるチャイムが鳴り、遊んでいる仲間達が散つていつた後、僕は一人公園に残つていた。その日、始めから燃やす目的で公園に行つたのではない。皆で遊んでいる時見つけた、サイズが大きく火力の強い、ターボライターが原因だつた。木の葉を拾つては燃やし、踏みつけて消してみたり、火を付けた枝を持つて友人を追いかけたり、追いかけ回されたり、今思えばとんでもなく危ない事をしていた。何が危なくて何が怖いのか、それを行つたらどうなるのか。そういう事に想像力が働かない所は、露骨に子どもだつた。

皆ライターで遊ぶ事などすぐに飽きて他の遊びをしていたのだが、僕は密かにライターを拾つてポケットへ入れていた。皆で火遊びをしている時、ふと見かけたポケモンを見て、多分、燃やしたらどうなるんだろうな、と思つてしまつたのだ。

薄暗くなり当たりの輪郭がぼやけていく中、一人林の中に入つた僕は、木の葉をかき集めた自然のベッドの上に、見つけたキャタピールを押さえつけて燃やした。言葉にするとあまりに短く、グロテスクでひどいその日の記憶が、断片的にまざまざと蘇つてくる。今の僕からすればあまりにありえないでの、他人がやつたかと思う程だが、記憶に、間違いはない。

学校でポケモンに関する授業だつて行つていた。ポケモンと人はお互いに助け合う生き物だ、なんて授業もやつていたはずだ。恐らく一般的に身につくであろう道徳が、僕には欠けていた。それはうちの家庭がまつたくポケモンと接点を持たないから、という理由もあるかと思う。ポケモンが生き物である事なんてどうしようもなく当たり前の事なのだが、僕は先日までそれを肌で感じられなかつた。

人間以外は基本的に物、という感覚が、根幹の部分であまりに強かつた。

「なんにしても、燃やしたのは僕なんだよな、絶対」

久しぶりにタマムシ公園へ来たせいか、昔の事がいつもより多く蘇つてくる。

ケーシイは、ベンチ横にあつた鉄棒に尻尾を巻き付け、器用にぐるんぐるん回つて遊

んでいた。

「あのケーシイ、お兄ちゃんのポケモンなの？」

鉄棒で回っているケーシイを見て、子どもが数人寄ってきた。俺も出来るぞ、と言ひながら少年達の中の一人がケーシイの隣で逆上がりを始める。

流石にポケモンの運動能力と言うべきか、人間が逆上がりするより、よっぽど綺麗にぐるんぐるん回っている。

子ども達が集まつて来ているのに気付いて、ケーシイは慌てて鉄棒から尻尾を離しかと思えば、そのまますつ飛んで僕の胸に飛び込んでくる。

「ごめんな。こいつ臆病なんだよ」

「でもケーシイなら、びっくりしたらテレポートするはずだけどね」

「え？」

へんなの、と言いながら子ども達は散つて行く。

言われてみれば、確かにそうだ。トレーナーを警戒してテレポートをしてしまうから、意外と捕獲が難しいなんて書かれていたのを思い出した。超能力を使う時間が長ければ長い程眠る時間が長いとも書かれていた。

今朝、こいつは僕より早く目覚めていたし、どんなに警戒していてもテレポートをする様子はない。何故だ。まだ使えないだけなのか？

胸の中で子ども達に怯えたケーシイが、ただ臆病なだけではないことに、嫌な想像しか出来なかつた。

## 【七】

翌日、ケーシイを綾子に預けて、僕はタマムシ図書館へ向かつた。ネットで調べれば良いのかかもしれないが、書籍に目を通して情報が得たい。少しでも信頼性の高い情報が欲しかつた。

エスパーPokémon大全。

バトルのスマーチー今最先端の勝ち方——

エスパーPokémonの技を知れ！

それっぽいタイトルの本を引っ張り出し、雑誌から学術書まで、色んな本をかき集めてざつと捲つてみたが、どれも違う。多分バトルや技の本ではない。ただ、ケーシイは生まれてから最初に覚える技がテレポートだという事実は、良い情報だつた。これは僕の予想でしかないが、あれは育て方の問題だ。だとすると、例えばそう、育成に関する本とかが当てはまるのかもしれない。

「違う、これじゃない。どれを見ればいいんだ」

ポケモン虐待や暴行の早期発見、防止するための法整備や社会制度の設計。これも違う。今知りたいのはシステムではない。実ケースだ。

その日の午前中、朝からずつと色々な本をひつくり返し、ポケモンの本を漁り続ると、僕の想像したケースと似た事例をいくつか見つける事が出来た。

ポケモンの密輸集団や、マフィアなど犯罪集団に捕獲され、酷い扱いを受けたポケモンのケースで、心的要因から特定の技が使えないくなるケースがあるらしい。逃げ出すのを防ぐため行われた精神的支配が原因の例だ。

野生を知らないポケモンが、トレーナーに従順故きつい躾や教育を受け入れ、技が一部使えないくなるケースも見られた。バトルをするトレーナーの例だつた。

状況やポケモンのタイプ、技は様々だが、どのポケモンも一様に、普通に野生で暮らしていたら考えられない扱いを受けていた。

ケーシイがそういう扱いを受けていた、とは限らない。ただ、あのゲームコーナーは昔から暴力団やマフィア系列の店だなんて噂は、タマムシの人間からすると耳にタコが出来る程聞いてきた。景品として置かれているポケモン達の扱いなんて、お世辞にも良いなんて言えないだろう。

あのゲームコーナーに居る前からそうだった、と考えられなくもないが、こういう例があるとわかり、ケーシイが事実テレポートを使えないのだとしたら、どうやつて元通り使えるように出来るのだろうか。

いろいろ調べればいくつか方法はありそうだつたが、とにかく今は、ケーシイをしつ

かり安心させてやる方が先だ。僕が調べたような扱いをケーシイが受けているのだとしたら、これからどう接していけばいいか、そつちを考える方が大事かもしれない。

「……はは、すっかりトレーナー気分だよ」

ペーパートレーナーは、ポケモンを持った途端すっかりその気だ。調子の良い自分が笑えてくる。ろくに本も読んで来なかつた無学な僕が、図書館にまで来て偉そうに書物を広げている。つい先日まで、ポケモンを持つことなんて考えもしなかつたトレーナーが、だ。トレーナーになるなんて選択肢は今まで僕の中ではありえなかつたが、ポケモンを意図的に避けていた訳ではないのだ。綾子に言つた様に、避けていたらあんな店で働いてはいない。ただ意識しないようにしていただけ。自分がどうしようもなく非道な事をした事実に、十年以上目を背けていただけだつた。

お互ひの事を知らないまま過ごす事に居心地の良さを感じていたのは、嫌な事に、都合の悪い事に目を背けられるからだ。

そんな僕は、あのニュースで思い出さずには、目を向けずにはいられなかつた。綾子に話を振られる前から、僕はネットの記事で知つていたのだ。数が違うだけで、僕はあの犯人と同じ事を行つている。捕まればとても重い罪で裁かれるだろう。しかし、僕はそうではない。少年だった僕はあの時捕まつても少年法に守られて裁かれなかつたし、今更自首しても何の罪にも問われない。

あの事件のニュースを見てもやもやとしていた時、ゲームコーナーの景品交換所で、僕は景品一覧にあつたケーシイに目を奪われた。

野生のポケモンを捕まえる？ 人のポケモンを育てる？ そんな事僕には出来ない。どこ出身かもわからない、どんな扱いを受けているかもわからないケーシイを手元に置き、育てる。僕のポケモンだか誰のポケモンだかわからない、そんなふわふわとした関係性で、ポケモンと接する事が出来る。責任が、軽い気がした。こんな僕でも、トレーナーになれる気がした。それだけで自分が救われる気がした。ケーシイを育てて、僕が助かろうとしている。結局僕は、自分の事しか考えていない。

自分の腐った魂胆を自覚して、思わず拳が机を叩いた。静かな図書館にそぐわない音が響く。周りが僕を見ているだろう。

こんなにも自分に苛立つている。仰々しく、偉そうに色んな本を並べて、調べて、だから何なんだ。

所詮僕は、ポケモンを燃やした人間だ。

ケーシイを大事に思えば思う程、目を向けてこなかつた事実の重さが、今更になつて、本当に今更になつて、沁み込んでくる。

## 〔八〕

自分に苛ついていきり立つたままでは、とてもではないけど帰れない。図書館を出て外をふらつき、時間を置いてから綾子の家へ戻った。

「じゃあ私バイト行つてくるからね。ケーシイにちゃんとご飯あげるんだよ」

「わかってる」

出かけて行つた綾子。残されたのは、僕とケーシイ。初めてボールから出した時と同じ体勢で、机の上に座つている。僕も同じ体勢で、そつと隣に座る。ケーシイと触れ合う事に多少慣れてきたのか、ケーシイが僕に慣れてきたのか、最初程のびくつきはないが、やはり人が近くに寄ると一瞬その場から離れようとする動きは、変わらなかつた。

「お前のしたいようにしていいんだからな」

頭をわしわしと撫でると、ケーシイは嬉しそうに鳴く。嬉しそうに、なんていうのは僕の勝手な想像かもしね。それでも、隣に座つた僕の足の間へもぞもぞ入つてきて、すっぽり収まつたケーシイの姿を見ていると、嬉しそうにしていると思いたい。

「外で晩飯にしようか」

少しでもケーシイが安心して、びくつかずに暮らせるようになつてほしい。僕の身体

が空く時間で、ケーシイの負担にならない範囲で外を一緒に出歩くのは、悪くないと思う。

「家の中にずっと居るよりは、良いだろう。」

「よし、行こうか」

ケーシイを抱いて立ち上がる。財布と携帯だけポケットに入っているのを確認していると、ケーシイは理解したのかふわふわ浮いて肩に両足を掛ける。頭の上に手を置いて、準備完了ということだろうか。肩車が気に入っているらしい。

「ポケモンフレーズばかりじや飽きるもんな。何がいいかな」

一緒に入れる店だとすると、自分の働いている店でもいいが、今日はそうじゃない。ケーシイと町を歩いて初めて入るお店が良い。

僕とケーシイだけが知つてゐる事を作るのは、こそばゆくも嬉しかつた。

昼間は随分と偉そうな事を考えていたが、どう育てるとかどう接するとか、そうじやないかもしね。僕の感覚的には、ただの友達でいたい。難しい事は僕にはまだ理解出来ないし、上から目線で接するのではなく、対等でいた方が良い。友達のいない僕には、それはとても喜ばしい事だつた。

タマムシの夜は明るい。裏手に入つても店の明かりがいくつも灯つていて、人で賑

わっている。赤提灯がぶら下がったお店や、ピンクの看板がチカチカするお店、黒塗りの扉が入りづらさを醸し出すバーなど、ケーシイと一緒に入るには苦しいお店が多い。とにかく、落ち着いて食事が出来るところへ行きたい。

「ずっとタマムシに住んでる癖に、全然良いお店とか知らないんだよなあ」

綾子ともつといろんなところに出かければよかつた、なんて思うが、外で食べようよ、と提案すると決まって綾子は私が作るからいい、と腕まくりを始めるのだ。

そういうえば、タマムシのポケモン誘拐事件はどうなつてているのだろうか。犯人の目星でも付いているのだろうか。こうやって夜道を歩いているところを襲われでもしたら、僕はケーシイを守れない。

タマムシとは言え、繁華街から外れて裏手へ入ればそれなりに暗い。

ふらふら歩いていたら大分外れまで来てしまつていて、人も少なくなつてきた。事件の事を考へると、無警戒にほつき歩かない方が良いだろう。

「ここでいいかな」

飲食街のメインストリートから外れ、何本か裏手にある、小さな店だつた。真鍮の取っ手が付いた、重たそうな茶色い扉。磨りガラスの奥に、オレンジ色の照明が見える。小料理屋、というにはちよつと佇まいが寂しいが、物静かに食事が出来そうな雰囲気だ。少しお酒を入れるのもいいかもしない。申し訳程度の暖簾をくぐつて、真鍮の取っ手

を引いた。こんなお店にケーシイと一緒にに入るだなんて、少し緊張する。

お店の中は外観どおり、木製のカウンター数席と、テーブルが数席の、こじんまりとした店だつた。

「いらっしゃい。そちらへどうぞ」

老夫婦でやつているお店だつた。ふくよかで、笑顔のかわいいおばあさんと、白髪交じりの頭髪で、ぶすっとした職人気質なおじいさん。

通された長椅子のカウンターに腰掛け、とりあえずビールと、ケーシイのミルクを頼む。

「あらあらあらあらケーシイちゃんにはちよつとニテーブルが高いから。よかつたらこれ使つて。足りなかつたら言つてね」

大変な世話焼きなのが凄くわかる。大き目のクツジョンが渡され、ケーシイの下に敷いてやると、丁度良い高さになつた。

まさか成人して一回目の飲み屋が店長で、二回目がケーシイと来ることになるとは。わからないものだ。

「すいません、ポケモンを連れてきても大丈夫でした?」

「もちろん! ポケモン可つて書いてあるの見なかつた? もう紙がボロボロで字が見えないのでつたかしら。お父さん、あれ書き直さなきやだめねえ。あ、こんなにかわい

「ケーシイちゃんなんてもう大歓迎よ！かわいいわねえ、何食べたい？」

笑顔で迫つてくる。その様に圧倒される。本当によく喋る人だ。でも嫌な感じがいつもしないし、心優しい方などとすぐにわかる。これだけ喋る人なら、旦那が無口くらいじやないと釣り合わないのかかもしれない。

「甘い物が好きだとと思うんで、何か出してあげて下さい」

「お兄ちゃん、まだケーシイちゃんと会つて間もないでしょ」

「え？ は、はい。どうしてわかるんですか？」

「ポケモンとの接し方が少しきこちないからかしらねえ。後、甘い物が好きだとわかつたからつてそればっかりあげてるんでしょ。ダメよ。色々な物を食べさせてあげないと。栄養が偏るのはよくないわ」

す、すいません。と思わずおばあさんに謝つてしまふ。ケーシイは、特に怯えもせずポカーンとおばあさんの話に耳を傾けているようだつた。警戒心もなさそうだし、居心地良さそうだ。

正直、ケーシイが怯えてしようがなかつたら店はやめようかと思つていたが、ここまで居心地良さそうにされてしまうと、それはそれで嫉妬してしまう。ポケモンの扱いにも、人間の扱いにも慣れていそうなおばあさんに、初対面からトップスピードで懐に入られているのは、僕もケーシイも同じだつた。

「じゃあ、ポケモンにおすすめの物をいくつかお願ひします。僕にも何かおすすめのものをいくつかと、ビールを」

「はいはい！　じゃあちよつと待つててね」

奥で鍋をかき混ぜていたおじいさんも、話は聞いているのか、おばあさんの返事が入った途端に動き始める。

いい店だな、と素直に思つた。

「はいお待ち遠様。ビールとミルクね」

ケーシイはコップに注がれたミルクを元気よく飲み出した。そんな嬉しそうな表情初めて見たぞ。

「そのミルク、ちょっとだけ甘くしてあるのよ。おいしいでしょ」

おばあさんはにつこり顔。それにつられてケーシイもにつこりだ。これがポケモンを扱う人間の力なのかと、その不思議な力に呆気に取られる。

「元々トレーナーなんですか？」

「まさか。私にトレーナーなんて無理無理。元々はただの会社員よ。ただポケモンは大好きだから、自分のポケモンにあれこれ世話を焼く事は多かつたのよ。旅の途中、タマムシをほつき歩いてたこの人と一緒になつて、今はこの通り。もう何十年も前の話よ。元々料理をやりたいって言つてたから、思い切つて二人で店を出したの」

それがここまで長く続いているんだから、凄い話だ。うちの店長が雇われでああして働いているのも凄いと思うが、個人でここまでずっと続けているのは、長くお客様がついているということだろうから、それも凄い事だ。

「ところで、そのケーシイちゃんとはどこで出会ったの？」

「は、はい、ええと」

唐突に話を振られ、詰まってしまった。出会ったばかりを見透かされているならば、何もおかしい質問ではない。どこで捕獲したのか。どこで出会ったのか。トレーナーにする質問であれば、ごく自然な質問なのだろう。

ただ、僕はすぐに答える事が出来なかつた。

ゲームコーナーで交換しました、と言えば終わりなのだが、何故ゲームコーナーでケーシイを？ と聞かれたら僕はその先をうまく人に喋れない。

「ええと、人から預かっているポケモンで……」

出た答えは、これが限界だつた。

「別れるまでに、仲良くなれといいわね」

予想していなかつたその返答に、誰かに強く叩かれたか様な衝撃を受け、ハつとした。

僕とケーシイは、ずっと一緒にいられるのだろうか。

もしかしたら、ゲームコーナーにいる前は心優しいトレーナーのポケモンだつたのか  
かもしれない。

ケーシイがどこかへ戻りたがつてているのだとしたら、一緒にいられる時間は短いかも  
しれないし、いつかこいつが本当に安心して暮らしていく場所に、帰してやる時が来  
るのかも知れない。

そんなの嫌だ、と思う素直な自分と、僕と一緒にいるよりそういう場所があるならそ  
の方がずっと良いだろう、と一步引いた僕がいた。

「そ、そうですね」

作つた笑みは引きつっているのかも知れない。

グラスに掴んで、ビールを一口。どうにも、取り繕えている気がしない。

## 〔九〕

ぐだぐだと答える出ない悩みで頭を回していたら、気づけば大分酒が回ってきた。ふと横を見ればケーシイはデザートまで綺麗に平らげて、クツションの上で丸まつて寝ている。そろそろ、僕も帰らなければ。

今あるお酒を飲んだら出ようかな、と片肘をついてぼうっと考えていると、僕の隣に人が座った。気づけば店のテーブル席も一つ埋まっているし、カウンターにも僕と今座つた人以外に一人客がいる。

黒のハットに丸眼鏡。それにグレースーツを着た初老の男性は、茶色のボストンバッグと脱いだハットを横に置いた。

「ビールを」

注文が入るのとほぼ同時に、わかつてますよとばかりにすぐに到着したグラスを手に取り、それをぐいと傾けた。

みるみる減していく様に何気なく釘付けになってしまい、中身がなくなろうかというところでグラスは机に置かれる。

温和そうな雰囲気とは裏腹に、いい飲みっぷりだ。機嫌よさそうにお通しを食べつ

つ、ビールを飲み干しすぐに次を頼むと、手持無沙汰になつたのか、辺りを見回した初老の男性と目が合つてしまふ。

「若いのに、ポケモンを連れて一人酒とは、何か嫌なことでもあるのかい？」

「あ、まずい、と思つた時には遅かつた。

「どうだい、そのかわいいケーシイ君にゆつくり眠つてもらつている間に、何か悩みがあれば話してごらんなさい」

いや、いいです。と言える雰囲気ではなかつた。

しまつたなあ、といった素振りも出来ず、しかし何と言つていいかもわからない。

武勇伝の一つや二つでも引き出して語らせれば満足するだろう。店長が大体そうだ。

「大したことじやないんですよ。小さなことです。それより、あなたこそ随分いい飲みっぷりですが、何かいいことでも？」

「私はいつもこんなものだよ。良いことがなくとも、悪いことがなくとも、来たら寄つてみたくなつてしまふのがこの店の良いところだ」

あらあら嬉しいわねえ、喋り出すのを皮切りに、おばあさんがわーわーと捲し立てる。仲良さそうな自然な会話が初老の男性と交わされている。

その醸し出す気品たっぷりな物腰と物言いに、僕の周りにはいなかつた人種だと素直に感じた。平たく言えば偉い人。威厳のありそうな人だ。

「そうしたら、小さな話なんですか? けどちょっとだけ聞いてもらえますか?」

初対面の人に何を話そうとしてるんだ僕は、と躊躇するところもあるが、初対面の人でもないとこんな話は出来ない。

「聞こう。君の気が済むまで」

半身をこちらに向け、初老の男性は手に持ったグラスを突き出した。

## 【十】

「すると君は、小さい頃自分が行つてしまつた過ちの大きさに、その歳になつて今更気付  
き、それについてどう向き合えばいいか分からぬでいる、ということかい？」

初老の男性は、随分簡潔に僕の話をまとめてくれた。その白い口髭をいじりながら、  
言い辛そうにすることもなく僕にストレートな言葉を投げてくる。

「そ、そういうことですね」

具体的に何をやつたのか話すことは出来なかつた。僕なりにぽかしつつ話したため  
分かり辛くなつてしまつたかと思つたが、この人は綺麗に要約して僕に叩きつけた。意  
外な事に気付いたのだが、優しくされるよりストレートに今更、とか言われる方がなん  
となく楽だ。

責めてくれる方が、ありがたい。

僕の話を聞き大体の内容を掴んだ初老の男性は、ううむとまた髭を弄りつつ考えだ  
し、ビールをぐいと飲む。音を立てず、静かに置かれるグラス。何か思いついたように、  
僕の顔をじつと見る眼鏡の奥の瞳が、優し気に僕を捉えた。

「言いたい事はあるがまずその前に。君は随分と真面目な青年なんだな」

「真面目、ですか？」

「ああ。そんな小さな頃の話を思い返して悩めるのは、真面目だからだと思うよ。何かきっかけがあつたんだと思うけど、それでも皆小さい頃の事なんてだいたい有耶無耶に流してしまうよ。嫌な事は、忘れた方が楽なんだから」

忘れた方が楽だと言われば確かにそうなのかも知れないが、忘れる事なんて出来ない。ケーシイと一緒に居れば居る程、それは忘れられない。

「ほとんどの人が流して忘れてしまうかもしれないのに、君はそれについて悩んでいる。僕はまずその君の真面目さが素晴らしいと思う。過ちに目を向けるのは難しい。それが大きければ大きい程だ。小さい頃の過ちはと言え、今の君にとつてはとても重大な事なんだね」

そんな、褒められたもんじやない。

「私はその内容を細かく聞いていないから詳しい事は言えない。だけど、過ちにきちんと目を向けている事に間違いなんてない。今の君は間違っていない。その様子だと、まだ間に合うんだろう？ 後悔するのが遅い事なんてたくさんある。でも君はきっと間に合っている。間に合つたんだつたら、それはとても幸運だつたね。君は幸せ者だ。まだ取り戻せるよ」

ただの説教に興味はない。綺麗事で片づけるつもりもない。僕にそう切り捨てる程

の余裕はなかつた。頼る人がいないと思つていただけに、これだけ色々言つてもらえるのは、それこそ幸せだ。

「ありがとうございました」

「酒の席で礼なんて言いつこなしだよ。私から聞いたんだから」

無駄に話を引き延ばさず、いつの間にか話題も逸れていつた。初老の男性に上手に会話をリードさせていた。これが年の功かと、素直に感心する。

「実は私も同じなんだ。過去の過ちの中でもがいていて、そんなことの繰り返しさ」意外と皆、そんなもんだよ。

随分と長く話し込んだ後、最後にそう言つて、何も言わず僕とケーシイの分まで会計を済ませて、初老の男性は店を出ていった。彼がグレンタウンジムリーダーのカツラさんだと知つたのは、帰り際、慌てて名前だけ伺つた時だつた。

別に名乗る程のもんじやないよ、と去つて行つたが、お兄さんカツラさん知らないの? と素つ頓狂な声を出すおばあさんが騒ぎ出したので、僕は臆気にそんなジムリーダーが確かいたなあ、というくらいの記憶を引っ張り出した。

聞けば研究者としての顔もあり、年に何度かタマムシにも顔を出すそうだ。そんな有名な人に名前なんて聞いてやつて、とても失礼な事をした気がする。教養で知つておくべき人なのかもしれないのに。僕がどれだけ無学でポケモン界の事を知らないのか自

分で痛感した。これは恥ずかしい。

ケーシイは、僕が椅子から離れ帰ろうとしている事に気づいたのか、眠い目を擦つてむくりと起き上がる。

「遅くなっちゃってごめんな。帰ろうか」

ふわふわと浮かぶと、肩車の体勢をとつて頭にしがみつく。寝る気満々だ。落ちたら危ないので帰りは背負うこととした。

「ごちそうさまでした」

またどうぞー、というおばあさんの人懐っこい声に送られながら、僕たちも店を後にした。

# 【十一】

もう二十三時を過ぎていた。タマムシは夜深くまでずっと明るい街なので、まだまだこれからだという人も多いだろうが、僕は満足した。

珍しい人と話せて、かなり気分がよかつた。せつかくカツラさんとお話し出来たのだから、ケーシイの事をもつとたくさん聞いてもよかつたのかも知れないと思ったが、そもそも僕は帰り際まであれがカツラさんだと気づいていなかつた訳で。自分がきちんと酔つ払っている事を自覚する。

あんなに飲むつもりはなかつた。少しだけ飲んで、ごはんを食べて帰るつもりでいた。本当は、ケーシイが少しでも外の環境や人のいる環境に慣れてもらおうとして出てきたのに、当の僕が良い気分でいるばかりではいけないなとは思いつつも、あのお店だつたらまた行つてもいいなと思う。ケーシイも満足そうにしていたし、それがいい。アルコールのおかげで若干足取りは重い。視界はしつかりしているが、頭がふわふわしている。帰つて早く水が飲みたい。

そんな酔つ払つた頭が、僕の判断を遅らせた。

ケーシイが僕の背中で今までにない程ビクつき、震えていることに気が回らなかつ

た。

何かまずいな、と思えた時には、ケーシイは背中から僕の胸に抱き着いていた。

「どうした。何かあつたか？」

何かあつたどころではない。家でビクついている時の様子ではない。だが何に震えているのかわからない。

一度足を止め、当たりを見回す。タマムシの繁華街から大分離れた、閑静な住宅街。点滅する街灯に、知らない名前の虫。ポケモンが集まっている。そもそも暗くてあまりよくわからないが、何があるわけでもない。ただ、暗がりの中で、バッグを持つたジャージ姿の男が後ろの方に立っているだけ。

再び歩き出したところで、薄ら寒くなつた。何もおかしくはないのだが、後ろに歩いている人間がいる。ケーシイのビクつき具合と、例の事件の事が頭を過つた。まさか僕らが狙われるなんて、そんな馬鹿な。都合良くこんなタイミングで狙われてたまるか、と思いつつも、狙われたトレーナーは皆そう思つた事だろう。

酔っ払つていて鈍つっていた頭がだんだんと冴えてくる。来る時はきちんと気にして明るいところを通つて來ていたのに、帰りに酔っ払つて事件に巻き込まれたりでもしたら目も当てられない。あまりに間抜けすぎる。

ケーシイをぎゅっと抱き、僕は足を速めた。

どうする。ただの歩行者である事を祈つて足を止め、やり過ごしてみるか。でもこのケーシイのビクつきようじや、本当にただの歩行者ではないのかかもしれない。なんとかケーシイは守りたい。

「あつ……」

僕はまた失敗に気付いた。モンスター・ボールを忘れてきた。これではいざ走つて逃げだそうと言う時、ケーシイを抱いている僕の方が不利だ。これだからペーパートレーナーは困る。

どうする、どうすればいい。

一瞬だけ、後ろの様子を探る。同じ距離を保ちつつついてくるのが見えた。さつきは、僕が後ろを見た瞬間足を止めていた。追い抜く訳でも、距離を取る訳でもない。ポケモンを出している様子もない。不審なものを持つている訳でもない。

「行くしかない、か」

ポケモンを出されたら、僕らだけでは逃げ切れない。今しかない。

意を決して、地面を蹴る。

走り出したら一層恐怖は増し、後ろを確認する余裕もない。ついて来ているのか、いないのか、何も分からぬ。ただケーシイがビクつく相手が後ろにいる。逃げる事だけを考える。

どこをどう走っているのか自分でもよく分からぬくらい、がむしやらに走った。路地を抜け、開けた道に。また道を折れて、住宅街に。少しでも遠く、目の届かないところへ向かう。自分が走る事に精一杯で、今後ろがどうなつてているのかは分からない。肺が痛い。だけど止まれない。なんとか、人通りの多い場所へ。

タマムシのメインストリートが見えてくる。爛々と輝くネオン。道行く人々。すれ違う人が増えてくる。がむしやらに走り続ける僕を不審そうに見る顔が視界に入つた。中心街に入ってきたことで僕は安心し、足を緩め、立ち止まつた。途端に疲労が全身を襲う。肩が上下し、息が苦しい。

だがなんとか辿り着いた。これでとりあえずは安心だ。

「……ケーシイ？」

安心したのは僕だけだつた。胸の中のケーシイは、まだとてつもなく震えている。一瞬にしてさつきの恐怖が蘇る。背中がまた薄ら寒くなつて、さつきのぼんやり見えたジャージ姿の奴がいるような。何で僕らが。どうして。頭が回らない。嫌だ。頼む。ケーシイだけは。

小さな生き物を抱きかかる僕の右肩に、生暖かい手が、置かれた。

## 【十二】

「君、そんなに急いでどうしたんだ？」

息も絶え絶えな僕を見て、声をかけてきたのはカツラさんだつた。

「力、カツラさん」

「一体どうしたというんだ」

「いや、何が、あつたという、訳ではないんですが」

「話してみなさい」

ケーシイが尋常ではない程怯えている事。後ろからついて来る男がいた事。例の事件を思い出し、恐ろしくなつて走り続けていた事。一気にそれらを説明すると、カツラさんはふむ、と考え込むように口髭を触つた。

「その事件か。まつたくもつて理解出来ない。同じ人間であることを疑いたくなる行為だ」

カツラさんは露骨に不快そうな顔をする。

「どうなつてるんですかタマムシ警察は、どうして、早く捕まえないんですか」

「時間の問題だとは思うよ。タマムシ警察は有能だから」

カツラさんは僕が落ち着いたのを確認すると、両肩に手を置いて、神妙な面持ちで僕を見た。

「後ろからついて来た奴の顔は？」

「見ていません。暗くて、よく見えませんでした」

「恰好は？」

「ジャージ姿だつたと思います。色は、正確には言えません。黒だつたかもしれないし、紺だつたかもしれないし。とにかく恐ろしくて」「声や、手持ちのポケモンも、確認は出来ていね。いや、まずは君達が無事だつたことを喜ぶべきだな」

カツラさんはそう言つて僕の両肩をポンポンと叩いた。

「私が送ろう。一応ジムリーダーだ。護衛に不足はないだろう」

確かにカツラさん程の人人が一緒に居てくれるのなら心強い。ケーシイも安心出来るかも知れない。

ついてきなさい、とカツラさんに先導され、僕たちは再び歩き出した。繁華街の真ん中に、一本伸びている大きな道路に着くと、カツラさんは走つていたタクシーを呼びとめ、乗り込んだ。

「乗りなさい。家までは私が保証しよう」

僕らも乗り込み、住所を伝えるとタクシーは走りだす。この場所を離れられる。流れる景色が、僕を安心させた。

「災難だつたね。夜遅くに、なるべく出歩かない方が良いよ。戦えるポケモンを持つていないのだから、その辺は気を付けることだよ」

「わかりました。気を付けるようにします。でもカツラさんは、どうしてあの辺に？」

「タマムシにはまだ私の行きつけがいくつかあつてね。次のところへ行こうとふらふらしていたところだつたんだよ」

結構飲んでいた気がするが、まだどこかへ行く気だつたのか。

「私はね、例の事件に対し、非常に怒りを覚えているんだ。ポケモンを燃やしたくて燃やすなんて、言語道断。炎ポケモンのエキスパートとしても、一トレーナーとしても絶対に許せない。金のため、武力のためにポケモンを扱う奴らの方がまだ分かりやすい。まるで燃やして遊んでいるかのような行為を、私は全力で嫌悪する。本当は自分のジムの管轄ではないから勝手は出来ないんだが、こればかりはね。無理を聞いてもらつているんだ」

「そう、なんですね」

小さい頃の行いに対し、向き合っている事を眞面目だと言つてくれた。僕の後悔は遅くない。まだ間に合つてゐる。取り返せる。そう言つてくれたカツラさんの、語氣を

強めた言葉だからこそ、言いようもない罪悪感に包まれた。

それ以降、カツラさんも口数少なく、僕も何も喋らないまま窓の外を流れる景色を眺め続けた。この町で、今もどこかでポケモンを燃やしている奴がいる。僕と同じ事をやっている奴がいる。

何故燃やしたのか。僕自身でもそれはよく分かつていいない。もしかしたら、犯人と同じなのかも知れない。僕はそつち側の人間なんだと思ったら、とてもじゃないがやつぱりトレーナーなんて名乗れない気がした。

「着いたのかな？　お金はいいから、今日は帰つてケーシイとゆつくり眠りなさい。いいね」

カツラさんは元の優しい口調だつた。僕がポケモンを燃やした事を知らないからだ。  
「ありがとうございました」

「これ、私の連絡先だから、何かあつたら連絡しなさい」

最後に名刺をもらつて、タクシーを降りる。カツラさんはにこやかに、無事で良かつた、というような顔を浮かべて去つていつた。向けられた顔を、僕はちらと見るだけで直視出来なかつた。

ケーシイの震えはようやく止まつていた。顔を上げ、甲高い声で一鳴きすると、また僕の胸に頭をもぞもぞと押し当て、静かになつた。

落ち着いてくれて良かつた。

「……今、落ち着いた？」

僕はまた薄ら寒くなつた。ケーシイはとても警戒心が強いポケモンだ。きつと自分に向けられた悪意や感情を察知することに優れているだろう。車を降りて、タクシーガ去つていった途端震えが止まつて落ち着いたのは、間違いない。

後ろからついて来ていた男は多分ジャージを着ていた。スーツではなかつた。ただ何色なのかまでは正確にはよく分からぬ。顔も声も分からぬ。それを念入りに確認してきたのは誰だ？

いや、そんな馬鹿な事があるか。恐怖で疑心暗鬼にでもなつてゐるのか。そんな訳ない。怯えていたケーシイが、家の近くまで來たから落ち着いたのだろう。そうに決まつてる。

もらつた名刺の名前を一瞥し、僕は乱暴にポケットに仕舞い込んだ。

## 【十三】

それからしばらく、夜にケーシイを連れて外出する事は控えた。バイト先に連れていく時のみ、必ずモンスター・ボールにケーシイを入れて移動する事に決めた。

襲われた人達は、ポケモンをそのまま誘拐される他、モンスター・ボールを入れた鞄や、モンスター・ボールだけを盗まれているらしいので、ケーシイをボールに入れて運んだところで安心とは言えない。家で留守番させておけばいいのだが、ケーシイを置いて外出しようとすると、寂寥感たっぷりに鳴き、へばりついてくるのでどうしようもない。僕はそんなケーシイを突っぱねて家を出ることが出来ず、連れしていくことにしていた。

「私に預けようとしないで、なるべく一緒にいてあげなさい」

と、綾子からは口酸っぱく言われている。気付けばゲームコーナーで交換したその時から、僕はケーシイと片時も離れず一緒にいた。

「貫太。お前ポケモンを持ったんだってな。ケーシイなんだろ？」

カツラさんと出会った夜から一週間程経つたある日、営業時間が終わつたところでカウンターを片づけていると、厨房から店長がそんな話を振ってきたから、僕は面食らつてしまつた。

自分がポケモンを所持するようになつたことを他人には言つていない。自分で自分の事をトレーナーだと、胸を張つて人に言うことなんて出来ない。

「え、何で知つてるんですか？」

思わず聞いてしまつたが、そんなの綾子に決まつていて。あいつしか知らないんだ。だが、綾子が人のことを喋るなんて考え辛かつたので、そこまで頭が回らなかつた。

「綾子から聞いたんだよ」

「まあ、そうですよね。あいつしか知らないですから」

「でもまたどうして突然？　しかもケーシイって、この辺に生息していないだろ。ポケモンも持つてないくせしてわざわざ遠出したのか？」

「いや、そうじやないんですけど……」

「言い辛い。店のおばあさんの時と、一緒だつた。

「じゃあどこで手に入れたんだ？　ケーシイなんて……」

数秒目線を上げて考えたかと思うと、店長は「あつ！」と声を上げ、当ててやつたぞ  
という顔を僕に見せながらにやりとする。

「ゲームコーナーだろ。あそこの景品交換所には確かケーシイもいたな」

「あ、当たりです……」

流石常連。こればかりは仕方がない。

「言えよなあ。綾子にも言うんだつたら、俺にも言つてくれよ。いろいろ教えてやんのに。俺も昔はなあ」

始まつてしまつた。店長がトレーナーとして旅に出て、バッジ集めをしていた頃の話だ。何度聞いたことか分からないので、僕はひとまず聞き流すことにした。

それにしても、綾子が人の話をするなんて本当に意外だ。普段は無口だし、自分の話も人の話もするような奴じやない。

「え、貫太君ポケモンを持ったの？　何でまた突然。意外だねえ、君は一生ポケモンを持たないみたいな事言つてなかつた？」

店長の横から社員——里中さん——が、入つてくる。恰幅が良くがたいの良い店長とは違つて、ほつそりした人だ。表裏のなさそうな、あつけらかんと話す人で、お客様からの評判も良い。店長がどつしり構えて支持を出し、里中さんがひよいひよい飛び回る。この店はそうやつて回つている。

里中さんが入つてきてくれたおかげで、店長の武勇伝語りがぶつ切りになつた。ありがたい。

「里中、お前俺が良い話をしてやつていうのに」

「店長、もうその話百回は聞いてますつて。俺が代わりに話せますもん。それでそれで、またどうして突然ケーシイを？」

「いやあの、何か大きな理由があるって訳じゃないんですけど、このお店でポケモンをたくさん見てきて、僕も持つてみたいなと思って当たり障りのない事を言っていると思う。」

「そつかそつか。それじゃあ貫太君、今度俺のゴーストとバトルしようよ」

「そんな、僕バトルなんて何にも知らないですし、ケーシイもバトルする性格つて感じでもないですよ」

「ポケモンの運動になつて結構いいもんだよ？ 気が向いたら言つてくれよ。そつちの事も教えてあげるよ」

里中さんはこの店に来る前は優秀なトレーナーだつたようで、武勇伝をよく語る店長と違つてそこここ結果を残していくなんて話を聞いた事がある。俺なんてそんな、といつも謙虚に話すところに、店長との差を感じる。

「貫太、やめとけやめとけ。里中はバトルの事になると料理よりうるさいぞ」「そんなことないですよ、俺は料理にもうるさいです」

「はは、ではもう少しケーシイとうまく関係を作れたら、お願ひしますね」

「僕がポケモンを持つてている事は、胸を張つて言える話ではなかつた。でも、僕とケーシイが一緒にいることは、人からしたら大した話ではない。ポケモンと人間が一緒にいる事は、あまりにもありふれすぎている。」

店長達にケーシイの話を相談するのも、悪くない気がした。

「それにしても貫太君、最初のポケモンにケーシイなんて、思い切つたねえ。テレポートしまくつて、結構大変じやない？」

「……いや、まあ、なんとかやつてますよ」

ケーシイは、テレポートが出来ない。いや、出来ないかどうかは本当のところわからぬが、テレポートをしているところを見たことがない。びっくりしても何しても、ケーシイは僕のところに飛びついてくるだけだ。あいつが、何故そうなつてしまつたのかはわからない。それなりの事情があつたんだとは思う。ゆつくり関係を作つて行き、ケーシイが心の底から安心して暮らせるようになつたら、普通のケーシイに出来る事を、あいつにも思い出して欲しい。

ポケモンを燃やした僕が出来る事なんて大したことではないかもしないが、一緒にいる以上、出来ることは精一杯やりたい。そう思うことは、別に間違いじやないはずだ。罪滅ぼしとは別だ。僕の行つた行為は最低最悪だけど、あいつがあいつらしく振舞えるようにする事とは関係ない。

「何か困つた事があつたら相談しろよ。新米トレーナー」

店長からかけられた言葉が、こそばゆくて、でも、嬉しかつた。昔から外から見ていた光景だ。友達同士でバトルをしたり、自分のポケモンを自慢し合つたりする光景が、

思い起こされる。自分の行つた行為がずっとどこか引っ掛かっていたから、僕はなんとなくポケモンを持つ気にはなれなくて今までそれを外から見ていた。羨ましくなんてない。なんとも思つていなかつた。そうだと思つていたが、僕は心のどこかで、その中に混ざりたかつたのかもしれない。

カツラさんに言われた矢のような言葉が身体に刺さつて悩んでいるけれど、少しだけ、ほんの少しだけ許されたような気がして、僕は初めてポケモンを手にした友達と同じ気持ちになれた気がした。

## 【十四】

綾子が夜帰つて来ないのは、珍しい事ではなかつた。仲の良い友達がいるようで、たまに夜通し飲み明かしているらしい。本当に酒を飲んだのか？ と思うくらいケロつとした顔で朝方には帰つて来るし、今日バイトだから、と落ち着いた顔で眠りにつく。物音に敏感な僕は綾子が帰つてくると目が覚めてしまつて、僕がもう一度眠り直す前に、先に眠つた綾子の寝顔を眺める羽目になつていた。

一緒に寝ている時はいつも僕が先に眠つて綾子が先に起きるから、そうやつて寝顔が見られることは、僕の密かな楽しみだつた。

そんな密かな楽しみが、ここ一月くらい多くなつてゐる。月一程度だつたのが、二日連続、週に何日か、と続いていた。

何をやつてゐるんだろう。本当にただ飲んでいるだけなのだろうか。少しばかり気になつてはいたが、そういうところに踏み込んでいくのは、僕らの間ではなんとなく憚られた。お互いに一緒の部屋に住むことは認め合つていても、お互いのプライベートには関与しない。

今日は、丁度綾子が帰つて来ない日だつた。

バイト先で賄いを詰めてもらつたお弁当があつたから、深夜一時を回つてからの晩御飯である。里中さんがこつそりケーシイ用のものもわざわざお弁当にしてくれるので、とてもありがたい。

つい先日、ケーシイに市販のものを与えるだけではなく、料理をしてみようと思いついたのであれこれやつてみたのだが、どうしても里中さんと同じようにはいかない。ケーシイも里中さんのお弁当を食べてからは、僕の料理には微妙な反応するばかり。明らかに気を遣われている感じで、糸目を弛ませ口角を上げる姿に、僕は苦笑するしかなかつた。このまま里中の料理で舌が肥えたらどうしよう。

「いただきます」

バイト前にケーシイには晩御飯をあげているが、僕は何も食べずにバイトに入る。そのため、どうしても晩御飯が遅くなってしまう。

「お前の分もあるから、明日食べな。夜中に吃るのは身体に悪いぞ」

自分で夜中に食べておいて何の説得力もない。ケーシイはちよつとちよつだいとばかりに、丸机に両肘をついて首を伸ばしている。最近よく見る光景だつた。

「僕のを食べると塩つ辛いからだめだよ。今日はもう寝なさい」

足をじたばたさせても駄目なものは駄目だ。何があろうともうれしいことを理解したのか、ケーシイは胡坐をかいた僕の足の上にもぞもぞと入つて、寝る体勢。

いつもあげていのいのだから、そろそろ諦めて欲しいところだ。

「……今日も帰つてこないのか」

ごはんを頬張りながら、虚空を見上げる。長針の先にモンスターボール、短針の先にスーパーボールがついた掛け時計。コチ、と一分おきに動くその針が、目に入つた。もう深夜一時半だ。

今日もまたどこかで飲んでいるのだとと思うが、そんなにお酒が好きな奴だつたか。それとも何か嵌つているものもあるのか。クラブ？ バー？ 家にいるのが好きな奴が、そんなとこ好きだとは思えない。じやあ何をやつてるんだ。

思い返してみると、恐ろしいくらいに僕は綾子の事を何も知らなかつた。好きな食べ物、好きな色、好きな曲、一緒に生活していくれば分かるようなものしか知らない。どういう幼少時代を過ごして、どういう学生生活で、どういう恋愛をしているのか、まるで聞いた事がない。年齢さえ曇気だ。僕の一つか二つ上だつた気がする。

物静かで、真面目で、ポケモンが好きで、人はあまり好きじやなくて、睡眠時間が短くて、あと、なんだろう……。

ケーシイと距離を縮める事に一生懸命になつてゐる僕は、いつの間にか綾子に対しても近づこうとしていた。一緒に住んでいて距離が遠いというのも変な話だが、僕らは近いようで遠い間柄で過ごしている。

過去の行いを見ないように、語らないようにし続け、何も探り合わずに一緒にいられる関係を心地良いと思つたのは僕なのだ。

今だつて自分の行いを綾子に言う勇気はないし、怖い。僕だけそれを隠し続け、距離を縮めようとするのは虫が良い話なのだろうか。誰でも忘れない過去はある。皆大体忘れてしまうもんだ、というカツラさんの言葉が思い出された。確かに、皆そんなに自分が全てを曝け出して人と付き合つている訳ではないだろう。だが、それを言わずに綾子との距離を縮める訳には行かない気がしている。

打ち明けた結果どうなるのかはわからないが、距離を縮めたいのならばそうするべきだ。

綾子に対して誠実でいたいと格好つける訳ではないのだが、そうするべきだという気がしている。

「何してるんだろうなあ」

足の中で眠るケーシイの頭を撫でながら、どこかにいる綾子の姿を思い浮かべた。一緒に住んで一年程も経つ僕らは、今後どうなるのだろう。どうしたいのだろう。ケーシイとの距離を縮められている実感から、その嬉しさを覚えてしまつた。だが、それをそのまま綾子に向ける事自体が暗黙のルールに反しているのかもしれない。

僕らの関係は風船のようにふわふわとしていて、だけど張り詰めているわけじやな

い。いつかしほんで落ちてしまうのか、何かがどうなつて破裂してしまうのか、どちらにしてもこのまま続かないことは分かつていた。分かつてはいるけど、それは考えなかつた。二人でふわふわ浮かぶ風船を眺めているのが、とても心地良かつた。

ここから前に進むということは、その風船に触れなければならぬ。

綾子は一体、何を考えているのだろう。

# 【十五】

「ケーシイ、テレポートって出来るか？」

我ながら、なんてぎこちない。

トレーナー達が声高らかにポケモンの技を叫ぶ、トレーナードラマのワンシーンを思い出した。あんなに格好良くポケモンに指示を出す自分の姿が、少しも想像出来なかつた。

バトルをさせたい訳ではない。ケーシイが本当にテレポートが使えないのかどうか確認したかった。

もしもの時のテレポート先を気にして、僕等は例のタマムシ公園まで足を延ばしていった。前回立ち寄った遊具のある広場ではなく、サッカーコート一面程ある大きな広場。少し周りに目を向けるだけでも、キヤツチボールをする親子連れや、ポケモンと追いかけっこする青年がいる。皆がそれぞれ自由に使える、便利な場所だ。

「そんな不思議そうな顔するなよ。どうだ、やっぱり難しいか？」

ケーシイはふわふわ浮かんだまま、僕の言葉にコテンと首を傾げるだけ。

テレポートは、ケーシイが最初に覚える技である。というのはいつだつたか調べたは

ずだ。

相変わらず知識が浅いので、追加の情報を本やネットで調べたが、テレビポート自体はポケモン自身への負担が大きく、そう何回も何回も連発出来るものではないらしい。距離も、そのポケモンの熟練度によつて変わつてくるそうだ。移動用のそれ専門業者がいるんだとか、地方によつて条例がどうだとか、テレビポートの移動範囲は協会の管轄内に限られるとか、いろいろ書かれていた。

決まり事が多いのは、利便性が高く、使いたい放題だときつといろんな問題が起ころうからだろう。

とすると、やはり使えた方が便利なのは間違いない。それに、使える事が野生で育つケーシイの自然な姿なのだとしたら、その方が良いだろう。

ちなみにエスパーポケモンにおけるテレビポートの修得は、「易しい」らしい。易しい、と言葉一つで表現されても僕にはいまいちピンとこなかつたし、テレビポートが出来ないからと言つてうちのケーシイを悪く言う奴がいたら、そいつをどうしてやろうか。

「貫太。ただ出来るか？ つて聞いてもしょうがないでしょ」

広場の片隅で、ケーシイを前にただ出来るかどうか聞いている僕を見ていた綾子が、両手を腰にやつて呆れ顔で横やりを入れてくる。  
「TGB」と大きいロゴの入った、オーバーサイズ気味の黒パーカーに、細見のデニム。

外に出るのを嫌がっていた休日を満喫する綾子に、無理言つて出て来もらつていた。ちなみにT G Bはタマムシのインディーズロックバンドらしく、綾子のお気に入りの事。もちろん、勧められた事など一度もないが。

「だつて、ポケモンの技をどう引き出してやれば良いかなんてわかんないよ。綾子だつたらどうするの？」

「ちよつとどいて」

自身満々に僕のポジションを奪つた綾子は、ふわふわ浮かぶケーシイの前へ。何をするのかと見ていると、ここ数年でポケギアに成り代わつたスマートフォンの画面を得意気にケーシイの前へ出して、それを見せた。

「ケーシイ、どう？　これよこれ。出来る？」

「一緒じやん」

「一緒にしないで。ちゃんとどういうものか見せてあげれば、わかりやすいでしょ？」  
目の前に出された動画を、ケーシイはじつと眺めている。

「どう？　出来そう？」

「だから一緒じやん。興味なさそуда」

最初こそ見ていたようだつたが、すぐにケーシイは興味を失つて、ふわりふわりと移動する。がつくし、と肩を落として珍しく綾子は落ち込んでいた。

「僕らのトレーナーとしてのレベルが低すぎるだけで、テレポートが出来ない訳じやないのかもね」

「貫太と一緒にされるともつと落ち込む」

でも実際、皆どうやって技を教えているのだろう。

ポケモンは人間の言葉をそれとなく理解出来るらしいので、「テレポート」の言葉と実際の行動がリンクすれば理解してもらえるのだろうか。

「ポケモンって難しいね」

「貫太よりよっぽど複雑」

テレポートなんて奇天烈な事を出来るのだから、僕より複雑なのは間違いない。

一括りがそんなに嫌なのか、綾子は腕を組んでうんうん唸っていた。どうにか教える方法を考えているようだ。嫌々ついて来たけど、なんだかんだ付き合ってくれている。黙つて見ているだけなのかと思ったが、ポケモンの事となるとちよつとむきになつている綾子は、僕の知らない綾子だった。

「綾子つてさ、どんなポケモンと一緒にいたの?」

ふと口に出してから、後悔した。なんて、デリカシーのない。昔ポケモンを連れていて、今連れていないのだとしたら、何かあつたに決まってる。

僕の言葉に固まつた綾子は、腕組みを解くと、だらんと腕を下げ、そのセミロングの

黒髪を揺らしながら、徐に僕の顔を見やつた。

「悪い」

沈黙が跋扈する。ケーシイが不穏な空気を察知したのか、不安そうに僕の足にしがみついた。

「何で？」

「何で、つて？」

「何で、そんなこと聞いたの？」

「……ほら、家にもポケモン柄の物多いし、結構詳しいみたいだし。ポケモン好きなんだろうなって思つたから」

再びの沈黙。半分心の底から、半分やけくそだつた。

綾子の表情は固く、僕から視線を外さない。

足にしがみつくケーシイが、ぎゅつと力を込めた。

それを見て、はあ、と溜息をついた綾子は、ごめんね、と一言。ケーシイは綾子の雰囲気が柔らかくなつたのが分かつたのか、ゆっくり浮かんで綾子の腕の中に入つていつた。

「今まで二人で出かけた事なんてほとんどないのに、強引に公園へ行こうだなんて言うから、おかしいと思つた」

「ごめん」

「この子をだしにして、私を連れ出したんでしょ？」

その通り。

「何なの？ 聞きたい事があるなら答られれば答えてあげるから。私がポケモンを持つていたとかいないとか、聞きたいのはそれじやないでしょ？」

何かの別れ目だと思つた。僕がここで綾子に問うたら、聞いてしまつたら、元には戻れないかもしね。

躊躇した。まだ、このままでもいいんじやないかとも思う。

でも、僕はもう向き合つてしまつた。本当は一生目を背ける氣でいたポケモンを燃やした事実に。

だから、綾子とも向き合いたい。心の底で思つてゐる事を、ぶつけたい。

「最近家に帰つてこない事が多いけど、何やつてるの？」

僕の言葉に綾子は表情を変えない。能面のような無表情が、そこにはあつた。

# 【十六】

「前に一度、友達と飲んでるって言わなかつたつけ？」

「言われたのはいつだつたか。何かの拍子に質問してしまつた僕に、綾子が一度答えたのは覚えている。その時は、あまり気負わず聞いたのが良かつたのか、自然な流れで綾子は返答してくれた。

「言つてたけど、随分多くなつたから」

「そうだね、多くなつた。それで？」

綾子の表情は変わらない。何かを隠すようなその表情が、今の僕には少しだけ寂しかつた。

「多くなつたら、何かあるの？」

「何もない。何もないんだけどね、どうしても、気になつちゃつて」

いつそのこと、もつと大層迷惑そうな顔でもしてくれればいいのに。綾子は表情一つ変えないから、僕はだんだんどうすればいいのかわからなくなつてきていた。

「今までそんな事ほとんど聞かなかつたのに、どうしたの？」

「どうしたつて言わると、何て言つたらいいのかわからないんだけど」

「理由がないなら、聞かないで」

強烈な拒絶がそこにはあつた。それ以上、問い合わせる事など出来ない。聞かれたくない事を、無理に聞けない。僕と綾子は、ただの友人。それ以上でもそれ以下でも、きつとない。

「理由がいるなら、他にも聞きたい話がある。僕がケーシイと一緒にいる事を、店長が知つてた。これを話したのは、綾子だよね？」

「それは、そう」

「綾子こそあんまり人の話をするタイプじゃないと思うけど、どうしたの？」

「どうしたって、言つてはいけない事だつた？」

「誰々がポケモンを持つた。それにどんな不都合があるのか。ありふれた世間話の一つに過ぎない。そう言われたら、その通り。

「権田さんが貫太はどうしてポケモンを持たないんだって話を振ってきたから、なんとなく話したの。貫太がポケモンを持つなんて、私これでも結構驚いているんだから」

「そつか、そうだよね。別におかしな事じやないか。ただ、綾子が人の話をするなんて珍しいと思つたから」

「私だつて……そういう時くらいある。誰彼構わず、言つてはいる訳じやない」

「よくよく考えれば、綾子が店長に話をする事自体は、別におかしなことではない。口

止めをした訳でもないのだから。

「そつか、そだよね。ごめん。聞かれたくない事聞いたり、変な質問して」

「いいよ。気にしてないから。話せるようになつたら、話すかもしれないし。私も案外、気がまぐれだから」

僕に気を遣つてくれているんだな、と思つた。その優しさが、僕を救つてくれる。

「それより、ケーシイの事。この子、本当にテレビポート出来ないんだと思うよ。私、野生のケーシイがテレビポートするところも、バトルで技を出すところも見たことがあるけど、どの子も皆簡単そうにやつてた。出来ない事がこの子の個性だつていうならそれでも良いと思うけど、何か理由があつて出来ないんだつたら、私もどうにかしてあげたい」

綾子はその白く細い手で優しくケーシイの頭を撫でた。気持ち良さそうに鳴いて、大人しくしている。

「そうだね。僕もどうにかしてあげたい。でも、その知識も経験もないんだ。どうしたらいいのかまったくわからない。こういう時は、病院に行けば良いのかな」

「正直、私だつてそんなに詳しい訳じやないからなんとも言えないの。貫太、ポケモンに詳しい人つて知つてる?」

「知つてるとと思う?」

「そうね。知つてるはずないか。私も交友関係狭いから頼れるところ少ないけど……」

綾子の話している途中で、ふつと一人の名前が頭をよぎった。「あっ！」と僕が大きく声を上げたものだから、綾子もケーシイもびっくりして目を丸くする。

「な、なに突然。大きな声を出して」

「気が進まないんだけど、一人、もの凄く詳しい人がいる」

「誰？」

「カツラさん」

「カツラさんって？」

「カツラさんは、カツラさんだよ。ジムリーダーの」

「ええ！」

僕が見た、綾子が一番驚いた声と表情だつた。

「な、なんで、そんな有名人を知ってるの？」

「ちょっと色々あつてね。連絡先、知ってるんだ」

「最近は随分驚かせてくれるのね。何がどうなつたら貫太とカツラさんが繋がるのよ」

綾子が驚くのも無理はない。僕と対極に位置する人だ。繋がつたのはただの偶然。

でも、この繋がりを頼るに越したことはない、のだが。

「ただ、さつきも言つたけどあまり気が進まないんだ」

「どうして？」

「気になる事があつてね。僕の思い違いだとは思うんだけど」「でも頼れるところ他にあるの?」

「ない」

「じゃあ、頼つてみるしかないね。一番可能性がある。もしかしたらカツラさんからまた他の人を紹介してくれるかもしないし」

確かにそうだ。カツラさんからまた他の人に繋がつてくれるかもしない。

「しようがないか。連絡してみるよ」

尻ポケットから財布を取り出して、差し込んでおいた名刺を取り出す。あの時以来だつた。

思い過ごしに間違いない。小さく独り言ちて、名刺に書かれた名前を眺めた。

# 【十七】

カツラさんは電話には出なかつた。留守電は残しておいたので、連絡を返してくれるのを待つしかない。

きっと忙しい方だろうから、一民間人の願いなんて片つ端から聞いていたらいくら時間があつても足りないだろう。ここに行つてくれ、と最初から突き放されるかもしれない。

それならそれで良い気はしていた。

やつぱりどこかで躊躇している僕がいるのだ。あの時の事を思い出してしまふと、どうも警戒してしまう。ケーシイの事を思うと、会わない方が良いのではないかと思えてしまうが、綾子が言つていた通りでもある。

「そわそわしていてもしようがないでしょ。大人しく待つてな」

お店の開店準備をしていると、どうも落ち着かない様子の僕を見て、綾子はまた呆れ顔だつた。

「何か進展あるかもしないと思うと期待しちゃうから、どうしてもね」「気持ちわかるけど、ちゃんと働いてよね。貫太がその感じだと私が忙しくなるんだ

から

「わかってるよ」

ポケットの携帯はとつても大人しい。

この店が入っている雑居ビルのエレベーターがせわしく動き続けて、客が雪崩れ込んでくるいつもの様子を想像すると若干げんなりする。開店すれば気にする余裕がないくらい忙しくなるだろうから、どうせなら早くそうなつて欲しい。

今か今かと時計を見つめ、いざ開店。時間はピッタリ。店に響く来店音。そら来たと入口へ急ぐ。

「あれ？ 君、ここで働いているのか」

スース姿のカツラさんその人が、そこに居た。

カツラさんは、ジムトレーナー達を引き連れて來ていた。

タマムシに來ると同業のタマムシジムにも顔を出すようで、お話を聞いて勉強してきなさいとジムリーダーからジムトレーナー達を任されているんだ、との事だつた。

だけど僕には、カツラさんの相手をジムトレーナーに押し付けているんだなとしか思えなかつた。タマムシジムの女性トレーナー達がカツラさんを接待しているようにしか見えない。講釈を垂れるような人ではないし、そういうのは断りそうな程紳士そうに

見えるのだが、うちの店で座つて酒を飲んでいる姿を見ていると、その辺のおっちゃん達と同じ様に見えてしまう。

ジムリーダーとはいえ、男だし、おっちゃんには変わりないんだな、とむしろ少し親近感を覚えた。

里中さんは最初から興奮しつ放しで、店長はこれを機にカツラさんにどこかでうちの店を宣伝してもらおうとサービス満点だ。

他のバイトもそわそわしている。綾子は綾子らしく毛ほども興味を示さず、いつも通り働いていた。

そして当の僕は、薄気味悪くて仕方なかつた。

何で僕がここで働いているのを知つてるんだ？

あの時、カツラさんに自分の話はしていなのはずだ。言葉通り受け取るなら本当に偶然なのかもしれないが、先日の事もあってとてもそうとは思えない。

だが陽気にハイペースでお酒を飲んでいるところを見ると、僕に探りを入れに来ているとも思えない。

ジムトレーナー達は熱心にカツラさんの話を聞いている様子だし、ただ単に楽しんでいる。少なくとも、今は。

「おい貫太、なにぼやつとしてんだ」

片手で盆を持った店長が僕を小突いて客のところへ向かつた。

「気になるのは分かるけど。仕事して仕事」

綾子にも小突かれる。

迷惑をかけてはいけない、と気にしないよう動き回つたが、その日のバイト中、僕はどうしても集中出来なかつた。

ようやく閉店だという頃、カツラさんは席を立つた。レジの前に陣取つた僕の元に、しつかりとした足取りで現れる。顔を赤くして、上機嫌だ。

「やあ、賑やかでとても良いお店だね。タマムシらしさが出てるよ」

「ありがとうございます」

提示された金額に、カツラさんはカードを出した。

「よろしければまた来て下さい。お店の皆も喜びますから」

「ああ、是非」

処理を終えて、カードを返す。会計は済んだ。そのまま卓へ戻るのかと思いつつ、カツラさんは一步レジへ詰め寄る。

「連絡をもらつていた件だけど、明日は時間あるかな？」 曙過ぎ、十四時くらいから一時間程なら時間を取れるのだが

随分と酔つ払つてゐる様に見えるが、頭の中はきつちり冴えているのかもしれな

い。その突然の言葉に僕は面食らつてしまつたが、

「お時間、ありがとうございます。是非、お願ひします」と、間髪入れずに返答する。僕が変な事を気にしているのを、僅かでも悟られたくはなかつた。

「それじゃあ、十四時に架け橋つてお店に来てくれ。今日はとても満足したよ、ありがとうございます」

ジムトレーナー達を引き連れ、お礼を言われながらカツラさんは店を出ていった。勝負をしている訳でもなんでもないが、とても敵わない。話していればいるほど、僕が気にしている事なんか搔き消えていくだろう。対面して話すと、どうもそんな気にさせられる。

ただ、ジムトレーナーの姉ちゃん達にちやほやされながら帰つていく様子が、どう見ても鼻の下を伸ばしたおっちゃんにしか見えなかつた。

# 【十八】

「貫太君。君、カツラさんと知り合いなのかい？ 一体どういう関係？」

例の如く閉店作業中は、手を動かしつつ唯一店員同士で世間話が出来る時間だ。来ると思つていたが、里中さんは案の定その話を僕に振つてきた。

「一度飲み屋で隣になつた程度です。会つたのも二回目ですし、そんな大した関係ではないんですよ」

「そうかあ、でも凄いなあ。グレンジムまでは足を伸ばしていなかつたから、僕カツラさんを生で見るの初めてなんだ。老練な感じがかっこいいよなあ。あ、でも老人つて訳でもないのか」

本当によく喋る。トレーナーにとつてジムリーダーはこういう存在に成り得るとうことを、初めて目の当たりにした。

「後さ、これはお願ひなんだけど」

里中さんは声を小さくして、僕を店の端へ誘つた。

「ごめんね。盗み聞きのつもりはなかつたんだけど、カツラさんの話、俺も聞いたんだ。明日、何とかつて店で話をするんだろう？ 失礼なのは分かつてること

か僕も連れて行つてもらえないかな」

そこまで言つてくるとは思わなかつた。どこかでまた会うような事があるなら、サンの一つでも貰つて来てくれくらいのものだと思つていた。

「ファンとして、ということですか？」

「ファン、といふか、僕がバッジを集めている頃、会つた事ないのがグレンとトキワのジムリーダーなんだよ。一度くらいは、カントーのジムリーダー全員と対面してみたくてね」

珍しくおちやらけた様子のない、真面目な返答だつた。

「そういうことでしたら、分かりました。里中さんもポケモンに詳しいでしようし、是非同席お願ひします。事情は、明日話します。十四時に架け橋つてお店なんですが、大丈夫ですか？」

「ありがとう。恩に着るよ。十四時に架け橋だね。絶対に行く」

里中さんは、心底嬉しそうに仕事へ戻つていつた。あとは、出来れば綾子にも同席してもらいたい。

「おーい貫太！ またぼやつとしてんのか！ さつさと片付ける！」

店長の野太い声が店に響いた。今日は大変申し訳なかつた。きつちり、取り返さなくては。

「行くに決まってるでしょ。私だつて知らない身じやないんだから」

僕の遠慮がちなお願いに、綾子は二つ返事で了承してくれた。

二人で店からアパートまで歩いている間、明らかな僕の何か話したい様子に綾子が気付いた。「話したい事があるならさつさと言いな」と大いに気を遣われてしまつた。

「ありがとう。助かるよ」

「気にならないで、私も気になつてゐる事だから」

「後、里中さんも来ることになつてるんだ」

「里中さんが？　どうして？」

「本人がどうしてもつて言うから。納得出来る理由ではあつたし」

そう、くらいで流されると思つていたが、綾子は黙つてしまつた。

「駄目、だつたかな

「いいんじやない？」

含みがあつたが、僕はそれ以上は聞かなかつた。

「事情を話す為に、十三時半に架け橋つてお店で先に待ち合わせることになつてるから、よろしく」

「わかつた」

綾子はそれから、いつものよう無口に戻った。

内容は置いておくとしても、綾子と出掛けられる。

ビルやマンションに切り取られた、タマムシの夜を二人で歩いて、碌に星も見えない殺風景な空を眺める。もう何回目かなんて分からぬい変わらない風景が、今日は少しだけ違つて見えた。

# 〔十九〕

翌日、里中さん、綾子、僕の三人は、時間通りに現地へ集まつた。架け橋はタマムシの南側、ポケモンジムやその他公的施設が集まつてゐる地区に構えているレストランだつた。ちよつと早いのですが、と店員さんにカツラさんの名前を出してみると、伺つております、と奥の席へ通される。柱が丁度良い具合に席を少し遠ざけており、話しやすい席を取つてくれていた。

「先座つてましょ。説明させて下さい」

僕と綾子が並んで、里中さんは正面に座つた。店はタマムシの繁華街にある店とは違つて、真面目そうな人が多いように感じる。服装のせいかもしれないし、髪型のせいかもしれない。普段こういう雰囲気の人達と一緒に、カツラさんは仕事しているのだろう。

緊張しているのか、いつもと様子の違う里中さんには、ケーシイの事情を粗方説明したが、彼の周りにそういうケースはなかつたようで、どうにも返答に困つてゐる様子だつた。

「これからカツラさんにその話をして、助言をもらおうつて事だよね？」

「はい。正直、僕みたいなど素人ではどうすれば良いのかわからなくて……」

「選択肢の一つとして聞いて欲しいんだけど、良いかい？」

「はい、是非お願ひします」

「君のケーシイのケースとは違うと思うんだけどね、技っていう観点から見れば、どうにかなるかもしねー」

詳しいとは言え、バトル専門の里中さんから本当に助言がもらえるとは思つていなかつた。

「ポケモンだつて万能じやないから、技を覚えられる数にも限界がある。多く覚えさせすぎても、バトルの時に咄嗟に出せなかつたりするし、精度も悪くなる。逆に精度は上がつても、技が少なすぎると選択肢がなくて良くない。丁度良い技の数は一般的に四つつというのが通説さ。出る大会によつても技の数がルールで縛られている場合もあつて、厳しく審判がチエツクしてしたりするんだ」

へえ、と僕は素直に聞き入つてしまつた。そういうえば技が四つなんていうのは、授業でもやつていたかもしねー。

「バトルのためにポケモンと技の練習をしていたりするとね、技を出せなくなつてしまふ事があるんだよ。単純に忘れている時もあるし、詳しい原因は僕にも良く分からない。とにかく、出来ていた技が出せないって事がある。そういう時に、頼れるところが

実はあるんだ」

綾子も興味深そうに聞いている。里中さんが本当にバトルに精通していて、バトルトレーナーとして旅をしている様子が垣間見えた。

「技思い出し屋っていうのがいてね、その人が欲しがっているものと引き換えに、技を教えてもらえるらしいんだ」

「業者つて事ですか？」

「そういうことになるのかな？ 僕も利用した事はないし、今どこにいるのかもわからんんだけどね。結構珍しい物を要求されるつて話だよ。友人をあたつてみれば、誰かしらどこにいるのか知っていると思うよ」

何をどうすればポケモンにそんな事を教えられるのか、僕には皆目見当がつかない。この世界は、当たり前だが僕の知らない事ばかりだ。

「ありがとうございます。その業者にあたるのも、良いかもしないですね。僕がそんな珍しい物を渡せるか、そっちの方が問題になりそうです」

「突然欲しいものが変わったりするつていう噂もあるし、連絡先もない。金のやりとりもない。そんなの業者かどうか怪しいし、正直眉唾ものだけど、どうにもならない状況だつたら思い出してみてよ」

「貴重な情報、ありがとうございます」

里中さんに感謝だ。技を教え込む専門の業者なんていうのがいるのだつたら、頼つてみるのはありだ。もちろんケーシイが嫌がらなければ、の話だが。

「今度、里中さんのバトルを見てみたいです。僕バトルつてまともに見たことがないんですけど、それでも楽しめますかね」

「楽しませる、かあ。正直、俺なんか勝つことばっかり考えてるから、周りがどう見てるかなんて考えた事もなかつたな」

「それでも、見せてもらえませんか？」

「うん。いいよ。今度一緒にバトル場へ行こう。少なくともバトルも悪くないな、って思つてもらえるように頑張るよ」

こんな風に里中さんと話した事などなかつた。バトルに対して真面目なこの人が実際にバトルをしているところを見てみたい。話してみないと、わからないものだ。

「綾子ちゃんも良ければどう？」 一緒に行かないかい？」

里中さんは、これまでだんまりを決め込んでいた綾子へ、唐突に話しかけた。

「私は行きません」

「バトル嫌いだつけ」

「興味がありません」

「興味を出してもらえるよう、頑張るつて話だつたんだけどな……」

相変わらずの様子だ。興味がないなら仕方がないが、里中さんが露骨に寂しそうな顔をしている。

「里中さんもこう言つてくれてるし、一緒に行つてみないか？」

横目でじとりと僕を見やつて、綾子は迷惑そうに少しだけ顔をしかめた。こういう時、僕が絡んでいく事など今までにはなかつた。

「行つてみたいんだよ、綾子とポケモンバトルを見に」

「そうそう、デートだと思つてさ。僕もバトル頑張るから」

「……考えておきます」

二対一。こういう時、綾子は雰囲気を読んで頑なに行かないとは言わない人だ。後で二人になつた時、バツチリ断られるのだろう。

一緒に見に行つてみたいのは本音だつたから、出来ればちよつとは粘つてみたい。里中さんもその気になつてくれている。謙遜しているが、自信はあるのだろう。

「彼氏として、説得頼むよ貫太君」

「え、ええ、はい」

あれ、里中さんに一緒に住んでる事伝えてたつけ。店長にも報告していないくらいだから、多分里中さんには喋つていはないはずだ。

ということは綾子が話した？ とても考えにくい。でもこの前の件もある。どうい

うことだろう。変だな、と思いつつ、綾子をちらと横目で伺う。

「彼氏ではありません。ただの、友人ですので」

綾子の凜とした声が綺麗に通った。

その通りではある。今までこういう事がなかつたから実感出来なかつたが、はつきり言われてしまつて、傷ついている自分に気づく。

それと同時に恥ずかしくなつた。すぐに否定しない僕に、彼氏面すんなよ、と言われた気がした。

「え？ あ、そう、なの？ いやあ、はは」

里中さんもやつちまつたとばかりに取り繕おうとしているが、しどろもどろだ。無表情でこの雰囲気を静観する綾子の気持ちが、随分と遠くにある気がした。

お互に踏み込まず一緒に過ごす。それを再確認させられている。

「やあ、お待たせしてしまつたかな？」

ハットをかぶつたカツラさんが、良いタイミングで現れる。僕は内心ホッとしたし、里中さんは立ち上がりつてカツラさんのため椅子を引いた。

「何か重たい雰囲気だけど、どうかしたのかい？」

救世主かと思いきや、話を戻そうとしてくるカツラさんのニヤリ顔で、やつぱりこの人ただのおっさんだ。そう、思わずにはいられなかつた。

## 【二十】

「なるほどね。珍しいケースだ」

カツラさんは僕の話を聞くと、腕を組んで考え込み始めた。うーん、と唸つて目を瞑つている。やはり難しいのかもしれない。

里中さんは挨拶だけ片言で済まして、カツラさんの横で固まっていた。  
綾子はケーシイの事を考えてくれているのか、期待を込めた視線でカツラさんの様子を伺っている。

「同じようなケースは、私も知っている。だがね、それを即座に解決する方法っていうのは、ないんだよ」

唸つた果てにカツラさんから出てきた言葉は、非情に厳しいものだった。

「そう、ですか。でも、そうですよね。技を出せなくなつたから、すぐに元に戻してくれなんて、そう簡単な話ではないんでしようから」

正直妙案を期待していた、と言えばその通りなのだが、半分はそう簡単ではないだろうというのは分かつていた。いろいろ漁つた時、その対処方法までいくつか調べていたのだが、大体が時間をかけていく方法しかなかつたのだ。

「これは私の周りで起こつたケースなんだが、君のケーシイと同じような状況に陥つたポケモンがいてね、その子は随分時間をかけて技を取り戻していくつたよ。何度も何度も技を見せたり、他の技を教えたりした。その子の故郷に連れていくつて、野生の中に戻したりした事もあつた。最終的に、何が原因で技が戻つたかどうか、明確にはわからないんだ。いろいろ試していつたら、欲しい結果に辿り着いたとしか言えない。同じ事を君のケーシイにやつていけば、いずれ使えるようになるかも知れないから、長い目で見てあげた方が良いよ」

長い目で見る時間は、あるだろうか。

「あの……カツラさん」

固まつていた里中さんが、探り探り口を開く。

「さつき貫太君にも話したんですが、技思い出し屋つて、本当に噂通りの事をやつてもらえるんですか？」

「お、君は彼らの事を知つているのか。ジムバッジもかなり集めているのかな？」  
「バッジ集めは途中で諦めてしましました」

「制限時間はないから、挑戦したくなつたらまた始めるといいさ。私達はいつでもジムリーダーとして待つていてるからね。それで、ああ、技思い出し屋だつたかな。あそこはね、多分貫太君のケーシイみたいな例には、対応出来ないと思うよ」

カツラさんは、当然かもしれないが技思い出し屋を知っていた。それも、知り合いかのように話している。事情にも詳しいのだろう。

「どうしてですか？」

「奴らはね、思い出し屋を謳つてはいるけど、明確に出せなくなつた技を出させることころじやないんだよ。使わなくなつた技をバトルに使えるレベルになるまで熟練度を上げる事と、そのポケモンに眠つている潜在的な身体の使い方を教え込む事が商売なのさ」「なるほど……だからバトルをするトレーナーにはそこそこ広まつているんですね」

「そういうこと。今回の場合は、技をいくつもいくつも覚えていく中で、テレポートの選択肢を切つて使えなくなつた訳じやないだろう？」 貫太君

「そうですね。他の技が出せるのか確認した訳ではないのですが、テレポートが出来ないのは、間違いないとは思います」

「だつたら、技思い出し屋は取り合つてくれないね。テレポートを使えない原因が精神的なものだとしたら、ケーシイが一番安らぐ場所を君が作つていく事が重要かな。心の安定が保てれば、ケーシイの様子も変わるかもしれないからね」

カツラさん程の見識を持つた人でも、地道に色々試すしかない、という事を聞けただけでも収穫だ。技が使えるようになる、という道が絶たれた訳ではない。やれる事をやつて行けば、結果は出るかもしれないということだ。

ただ、カツラさんが言つていた故郷に連れていく、というのは試せない。ケーシイがどこから来たのか、僕には分からない。

分からぬ事が、どうしようもなく悔しい。

「どうにもならない訳ではなさそうで、ちょっと安心しています。お忙しいところ、ありがとうございました」

「いやいや、大した事言えなくて申し訳ないね。全然気にしなくていいよ。そういえば、あれ以来大丈夫かい？ 特に何事もないかい？」

心配して言つてくれている。それは分かるのだが、どうにもそれは思えなくて、僕は身構えてしまつた。本当はその話をしに来たのではないか？ 探りを入れに来たのではないか？ そんな事を考えてしまう。

「ええ、言われた通り、夜はなるべく出歩かないようにしてますし。今のところは、特に」

「そうか。それは何よりだよ」

カツラさんは優しい微笑みを浮かべる。内側に秘めた暗い顔がある気がして、僕は目を合わせられなかつた。なんて失礼な事をしているんだろう。

「え、何かあつたのかい？」

身を乗り出して僕とカツラさんを交互に見つつ、里中さんは言つた。

「ちょっと怖い目に合いまして」

流石に何があったのか気になるのが、綾子も無表情を僅かに崩して僕に視線を送つてくる。

「貫太君。君、周りの人に何も言つていなかっのか？」

三人の視線を浴びてしまつた。わざわざ言う事でもないと思つていたのだが、視線に耐えかねて、襲われそうになつたんですよ、と口をついた。

「襲われそうつて、誰に？」

珍しく綾子は興味を示した。

「それは分からぬ。ただ、追いかけられた」

追いかけられた、か。僕の言つた事をそう小さく反芻して、里中さんは急に興味を失つたかのように椅子に背を預けた。

「最近物騒な事件も多いからなあ。いやあ、無事で良かつた良かつた。カツラさんは何故その事を？」

「貫太君が血相を変えてタマムシの繁華街を走つているものだから、気になつて声を掛けたんだよ」

「なるほど、それで貫太とカツラさんが知り合いだつたんですね。合点がいきました」  
今日一番、綾子が納得の表情を見せた。

「ま、まあ、僕達の事はいいんですよ。何もなかつたですし、元気にしていますから」  
 思わなかつた。平坦な人生を送つていたものだから、なんだかこんな風に心配される事に慣れていなくて、どぎまぎしてしまつ。まさか綾子がこんなにも心配そうな顔をしてくれるとは思わなかつた。

「いやいや、言えるんだつたらそういうのは人に言つた方が良いよ。自分で対策出来ていると思っていても、案外そうじやない事もあるからね」  
 里中さんの言葉に、カツラさんもそうだよ、と声を合わせる。  
 自分が犯した罪にずっと悩み続けているのは、人に言えないからなのか。いや、だからと言つてペラペラと言える話ではない。

それに、この悩みは“解決”する悩みではないのだ。

「それより、どうなんですか？ 捜査の方は」

カツラさんはううむ、と唸つて渋い顔をする。

「金品を狙うわけでも、珍しいポケモンを狙うわけでもないからね。なかなか絞りづら

くて難しいというのが正直なところだよ。分かつてているのは弱いポケモンを狙うという事だけ。なんとしても早く見つけたいところなんだが」

難航している、という事だろうか。

モンスター・ボールごとポケモンを奪われる人もいるし、ポケモンだけを奪われる人もいると聞く。一体どうやつて奪っているのか分からないが、そんなにバрезに毎回誘拐出来るものだろうか。

警察も警戒中だし、カツラさん達トップトレーナーも見張っている。それを全てかいぐつてあざ笑うかのように犯行を続けているのは、一体どういう事だろう。

「まあ、進んでいないという事はないよ。市民の皆様には早急な逮捕が出来なくて大変申し訳ないが、前にも言つたように時間の問題だね」

カツラさんは最後にあやふやな言葉で締めた。詳しい操作状況や内容を一市民にいちいち喋る訳もないのに、大した情報は得られないだろう。

「捕まるかどうかは横に置くとして、どうして燃やしているんだと思います？」

里中さんが机に両肘を付け、興味深々な顔をして身を乗り出す。

「燃やすメリットがあるとは思えない。燃やしたいという気持ちが一番先頭にあるとすると、それは一体どんな気持ちだろう。征服感かな。燃やした時の臭いが、苦しくて蠢く姿が、どうしようもなく堪らないという事なんですかね」

どきんと胸を打つ音が聞こえたようだつた。

僕があの記憶を思い返す時、何故あんな事をしたんだろうといつも考える。どうにか無理矢理説明をつけようとすると、決まって出てくるのは燃やす事に樂しみや征服感を覚えていたからというものや、言葉では形容し辛い変わつた高揚感を覚えるというものだつた。おぞましい感情なのだが、それでも言わないとどうしても説明がつかない。

そこまで考えて、僕は毎回自己嫌悪に陥る。今でこそおぞましいと思えるのだが、下手をするとそういう感情に陥る自分がどこかにいるのだと思うと、どうしようもなく怖くなる時があるので。

そんなはずはない、僕はそんな事しない、といいくら言い聞かせても、行つた事実だけが重くのしかかる。

「征服感だけでそこまで行きつくんだとすると、後から色々な問題が出てきそうだね。カントー地方はバトルにおいては先進的だ。とにもかくにもポケモンバトルの強さは重視される傾向にある。それはかの有名なレッドやグリーンが現れてから如実に顕著な事実だ。そうなると、反動で行き詰つたトレーナーがとんでもない方向に行つてしまふ可能性だつてある。私達は、この土地の在り方や、ポケモンと人との在り方を考え直さなくてはいけなくなるのかもしねれない」

カツラさんはそれだけ言うと、悪いけど思つたより時間がなくてね、申し訳ない。と

席を立つた。好きなだけ食べていいきなさい、私につけておくから、と僕には一生かかつても言えなさそうな台詞を残して去つて行く。

席には、カツラさんの残した言葉だけがじんわりと残つていた。

在り方を考える。それはとてもなく大きな出来事が起こつた時、往往にして出て来る言葉だと思う。

僕の中でそれははずつと考え続けるべき事であり、今回の事件をニュースで見た時から差し迫つた問題に感じている。

里中さんは、何を思つてこの話をしているのだろうか。

「その通りの理由なんだとしたら、里中さんはそれをどう思いますか？」

「そういう人もいると簡単に片付けるのは簡単だ。だけどそうじやない。起こつた事象には何等かの理由がある。それを考えなくてはいけない。俺もそう思うよ」

だけどね、と里中さんは続けた。

「理由はどうあれ、燃やす行為に至つたその瞬間はきつととてつもないカタルシスに包まれているんだと思う。なんとなく、そう思うね」

そればかりはもう本人に聞くしかないし、そう感じられる人間は、異常者として生きて行くしかないのだろう。

僕は違う。違うんだ。もう一度自分の中でそう言い聞かせ、そうかもしぬませんね、

ともうこの話は切り上げようとした時、隣の綾子が突然立ち上がった。とてつもなく不快そうな顔をして、僕と里中さんを睨むと、お先に失礼しますと言い残して突然去つて行く。

僕等の引き止めにも一切耳を貸さない。

「あれ、なんか気に障るような事言っちゃったかな」

「わかりません。でも、気に障つていなかつたらああいう態度にはなりませんからね。」

僕の方から里中さんの分も謝つておきます」

「悪い。助かるよ。俺も次会つた時にきちんと謝るからさ」

挨拶もそことこに、少しも歩を緩めない綾子を追いかけた。

## 【二十一】

「待つてよ」

店を出て、怒るでも落ち込むでもなく、いつもと同じ調子で歩く綾子に追いつき、隣についた。

拒否されるような事もなく事もなげな様子だが、さつき立ち上がりつた瞬間だけは、露骨に嫌な顔を浮かべていたのは事実だ。

「何か瘤に障つた?」

「別に、特に話すような事でもないの。気にしないで」

そう言わると、もう何も言えなくなる。

僕等はそういう関係なのだ。

「里中さんはきっと次会った時謝つてくるだろうから」「分かつてる。うまくやる」

何があつたの? と聞きたい。この前、公園で話した事だつて本当は気になつてゐるのだ。僕は、綾子が何をしていて何を考えているのか、気になつて仕方がない。それを許さない雰囲気と、微妙な関係性が僕を躊躇させる。

「今日はどうする?」

「このままバイトに行く」

「そつか」

会話は短い。いつもの事だ。青空の下、賑やかなタマムシを綾子と歩いているが、僕等だけはまるで別空間のように静か。

二人で黙つて歩くのもいいものだが、何か、何か聞いておきたい。このままで、僕は綾子との距離を縮められない。いつまで経つても、近いようで遠い関係性を続けているだけだ。僕は嫌だ。それじやあ嫌だ。どうなるか分からぬけども、踏み込んで行つたつていいじやないか。一年も一緒に暮らしているんだ。互いの事はそんなに知らなくとも、共に暮らしたという事実はきっと大きいはずだ。少なくとも、僕にとつてはとても大きい。だから、少しくらい前に進んだつて……。

「それじやあ」

結局、綾子といつもの交差点で別れた。雑踏へ消えていくその後ろ姿を眺めていると、ポケットの中のモンスター・ボールが揺れ出す。そういえば、せつかく晴れた日に外へ出でているのに一度も外へ出してやつていない。

悪い悪い、と呴きつつボールから出してやる。すぐに肩車の体勢で、いつもの定位置に来るかと思えば、ふわふわ浮かんだまま、ケーシイは甲高い声で小さく鳴きながら綾

子の方を指出した。

「行けって？ 声を掛けろって？ なんだ、優しいなお前」  
呼び止めに行こうと、綾子の方へ飛んで行こうとしたケーシイの腕を取り、そのまま  
ゆっくり抱き寄せる。

「いいんだ。いいんだよこのままで」

もがもがと抵抗を見せるケーシイだったが、僕が譲らないと分かつたのか、やがて諦  
めて胸の中で大人しくなった。

「ありがとうな、ケーシイ。お前のおかげで気が紛れるよ」

頭を撫でてながら、綾子が消えて行つたタマムシの雑踏を僕はしばらく眺めていた。

## 【二十二】

ある休日の夜、モンスター・ボールを使って、部屋でケーシイとキャッチボールをしている時の事だった。

ほとんど頭を空っぽにしてモンスター・ボールを投げていたものだから、ふわふわ浮かぶケーシイからずれたところに投げてしまつた。

おつとつと、とボールに飛びついたケーシイは、そのまま部屋の隅に掛けてある綾子のバッグに引っ掛けつて、一緒に床へ落ちた。

バッグの中身からは、散らばつた綾子の私物がいくつか。やばいやばい、とすぐにケーシイを片手で抱き抱え、散乱した荷物をバッグの中へ戻していると、一つ、気に入るものが目に入つてしまつた。

「これって……」

モンスター・ボールが一つ。ケーシイが入つていたボールではない。綾子がポケモンを？ そんな話は聞いていないが、なんのためだろう。

ポケモンを捕まえるために買った物なのか、誰かに貰った物なのか。

理由は思い当たらない。なんだろう。僕がケーシイと一緒にいるようになつたから

か、それ以外の理由なんて……。

考え続けているうちに、またどんどん気になつて仕方がなくなってきた。こうなつてくると止められない。モンスター・ボールの事だけでなく、その他の事まで考えてしまう。だめだだめだと思いつつ、やつてはいけない事が頭を過る。

ケーシイがバツグと共に床へ落下した事に驚き、泣きながら僕にしがみ付いてくるその力強さが、僕を咎めているようで一瞬躊躇いかけるが、すぐに思考は上書きされる。バレなきやいい。一度だけだ。それで満足するんだ。

人としてどうかと思う。だがもうその方向に僕は向いている。どうしようもない。

気付けば外に出る準備をしていた。時間も丁度いい。落ち着いたケーシイをモンスター・ボールに入れ、リュックの中へしまう。財布と携帯も放り込んで、それをしつかりと背負いこんだ。最近、夜にケーシイを連れて出歩く時は、購入したりュックを背負うようにしていた。

家で留守番させておけばいいのかもしれないが、先日ちょっとした買い出しのためにこつそり外に出た時、ケーシイは僕を探して外へふらふらと出てきてしまった事があつたので、せめてもの防御策だ。

僕のこんな姿をケーシイに見られたくはない。本当は一緒に連れて行きたくないが、仕方がない。

今の僕は、それだけで止まれる程落ち着いてはいなかつた。

とにかく気になる。綾子の事が気になつて仕方がない。

準備は出来た。電気を消した。大きく息を吐いて、ドアを開ける。

僕は、バイト先へ向かう。

夜も深まつたタマムシへ、綾子の後をつけるため、僕は歩き出した。

## 【二十三】

やつてはいけない事をやつてている実感はあった。バレたら怒られるだろう。怖いと  
いう感覺より、恥ずかしいという感覺が強い。

タマムシの煌びやかな街の中、罪悪感と戦いながら歩き続けるのは辛かつた。辛いの  
だが、足は止まらない。

ポケモンを燃やしている例の犯人も、こんな気持ちなのだろうかと思つた。やつては  
いけない事だと分かつてゐる。それでも止まれない何かがあるのかもしれない。

勝手知つた街を緊張しながら歩いていると、いつもより距離を感じる。昼間綾子と別  
れた交差点まで辿り着き、迷わずバイト先の方向へ進む。

行つたから何が分かるというのだ。そもそも今日はまつすぐ家に戻つてくるかもし  
れないのだ。無計画にも程がある。それでもこうやつて動いてしまう程、気になつて仕  
方がなかつた。

あのモンスター・ボールが、知らないモンスター・ボールが僕を突き動かす。

バイト先の店舗が入つたビルが見えてくる。店の看板が目線の先に。一つ手前の路  
地に隠れて、ビルの入口から綾子が出て来るのを待つ事にした。

時刻は既に十二時を回っている。三十分もしないうちに出て来る。

リュックに入ったケーシイなら、なんて言うだろう。こんな愚かな僕の行為を止めるだろうか。

自分をこれでもかと貶める事でしか、今の自分を保つていられない。じつとしているとひたすらに自虐が続いて、諦めてしまいそうな自分が顔を現す。綾子が出て来るのが先か、諦めるのが先か。

「あつ……」

先は、綾子だつた。

店の入り口から出てどこへ行くのかと、気もそぞろに注視する。

「……どこにも、行かないのか？」

どこへ歩いていくでもなく、そのままビルの冷たい外壁に背中を預けて立ち止まつている。携帯を見て、何かを待つている様子だ。この時間で、店の前で誰かを待つている？迎えでも来るのか？

あたりを見回すも、そんな様子はない。

この時間から、また例の友達とやらとどこかへ飲みに繰り出すと言う事か。

それならそれで良い。すぐに帰るとしよう。

綾子が言っていた通りなんだな、と安心している自分がいる。安心？ 何が安心なん

だ。友達と飲んでいるだけだという事に安心している？ 男だつたら嫌？ 嫌……嫌だ。そんな姿は見たくない。

明確にそれを自覚する。

綾子が他の男と歩いているところなんて見たくない。しかし、そんな事を言う立場にない。

誰だ。一体誰が来るんだ。

さつきよりも注意深く見つめていると、ビルから出て来た意外な人物が綾子に近寄つた。

「店長？」

綾子の隣に立つたのは、恐らく店長だつた。あの背の高さ、ガタイ、間違いない。頭の上に手なんか置いて、普段見ない親し気な様子がそこにはあつた。

怒られる怖さバレる恥ずかしさ、自分への嫌悪感など軒並み吹き飛んで、その光景に大きく揺さぶられる。何がなんだか分からぬ。変な予想が立つてしまう。

店長と、綾子が？

案の定、そのまま二人は並んで歩き出す。方向は、僕が盗み見ている通りの方向。こちらへ来る。まずいと思つて咄嗟に数メートル先にあつた自販機の陰に隠れた。いや、何故隠れる必要がある？ ただ帰りが一緒になつただけではないのか？ 家ま

で送つてはいるだけかもしれない。でも、綾子は明らかに店長を待つていた。二人はどういう関係なんだ？ 僕よりも店長の方が綾子と付き合いが長い。僕の知らない関係性があつたつておかしくないのはその通りだ。だけど、何なんだこの状況。

隠れている自分の情けなさと、二人が路地に入つて来たらどうしようという間抜けさで頭が一杯で、僕はその場に蹲つた。

二人がどこへ行つたのかは分からぬ。ただ、見つからずに遠くへ行つている事を願うだけ。

僕はその夜、アパートへ戻らなかつた。

## 【二十四】

翌朝、何事もなかつたかのようになつた。僕はアパートへ戻つた。モンスター・ボールからケーシイを出すと、眠つていたのでそのまま部屋の隅の寝床へ。綾子は、いつもと同じようにベッドで眠りについていた。

昨日店長とどこへ行つていたの？ そう聞ける関係性ではないどころか、僕がそれを知つてゐる方がおかしい。後ろをつけようと思つて店の近くで張つていた、なんて言つたら愛想を尽かされるに決まつてゐる。

いくら気になつても聞けないもどかしさにどうにかなりそだつたが、夜明けまで街を歩き回つていた疲れと徹夜した眠さが、今の僕をクールダウンするには丁度良いくらいに作用していた。

立膝で壁によりかかると、眠る綾子の横顔が見える。いつもと何も変わらない。僕の前では会つた時からずつと同じだ。

そんな綾子が、随分碎けた表情をしていた事に驚いた。あんな顔が出来たんだなあ、と寂しい気持ちでおかしくなりそうだ。  
「どうしたら、いいんだろう」

自分でも良く分からぬ呟きを一つ。もう意識が飛びそうな程瞼が重い。もういいか。やつぱりこのままの関係を保っていた方が楽だ。

これまでと同じように。それだけの事。

「貫太」

目を閉じ、意識を飛ばしかけた僕を、綾子の声が起こした。

呼ばれた声に反応してゆつくり目を開けると、こちらを向いて僕を呼んでいる。既に半分眠りかけていると言つていい。ふわふわした頭で、僕は「なに?」と返事をした。

「おいで」

綾子がずれて、場所を空けてくれる。

「いいの?」

「いいからおいで」

温かい布団。綾子の隣。その大きな誘惑は僕を立ち上がらせた。迷わずベッドに潜り込む。優しく僕を抱いて、綾子は言つた。

「許してあげる。だからいいの。今は眠つて」

ああ、許してくれるのか。

夢か、現実か。

微睡の中、その一言が僕を安心させ、これ以上ない幸せの中、深い深い眠りに落ちた。

あの日の朝綾子の胸の中で眠った僕は、許してあげるという言葉が夢なのか現実なのか分からぬでいた。

そんな都合の良い事があるはずない。普通に考えればそうなのだが、耳に残った綾子の綺麗な声は現実味を帯びていた。

許してくれるんだよね？　なんて聞けないので、またしても僕はもどかしい気持ちで一杯だつた。

雁字搦めになつてゐる気がして、どうにも動けない。勇気を出してそれとなく確認してみればいいだけなのだが、どうにも決心はつかない。一人で悩み考え続けてゐるだけでは限界がある。ひたすら同じ事を思考し続け、ループしている。

最近はずつとそうだ。

あの事件をニュースで見てから特に。

「あ、こら！　だめよガーディー！」

隣で上がつた大きな声に、僕ははつとして現実へ戻され、広場で遊ぶケーシイの姿を追つた。

見知らぬガーディから逃げ回つてゐる。追つてゐる方は楽し氣だが、ケーシイは必死

だ。一緒に遊ぶ、というのはやはり難しいのだろうか。

しばらく追いかけ回された後、そのままベンチに座る僕の懷へ飛び込んで来る。

「大丈夫だよケーシイ。あの子はお前と遊びたいだけだって」

「すいません！ 本当めんなさい！」

今度は、茶髪のボブカットでブリーツスカートをひらひらさせた女性が、謝りながら駆け寄つて来た。

あのガーディは、この人のポケモンらしい。

「えええ、気にしないで下さい」

「悪気はないと思うんです。多分、逃げ回られると遊んでもらつてていると思って、追いかけたくなるんですかね……」

すいませんすいませんと、女性は謝り通し。

ガーディは、僕のところに飛び込んできたケーシイに向かつて走り寄つて来るが、割つて入つた女性に抱きかかえられ、お繩についた。

笑顔がとつても素敵なガーディだ。

「誰彼構わず追いかけ回しちゃ駄目だつて言つてるのに……」

人懐っこいポケモンなのだろう。

「元気がいいですね。あなた達も、よくここへ？」

お繩についたガーディはまだ暴れたりないともぞもぞ動いていたが、主人の困った顔を見れば、すぐに大人しくなつた。それが分かる程度には頭が良いのだろう。賢いポケモンだ。

落ち着いたガーディに安心した女性は、そのまま僕の隣に腰掛けた。

「ええ、最近はよく来てるんです。公園へ連れて行つて遊ばせると、気づいたらどこかへ居なくなつてしまつて」

「ここなら目が届きますもんね」

「そうなんです」

僕達は、遊具も豊富でそれなりに広い、ポケモン達がのびのび遊べるタマムシデパートの屋上に來ていた。

買い物に疲れたお父さんが、子どもとポケモンを広場に放り出して遠くで眺めている。奥さんはまだ下の階で買い物中だらうか。

歓談中のママさん達も、子どもとポケモンを遊ばせている。ゴーリキーが子どもに振り回され、てんてこまいな姿が見える。お守を任せられているのだろう。ご苦労様な事だ。

飲食スペースもあり、遊び疲れた子どもやポケモン達が青空の下で食事を取るには、持つてこいの場所だつた。

僕は度々ケーシイを連れて来ては、ここで遊ばせていた。最初は一緒について行かなければ広場へ行こうとしなかつたが、何度も通り内に段々場の雰囲気に慣れてきたのか、ケーシイも一匹でふらふらと広場を探索するようになつた。

賑やかな雰囲気に慣れる事は、とても良い事だ。

友達でも出来るといいのだが、まだそういうポケモンはいない。

「とつても人懐っこいガーディなんですね」

「困っちゃうくらいですけどね」

「ずっとそうなんですか？」

ガーディの頭を撫でながら、そんな事もないんですよ、と女性は答えた。

「昔は臆病で臆病で、とても知らないポケモンや人を追いかけまわす何て事しませんでした。私だつてこの子と打ち解けるまで結構時間を掛けましたから」

人懐っこくポケモンを追いかけまわすケーシイは、中々想像し辛い。

「今みたいな様子になつたのは、何かきっかけが？」

「魔法みたいに、いきなり変わつた訳ではないんです。何やつても褒めて、ずっとずっと

可愛がつて、いつでも一緒に居たら、いつの間にかこうです。ちょっと甘やかし過ぎて、わがままになつちゃいましたけどね」

ガウ、と不服そうなガーディ。わがまま、が意味するところは分からぬが、どんな

ニュアンスかは理解出来るのだろう。怒られる時に使われる言葉だ。

「褒める、かあ。なんだか大変そうですね」

「そう難しく考える事はないんです。凄いね、出来たね、と褒めてあげて、一個一個きちんと見ているよというのを伝えていけば、心を開いてくれますよ。そもそも、そのケーシイちゃんはもうあなたに懐いているように見えますけど」

きちんと可愛がつてガーディを変えていつたこの人とは違つて、僕はおつかなびつくりケーシイと接し、手探りで仲良くなろうとして来た。ケーシイには自分と同じような奴だと思われて、警戒を解かれているのかもしれない。

「そうだと嬉しいです」

「そうに決まっていますよ」

女性が落ち着いたガーデイをベンチに放すと、今度は飛び掛かつて来る事なく、おそれわりしたまま何やらワンワンガウガウ言つてゐる。僕の胸の中に顔を埋めていたケーシイだつたが、その呼びかけにゆつくりと顔を向けて、甲高い声で返事をした。

女性はふふ、と笑つて僕に微笑みかけて来る。この状況が分からるのは僕だけなのだろうか。

ガーデイの呼びかけに、ケーシイがもぞもぞと這い出し、二匹は座つたまま向かい合つた。

何やら会話をしている様子。一切内容は分からぬが、少しずつケーシイもガーディに歩み寄つてゐるようにも見える。

頑張つてゐる。慣れなくて怖い事にチャレンジしてゐる。凄いぞケーシイ。  
褒めるとしたらこんな感じ？と頭の中で練習するが、音に出さなくともぎこちなさが出てゐるのが分かる。

話し終わつたのか、ガーディがケーシイの顔を舐め始めたところで、もう二匹は完全に打ち解けたようだつた。

「良かつたなあ、ケーシイ。友達が出来たじやないか」

仲良さそうにじやれ始めた二匹を見て泣けて來た。成長した姿に感激だ。

完全におやばかである。

一つ関係を作れた事は、ケーシイにとつて大きな一步だらう。

「ガーディも嬉しそうですよ。ありがとうございます」

そう言つて、女性はぺこりと頭を下げる。

「そんな、こちらこそお礼を言いたいくらいです。ケーシイの初めての友達ですから。

出来れば、あなたも仲良くしてやつて下さい」

「もちろん！」

えくぼがチャーミングな、ポケモンと同じように笑顔の素敵な女性だ。

「ちなみに、お名前を伺つても？　僕の事は、貫太と呼んでいただければ」「私の事は、沙穂と呼んで下さい」

僕にとつても、珍しく出来た知り合いだつた。

「またここでお会いできるといいですね」

「ええ、機会がありましたら、またケーシイと遊んでやつて下さい」

ケーシイは一つ壁を越えた。新しい関係性を作つたのだ。

沙穂さんだつて、ガーディに対し一生懸命接したからこそ今がある。

対して僕はどうなのだ。気になるなら聞けばいい。聞けない関係性なら、聞ける関係性になれるよう頑張ればいい。結局そういう事なのだ。

じやれあう二匹を眺めつつ、僕も変わらなければいけないとと思う。

ケーシイと一緒にいるようになつてから、色々な事が変わりつつあつた。誰かと一緒にいるというのは、こういう事なのだろう。

## 【二十五】

「ちよつと出かけて来る」

夜も深くなり始めてきた頃、一日のんびりしていた綾子が身支度を始めた。テレビをぼうつと眺めつつ、そろそろ寝ようかと思つていたところだつたのだが、ままある事だつたので特に驚く事でもない。

「どこ行くの？」

何気ない顔をして、ベッドに腰掛ける僕はテレビに視線を預けつつ、すぐに質問した。  
いつもの僕では考えられない。

数舜程固まつた空気が、狭い部屋に流れる。僕は綾子の方へ顔を向け、しばらくの間互いの顔を見合つた。今までほとんどなかつた事なだけに、綾子は不思議そうにこちらを見つめている。重苦しいこの部屋の空気を、ケーシイのすうすうという寝息がわずかに柔らかくした。

普通に考えればなんでもないこの会話で、綾子は不思議そうな視線をこちらへ向け続ける。圧力と言つてもいいかもしない。僕は怯まず、もう一度「どこ行くの？」と質問して、返事を待つた。

「ちょっと出かけてくるだけだつて」

「教えてはくれないの？」

「どうしたの急に」

僕の様子がいつもと違う事にようやく気付いた綾子は、身支度を中断してこちらへ居直つた。

「ちょっと出かけて来るだけ。朝までには戻つて来るから気にしないで」「気にしないでって言われても、気になるよ。こんな時間に出掛けて、いつも何やつてるの？」

これだ。気になるならこういう風に言えば良かつたのだ。何の事はない。僕が一步踏み出せば良かつた。後を気にして何も出来ないままじや、いつまでも前には進めない。

僕の問いかけに、綾子は露骨に嫌そうな顔を浮かべた。自分のプライバシーに突っ込んで来るなど、端的にそう言いたそうなのがよく分かる。心地よかつたこの関係も終わってしまうかもしれない。それでも、僕はもう前に進まずにはいられない。様々な事が変わり、このまま前と同じようにただ時を過ごすのは難しい。

「そんなに気になるなら、ついてくる？　いいよ別に」

僕が引かないと分かったのか、ため息をついた綾子が、根負けしたのかようやく折れ

た。

「そんな嬉しそうな顔しないの」

「嬉しいよ。だつて、綾子がついて来てもいいよって言つてくれたんだから一緒に身支度を始め、眠つているケーシイを連れて行こうか迷つた。僕を探して外に出てしまう事を考えるとやはり心配だ。綾子もそれには同意だつた。

ケーシイも連れて、どこへ行くとも言わない綾子の後ろを、僕はついて行く。電気が消され、外へ。タマムシの街へ、僕達は溶け込んでいく。

## 【二十六】

どこに行くのかは聞かなかつた。一緒に連れていつて貰えるだけで嬉しい。それを許可するという事は、僕が思つているような、予想したような事ではないのかもしれない。

一人嬉しくなつて、綾子の横を揚々と歩き続ける。

「何、そんなにやにやして、気持ち悪い」

「ごめん」

綾子との会話はそれだけだつた。

おぞましい事件が起きていても、タマムシは変わらない。相変わらず賑やかで、煌びやか。色々な人達が行き交い、僕等はその雑踏に紛れる。

どこかの店に行くのか、例の友達に会いに行くのか、何しに行くのだろう。

いつものメインストリートを歩き��けても、綾子は一向に足を止めなかつた。こんな時間に行くところなんてどこかのバーや飲み屋くらいのものだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

煌びやかな景色を背中に背負い始めた頃には、目の前の光景は暗く静寂が息づく。住

宅街に入り、街灯が小さく道を照らす。丸く照らされた地面を頼りに進み続ける。

僕達は一言も喋らない。グラデーションのあるタマムシを無言で歩き続いていると、生きているのか死んでいるのか分からぬ、不思議な感覚に陥る。雑踏に紛れたはずなのに、僕達だけが街から浮いた存在あるかのように、二人で歩き続ける。

綾子と一緒にならそれでも良い。

そんな事をぼんやり考えていると、目の前には暗闇の中でも妖しく騒めく木々が現れる。

よく知っている場所。タマムシ公園。

こんなところまで歩いてきてしまった。確かにこの時間はバスも走っていないのだが、何故わざわざこんなところまで。

公園脇の歩道を歩いていき、そのまま通り過ぎるのかと思えば、綾子は入口の柵を横切つてそのまま公園の中へ入つて行く。

こんなところに用事があるとは思えない。それこそ、ポケモンを燃やす……とか。  
そんなまさかね。

と、冗談にしてもあまりに不謹慎な事を思う。綾子が向かつた先は、僕が初めてケーシイと公園に来た時に座つた広場だつた。螺旋状の滑り台を眺めつつ歩いた先の、鉄棒横のベンチの方向へ向かっていく。よく見なくても、公園の街灯に照らされたそこに誰

かが座っているのが見える。男だ。

「お待たせ」

ベンチの前まで来て、僕はその姿に先日の光景を思い浮かべた。

座つてているのは店長だった。

僕もお待たせしました、というのはおかしい。明らかな自分の邪魔者感を感じ、途端に居づらくなつた。

「なんだ、今日は一緒なのか」

店長も僕が綾子と一緒に来た事に驚いている様子。今日は、という事は、やつぱり何度もこうして二人で会つてているのだろう。

「今日は二人。駄目だつた?」

「お前がいいならそれで良い」

僕が見た事ない綾子の話し方だつた。店ではいつも敬語だ。知らない事が怖い。それがこんなにも不安にさせる。

「貫太」

ベンチに座つた店長に呼びかけられ、僕はビクついてしまう。情けない限りだ。ここで強く行けないでどうするんだ、自分を鼓舞するが。どうしてもそんな偉そうな事出来ない。

「お前、綾子が何のために今日ここに来たのか知ってるのか?」

「……分かりません」

「綾子は綾子で何も話してないんだな」

問い合わせられた綾子は何も反応せず、店長は溜息をついて額に手を当てた。  
僕が思っていた様子とは違って、混乱してしまう。

「面倒臭い奴らだな本当に前らは。何でそんなにじれつたいんだ  
しゃんとしろしゃんと」と言うと、店長は僕と綾子をベンチへ座らせ、その前に腕を組んで仁王立ち。

「いい加減にしろよ。いつまでだらだら青臭い事やつてんだ。自分に酔つてるのもその辺にしどけ」

呆れた顔で僕たちを叱る姿がそこに。

何がなんだか。綾子はただ、恥ずかしそうに隣で小さくなつていた。

## 【二十七】

「まず貫太。お前なあ、いくら氣になるからつてあんなところで張るな」唐突に突き付けられた自分の恥ずかしい行いに赤面。とてもじやないけど顔を上げられなかつた。

「それから綾子。お前もお前だ。俺にいつまでも恋愛相談なんかすんな。だからこんなややこしい事になるんだよ」

隣には、どんどん肩をすぼめて小さくなる綾子がそこに。黒髪が邪魔して横顔はよく見えなかつた。

「いいか。好き同士なら告白しろ。そして付き合え。やる事やるならやつちまえ。以上！」

ふん、と鼻を鳴らして、店長は最近の若い奴はまどろっこしい事この上ない、と文句を垂らしている。

「あ、あの、一体どういう事ですか？」

「綾子はなあ、お前との事をどうすれば良いのか相談に来ていたんだ」「は、はあ……えつと、それつて」

予想もしなかつた事態にまだ困惑しているが、綾子は僕とのこのふわふわとした中途半端な関係をやめて、きちんと決めるつもりだつたという事か。だとするとこの前の光景は何だつたのだろう。

「綾子を張つてどうする気だつたんだ？」

「つける気だつたのか？」

「い、いえ……その、まあ、そんなところです。あの、この前僕が自販機の脇に居たの気付いていたんですね」

穴があつたら入りたい。また段々と恥ずかしさが込み上げて来て、鼻息荒い店長の顔を見られなかつた。

「お前があんな事するから、綾子からの相談も増えたんだぞ。どうすればいい？　つてそんなの自分で考えろ。まつたく本当に、姪じやなかつたら追い返しているところだ」

「姪？　今、姪つて言いました？」

恥ずかしさも忘れて、僕は耳に入つた単語に反応する。

「そうだ。言つてなかつたからな。こいつは姪だ」

店長が僕に対してそう宣言する姿に、なんだそつかあ、と今まで心配してきた事が全てふつとんだ感覚で、随分と身体が軽くなつた気がした。我ながら現金なやつだと思う。

二人の仲良さそうな光景がすべて腑に落ちた。関係性を表にしたくなくて、普段は敬

語なのだろう。

「だが分かんねえ、貫太を今日いきなり連れてきたのはどうしてだ？」

店長の言葉に、綾子は俯きつつ声を絞り出した。

「だつて、今日はやたらと押して来るから。どうしていいかわからなくて、連れて来ちゃつた」

店長がつく再びの溜息と、なんてかわいい、と思つてつく僕の溜息はまつたく別物。思い切つて良かつた。

「いじらしいじやないかまつたく。貫太。お前ちやんとしろよ。泣させたらクビだ」

「ええ！ そりやないですよ！」

「嫌なら泣かせるな。いいな」

店長はそれだけ言うと、今日は帰るからな、と言つて去つて行つた。ガタイの良い、広い背中が闇の中に消えていく。

見えなくなるまでその背中を視線で追つた後は、残された僕等の間に、気まずい空気が流れる。

ああ、何を言えばいいんだ。

綾子の方を見る事も出来ずに、僕はただ、風で騒めく雑木林を眺め、次の言葉を悩み続けた。

## 【二十八】

僕は静かに浮かれ始めていた。何しろ店長、もとい綾子の叔父さんからのお墨付きで、背中を押された気分だ。

店長が消えてから、もう随分時間が立っている。二人で黙つてベンチに腰掛け、僕は視線の先の雑木林を見つめ続ける。

この公園が、ポケモンを燃やした場所ではなく、綾子との特別な場所になりつつあつた。

もちろん、燃やした事実が消える訳ではない。それでも、今だけは、この今の瞬間だけは少しだけ横に置きたい。そう思うのはいけないだろうか。

随分長い間黙つていた綾子だったが、ようやく落ちついてきたのかゆつくりと立ち上がる。

「綾子」

僕の言葉に、反応はない。

考え込むようにうろうろし、何を言おうか迷つているような様子だった。

こちらから何か声を掛けなければ、ここで言えなきや駄目だ。僕の気持ちを、触れず

にいたこの気持ちを思いきり伝えるチャンスじゃないか。

僕も立ち上がり、背中を向けてうろうろする綾子の前に出て、まっすぐに見つめる。何かが違う事をすぐに悟つた。

恥ずかしがつてゐる訳じやない。何か気まずそうにしている訳でもない。

綾子はただ、果てしなく無表情だつた。店長の前で恥ずかしそうにしていた、しおらしい綾子はいない。いつも家で見る、何を考えているか分からぬ底の見えない表情がある。

浮かれていた気分が一気に冷めていく。そんな状況ではない事が容易に見て取れる。言おうと思つていた言葉は既に失われた。代わりに沸いてくるのはただ一言。

「何か、あつたの？」

店長の前にいた綾子と、今の綾子は違ひすぎる。ここまで違うと、わざととしか思えない。どつちが演技か、そんなものは確認するまでもない。

僕等はこれでもそこそこの期間一緒に住んでゐるのだ。今まで見てきたこの表情こそ、いつもの綾子である事は間違いない。

「本当は、誰にも言うつもりなかつた」

綾子は話し始める。

間を開けて、溜めている言葉を僕は待つた。

「もしかしたら、違うのかもしれない。ずっとそう思つてきたけど、どうしても疑いが消えないの。そんな訳ないと思つても、どうしてもそう考えちゃう私がいる」

恐らく心からの言葉を吐露しているはずなのに、表情は固く、ただ、我慢するかのように強く唇を噛んだ。

緩めてはいけないという意思が籠つた、何かを我慢するような悲痛な表情に、僕は思わず綾子の手を取つてしまつた。

「もし話してくれるなら、聞きたい」

さらりと言葉は出て來た。綾子はまっすぐに目を合わせ、それを受け取つてくれる。

何を言おうとしているのか見当もつかない。僕のうかれた気持ちはとつぶに冷え切り、綾子の言葉を待つ。

「権田さんが、ポケモンを燃やした犯人かもしれないの」

聞いても、理解出来なかつた。

言葉を字面通り飲み込んでも、どうしても腑に落ちてこない。一体綾子は何を言つているのか。

「そんなまさか。店長だよ？ そんなこと」

あの人には、単純に言つてしまえば良い人だ。情に熱く、ビジネスライクになれないところが短所だと言えるくらいに。

「知つてゐるでしょ貫太だつて。権田さんが立派な人なのはそななんだけど、怒ると手が付けられないんだから」

それも店長の一面だつた。基本的に良い人なのだが、何かスイッチが入ると突然怒り出す。そうなるともう誰にも手が付けられず、ただ静まるのを待つしかない。店の備品だつていくつも壊してゐる。

「知つてゐるけど、それだけじやなんの理由にもならないよ」

「それだけじやない」

綾子はバッグからメモ帳を取り出すと、明かりに照らされたベンチに再び座つてそれを広げた。

これを見て、と言つた綾子の言葉に従い、僕も隣に座つてメモ帳を眺める。そこには、日付とポケモンの名前が羅列している。生息数が多く、また進化前のポケモンが全て。よく店で見かけるポケモン達だと思う。

見開きの左側に書かれたポケモンの名前一匹一匹から矢印が伸びており、右側のページへ及ぶ。

そこには左ページと同じように日付とポケモン名、それとバツ印が羅列している。歯抜けになつてゐるが、どういう意味を表すのか。

「これはどういうメモ?」

綾子は手帳を持つ両手の力を込めた。

「左側が、店に来ているポケモン達の名前と日付。右側が、事件で燃やされたポケモンの名前と日付のリストなの」

「完全、一致？」

「くんと綾子は頷く。まだ矢印の先にバツ印のないポケモンもいるから、次の犠牲者はこの中から出るかもしれない、という事か。」

「このリストは、いつから？」

「五体くらいがニュースになつた時、なんとなく思い当たつたの。もしかしたらと思つてそれからずつとメモを取つてゐるんだけど、このメモの中から皆死んでいくの」

前にジャージ姿の男に追いかけられた事を思い出す。あの日、店長のシフトはどうなつていたか。

自分の携帯を取り出し、店のシフト表データを開く。あの日の事はよく覚えている。カツラさんと会つた日だし、自分が休みだつた事と照らし合わせれば、すぐに日にちは特定出来た。

「……休み、か」

ちらと見た男はそんなにガタイが良かつたかと記憶を探るも、どうしてもモヤモヤとした人物像しか頭には浮かばない。店長ではなかつた、と断定できるものはない。

そもそも、後ろからついてきたあの男が犯人かどうかもわからないので、どの道決定的なものにはならない。

「でも、まだ疑いなんだよね。証拠はないんでしょ？」

「決定的なものはね。でも、店に来るポケモンとここまで合致すると、気持ち悪いものを感じる。それと、権田さんがどうして旅をやめたのか知つてる？」

いや、と僕は首を横に振る。随分唐突な話だ。

「ポケモンへのあたりがきつすぎるの、あの人。人のポケモンはきちんと可愛がるのに、自分のポケモン相手には厳しかった。そういう扱いがたたつて、手持ちのポケモンを一匹亡くしてるの。それが原因で周りからも非難され旅をやめてるし、あの店の店長をやり始めてからは、貫太も知つている通り残りの手持ちポケモンも手放して、今は一人」「それと、今回の事と何の関係が？」

綾子は手帳を持つ手を震わせ、俯く。

「権田さんが自分のポケモンへ向けていた厳しい視線が、私には分かるの。その視線が、お客様のポケモンに向かっている時がある。それを見る度、どうしても怖くなつてきて」

震えた綾子を抱き寄せ、背中をさする。確かに言つている事は分かる。今聞いた話だけであればもしかしたら、なんていう事を考えるのも分かる。それでも、まだ店長が犯

人だと言いい切るのは無理だ。

綾子は少し感情的になりすぎていて、僕の頭の中にはカツラさんの顔が思い浮かんだ。僕だってまさかとは思いつつも、状況が状況だけに気味悪く思つて警戒してきた。それと同じだ。

カツラさんが店に来た時なんてそれこそ驚いたものだが、でもやつぱり直接話しているとそうじやない気がするし、立場のある人がそんな事をするのか、と思えて……。

「いや、違う。カツラさんが店に来たのって、そういうことか」

僕の呟きに、顔を上げた綾子が一つ首肯する。

「そう、そうなの。タマムシジムのトレーナー達を連れて来ただけに見えるけど、うちの店をそれとなく調べに来て、牽制しているんだと思うと辻褄が合う」

カツラさんと初めて会つた店で、僕の隣に座つたのは、あれも偶然なのか？ その後タマムシの繁華街で僕に声をかけ、家まで送つてくれたのも偶然か？ 始めから僕を調べていたんじやないか？ あの店の従業員だから、僕の隣に座つたのではないか？

「綾子、ポケモンを燃やされているトレーナーって、うちの店に來ていた人達？」

もしそれが共通点となるならば、警察やカツラさん達がそれを見逃すはずがない。後は現場を押さえて捕まえるだけだ。時間の問題だよ、というカツラさんの言葉は本当なのかもしない。

「それは、私にも分からぬ。燃やされたトレーナーの個人情報は公開されていないから、私だと調べようがないで」

「だつたら、カツラさんにそれを確認してみよう」

「そう、だよね。それが一番いいんだよね」

綾子は手帳を閉じ、もう一度自分の言葉を反芻する。僕は勢い余つて余計な事を言ったのかも知れないと思つた。

それを確認し、本当に共通点として明らかになつてしまえば、それこそ綾子の言つてゐる事が真実味を帯びてくる。それは叔父さんがポケモンを燃やした犯人だという事を表すかもしれない。綾子にとつてきつい事実である事は間違いないのだ。

「いいの、気にしなくて。私も本当は確認しなきやいけないと思つてるんだから。でも、どうしても勇気が出なくて、踏み込めないでいただけだから」

「軽はずみな事言つてごめん。やつぱり、これは警察に任せよう。綾子が持つてゐる情報をお伝えするだけでいいんだ。カツラさんにまた連絡をとつてみよう。彼も捜査に協力している言つていたから、きつと聞いてくれる」

「本当? 貫太から伝えてくれると、助かる」

綾子はようやく抱えていたものを少しだけ下せた事に安心したのか、顔を綻ばせてはにかんだ。ほとんど見た事のないその表情を見ただけで、僕はまた張り切つてしまう。

カツラさんに情報を届けるだけなのに。

「伝えるのは明日にして、今日は帰ろう」

立ち上がりつて帰ろうとしたのだが、綾子が僕の袖を掴んで、ごめんと一言。表情は、俯いたままなので分からなかつた。

「権田さんに会つていたのはね」

「わかつてる」

僕はその先を遮つた。聞くのは怖かつた。その先を聞いて全てが壊れてしまつよりも、このままの方がずっと良い。

「綾子が少しでも店長を探ろうとしていたのは分かる」

「何が出来るか分からなかつたけど、会つていれば、その間は何も起きないから」

「このままで良い。全てを聞かなかつた事にすればそれで良い。僕たちはまだ、このままで……。」

「いいんだ。何も言わないで欲しい。今日はこのまま帰ろう」

「わかつた」

綾子は立ち上がり、僕は歩き始める。横並びで、今までと同じ様に。

公園から出れば、僕等はまた無言の時間を共有した。さつきあれだけ話したのが嘘みたいに、ただ足を前に進めているだけ。

これからどうするのだろう。綾子はまだ店長と会う事を続けるのだろうか。あまり無理して、危ない目には合つて欲しくない。だがいくら僕がやめた方が良いと言つても、綾子は自分で決めた事をやめないだろう。

無言で歩いていても、考えてしまうのはさつきの話。あれ以上話し合つても先はないため、あまり精神衛生上良くない。

少しでも違う話題がないかとあれやこれや考えていると、モンスター・ボールの事を思い出した。

「そういえば家でケーシイと遊んでいる時、綾子のバッグを床に落としちやつただけどさ」

「うん」

「中にモンスター・ボールが入つてたんだけど、ポケモンを捕まえるの？」

「え？」

綾子は不思議そうな顔をこちらに向けた。明らかに、そんなものは知らないという顔だつた。

「バッグの中に入つているモンスター・ボール、知らないの？」

あの時落としたバッグは、今持つているものだ。

綾子は肩にかけたそのバッグの中を探し、すぐに例のモンスター・ボールを取り出し

た。

「ほら、それ」

「私、こんなの知らないけど」

薄気味悪い事を言う。知らないモンスター・ボールが鞄の中に入っているとはどういう事だ。街ですれ違つた他人のモンスター・ボールが鞄に紛れた? そんな事があるか?

不思議な事態に僕等は住宅街の中足を止め、二人でそのモンスター・ボールを見つめる。

「ポケモンが入つてるね」

どこを見ればそれが分かるんだろう。仕組みが分からぬ僕に気付いた綾子が、モンスター・ボールを軽く上に投げた。

「未使用的のモンスター・ボールは、衝撃を受けるとすぐに開いちやうの。だから、こうやって軽く投げても開かないボールは、何かが入つている証拠」

なるほど。それなら、何が入つているのか確かめるのが良いだろう。家で開けて大きなポケモンでも入つていたら大問題だ。大家さんに大目玉なのは間違いない。  
「確かめてみようか」

綾子は手のひら大のそのボールを両手で持ち、それを開いた。中からは赤い光線が地

面に向かつて飛び出し、中に入つていたポケモンの形になつていく。

これは。

「そ、そんな……」

闇夜の中で悲鳴が上がつた。

僕の耳をつんざく大きな悲鳴。

顔を覆い、その場に蹲る綾子。

僕はボールの中身に、視線が吸い込まれた。  
見た事があつた。

僕は良く知つてゐるじやないか。最近よく思い出してもいた。

目の前の現実を見て、それでも綾子のように悲鳴を上げられそうにな  
い。

ああ、そうか。そうだつた。僕はこれを見ても酷く落ち着いている。酷い事だとは思  
うが、ああ、と目を伏せる程ではなかつた。

僕はこれを直視出来る。

記憶の映像と重なつた。

キヤタピーらしき焼死体が、そこには転がつていた。

## 【二十九】

目の前の事実を放つておく事はできず、僕はすぐに警察へ連絡した。

程なくしてジ Yun サーさんは駆け付け、続いてやつてきたポケモンセンターの救急隊員が死体となつたキヤタピ一をボールに戻して搬送する。

モンスター ボールの中に入つてしまえば、死体はそこにはない。何もなかつたかのように、小さなボールに收まつた。僕の脳裏には、死体が焼き付いて離れない。

閑静な住宅街が途端に騒がしくなつた。回る赤橙が当たりを照らし、普段あまり会う機会のない人達が集まつてゐる。

僕達はそのまま警察署へと同行し、事情を話す運びとなつた。

ここまで、僕はほとんど部外者のような感覚でいた。現実離れした事実を前に、淡淡と物事を進める事しか出来ない。蹲り泣きじやくる綾子を宥めつつ、警察の方と綾子の間を取り持つた。

僕たちが犯人だと疑われるかと心配したが、どうやらそんな様子でもない。何しろ僕はバトルの出来ないケーシイしか持つていなし、綾子に至つてはポケモンを持つてしない。

人間だけの犯行とは思えなかつたが、協力させられているポケモンがいるのは、どうやら間違いないらしい。

僕等がひたすら細かく聞かれたのは、最近の動向について。

綾子はバイト先とうちを行き来する以外にも外出しているが、僕には細かい事は分からぬ。

しかし、期せずして綾子が普段出かける時にどんな事をしてどこへ行つてているのか知る事となつた。

好きなバンドのライブや、友人と食事や飲み会、買い物に行つていたとの事で、日時や時間、場所等、事細かに警察の方にゆっくりと綾子は説明した。

僕よりよっぽどアクティブだ。

全て説明し切つて解放されたのは、もう朝方だつた。

「今度こそ、帰ろう」

警察署の自動ドアを出てタクシーを待つてゐる間、綾子を心配しいろいろ声を掛けるが、返つて來るのは空返事のみ。

かなり憔悴している。とても話が出来る雰囲気ではない。少しでも早く眠らせてやりたい。

タマムシは一日中タクシーが走つてゐるため、すぐにやつてくる。自宅の住所だけ伝

えると、無愛想な運転手が車を発進させた。

車内ではやつぱり無言だったが、それはこの浮世離れした状況にお互い疲弊しているためだ。朝方になつてようやく落ち着いたタマムシの景色が、少しだけ心を落ち着かせてくれた。

景色を眺めていても、ちらつくのは死体の記憶。生き物が完全に息絶えて、その形や色等、全てを奪われた姿は、酷く惨い。そのポケモンがキヤタピーであるという事を全て奪われたかのようで、何もかも否定され、蹂躪されている。存在の否定だと思つた。再度あの姿を目にし、いかに非道な行いかよく分かつた。ポケモンにそこまで馴染みのない僕でも、嫌悪くらいは覚える。

ケーシイと同じ目に会つたら、僕はどうなるだろう。

思い切り取り乱せるだろうか。取り乱せなかつたら、僕はそこまでケーシイを好きではないという事なのだろうか。

傍にいる生き物が死ぬという事実に、僕は鈍感だつた。経験がなかつた。加害の経験しか、持つていないので。

それは自分の中でひどく濁つた、棘のあるコンプレックスになりつつあるのを感じた。

綾子に対する気持ちと、ケーシイに対する気持ちは確かに違う。だけども、僕はケー

シイだつて大切に思つてゐる。

自分がどういう人間なのか、よく分からなくなつてくる。  
生き物と付き合っていくことは、こんなにも難しい。

## 【三十】

家に帰ると綾子はすぐにベッドへ転がり、死んだように動かなくなつた。

確かに刺激の強い光景だつただろう。ポケモンの焼死体だ。それは分かるが、綾子があそこまで取り乱す姿が少し不思議だつた。

グロテスクな映像や作品も特に気にせず視聴していたし、耐性がない訳ではない。

綾子は、今回の事件にかなり固執しているように思えた。状況的には疑いたくなるのかもしれないが、あの情報だけで店長が犯人かもしれないとあそこまで思えるのは、何か他に理由があるのかもしれない。

初めて綾子とあの事件の話をした時、もの凄い不快感を示していた。

レストラン「架け橋」で綾子が突然立ち上がりつて店を出ていったのも、里中さんと事件の話をしている時だ。

固執する何かがある。

今回、自分の鞄バッグからモンスター・ボールが出て来た事から、綾子は更に強く店長を疑うだろう。

あの状態ならば、それも無理はない気がする。

そもそも、何故綾子のバッグの中にあのモンスター・ボールが入っていたのか。あのボールを仕込んだ疑わしい人物は、僕も含む店の人間だ。

状況から見ても店長が怪しいとは言えなくもない。

店長は、自分の扱いの酷さから、ポケモンを一匹亡くしているという。その事実は、あいう事件を起こしかねないという危うさを秘めているという事だろう。

まさか店長が、と思ってしまうが、店長が自分のポケモンに対しそういう態度を取りついたという事実だつて、僕にとつてはまさか、だ。

人間何をやらかすかなんて分からぬ。

僕が良い例だ。

店長が本当に犯人ならば、僕だつてそれを止めたいし、なんとかしたい。

少しでも助けになればと思い、本当はカツラさんに渡そうと思つていた綾子が持つていた情報は、警察に渡してきた。警察やカツラさんがもし本当に店長を疑つて捜査に来ていたのだとしたら、とつぶに掴んでいる情報だろう。

時間の問題とは言つていたが、もう、一匹も被害ポケモンが出て欲しくない。

実際、ここ最近は次の被害ポケモンが出ていなかつたのだ。犯人が警戒して犯行を止めていたのだとしたら、カツラさんの件を含めて考えれば、ますます店長を疑いたくなる。

「……僕らがやる事じゃないよなあ」

テーブル前に胡坐を搔き、片肘ついて色々考えてはいたが、何にしろこれは僕等の仕事ではない。

首を突っ込んで警察の迷惑になるのも駄目だ。

綾子の様子だけ気にして、静かに警戒しつつ事件が解決するのを待つのが一番。

「お、なんだケーシイ。遊びたいのか」

帰つて来てから寝床に足を伸ばして座つていたケーシイだつたが、ぼんやりするのも飽きたのか、もぞもぞと這つて足の上にようじ登つて来た。

最近はこうやって、遠慮せずに甘えてくれる。最初にこの部屋で会つた時と比べると、随分進歩した。あのガーディとも仲良くやれているようだつたし、変わりつつあるのが目で見て分かるようになつた。こうやって平穏な生活を続けていれば、ケーシイはテレポートを使えるようになるだろうか。

「ごめんなケーシイ。色々あつて疲れててさ。少しでも眠らなきやいけないんだ」

鳴き声を一つあげて、ケーシイは足の中で丸くなつた。大人しく言う事を聞いてくれるのは嬉しいのだが、そこで寝られても困る。でも、僕をクツシヨンにして気持ちよさうに寝いでいる姿を見ていると、動く気にならない。

寝入るまで待つとしよう。

疲れてはいるが、今の僕はそれくらい待てる。

## 【三十一】

あの事件の日から、綾子はしばらく落ち込んだ様子が続いていた。外にいる時やバイトをしている時には見せないが、家にいる時はどうも元気がない。一見普段と変わらないが、ぼうつとしたり、思い悩んだように考え込む事が増えた。

あれから出掛けていなかから、外で店長と会っている様子はない。店でも今まで通りの態度に努めようとしているのは僕でも分かつた。

綾子なりに店長を探り、少しでも犯行が止まればという気でいたらしいが、あれを見てしまった今ではもう怖くて仕方がないのだろう。事件に固執している様子を見れば、無理をしてでも店長と会おうとするのかと思つていたから、僕としては心配が少なくて良い。綾子が何かに巻き込まれるのはごめんだ。

だが、バイト以外家にずっと籠りっぱなしもきつと良くない。そう思い何度か声は掛けているのだが、綾子は頑なに一緒に外へ出ようとしない。膝を抱えて、壁に寄りかかつたまま何かを考え込むように動かないのだ。困ったなあ、と何か連れ出す良い方法はないかと考えていると、里中さんから携帯へ連絡が入った。

バトル場へ一緒に行かないかい？　とのお誘いである。僕の言葉を社交辞令として受け止め、実現はしないかなと思つていたところだつた。

これだ！　と一瞬思ったが、あの事件で落ち込んでいるなら、たくさんのポケモンがいるところに行くのはどうなんだろう。バイト先にもポケモン達はいるし、特に問題はないだろうか。

元気なポケモン相手には、いつも通りの愛想を見せている事を考えれば、行けるのかもしれない。

駄目なら断られるだろう。

「なあ、綾子」

部屋の壁に背を付けてぼうつとする綾子に、僕は話しかけた。

「何？」

「この前里中さんと話した時、バトルを見せてもらうつて話をしたじやない？」

「うん」

「来週、里中さんからそのお誘いが来てるんだけど、一緒にどう？」

そういうえば、興味ないつて言つていた気もする。

駄目かなあ、と半ば決めつけながら話していると、「いいよ。行く」

二つ返事である。

「あ、行く？」

「何それ。私は行っちゃだめ？ 断ると思つて誘つたの？」

「いやいや、そうじやない。興味があるなら行こう」

こくんと綾子は頷き、その黒髪を揺らした。

そうと決まれば楽しみになつてきた。里中さんが

ゴーストを持つてているのは知つているが、他にはどんなポケモンを持つているのだろう。

どんなバトルをするのだろう。

ふと、似たような感覚を思い出した。

店長や里中さんと、ケーシイの話をしていた時の事だ。ポケモン関係の話に入つて行ける喜び。小さい頃からどこかで憧れていたのだと気付いて、その輪に入れた喜びだ。

今回も同じ。友達とバトルをしたり見たり、なんていうのは僕にとっては最も縁遠い話だつた。

誰とでも良い訳ではない。ケーシイや綾子と一緒にバトル場へ行けるからこそその喜びが、僕の中に沸き立ち、昔感じた疎外感が、今やつと晴れて行くような、そんな感覚を覚えた。

## 【三十二】

タマムシシティのバトル場は、とても賑やかだ。

デパートへ行つた時に感じるファミリー感のある賑やかさではなく、どちらかと言うとマツチヨで熱い感じのする賑やかさがある。

実際には協会が実施する公式大会を行う、もつと豪華なバトル場もあるのだが、今日来ているのはもつと市民が慣れ親しむ、解放された場所だ。

僕は小学生の時一度來た以来。

もうほとんど覚えていなかつたが、中に入つた瞬間に、こんな雰囲気だつたかなあと、艶氣な記憶がうつすら蘇つた。

「ちょっと受付して来るから、ここで待つてて」

バトル場前で集まり、里中さんに先導されて中に入つた僕と綾子はキヨロキヨロ当たりを見回していた。

どういうシステムなんだろう。こんなにたくさんの人が、バトルをする順番を守るとも思えない。

なんとなく、ボウリング場を思い浮かべた。

受付を行い、指定された場所でバトルをするのだろうか。

僕は興味津々だが、ケーシイは少々緊張した面持ちで、腕の中にすっぽり収まつて固まっている。タマムシデパートの屋上は大丈夫でも、この暑苦しい感じは苦手なのだろう。

ますますこいつがバトルをするところなんて想像出来ない。というよりも、危なくてそんなところに出せない。ハラハラして僕がバトルどころではなくなつてしまふ。

「お待たせ。三階だから、ついてきて」

番号札を持つた里中さんが帰ってきた。言われた通り後につき、階段を上つて行く。「ここつて、どういうシステムなんですか？」

「トレーナーカードを提示して、登録するんだ。階と場所によつてルールが分かれているから、その日やりたいバトルを選んで受付を行えば、番号札を渡されるから、後は電光掲示番とアナウンスに従つて指定の場所に行くだけだよ」

「初心者が、強い人と当たる事もあるんですか？」

「一応、ある程度レベルが合うようにはなつてるんだ。トレーナーカードを提示するからバッジの数も分かるし、経歴や実績も書かれるからね。それに、最初は一番レベルの低いところに割り振られても、勝つていく内にレートが上がれば、少しづつレベルの高いところに行けるんだよ」

ポケモンバトルと言えば超大人気スポーツだ。人も多いし揉め事も多いだろうから、きちんと管理しなきやならないスタッフも大変だろうなあと思つた。

あまりに知らない事が多すぎて、何を聞いても新鮮で楽しい。綾子はどうかな、と隣を歩く横顔を見れば、いつも通りの無表情だつた。だが、辛そうでも、思い悩んでいる様子もない。少しでも気晴らしになつてくれれば良いのだが。

三階につけば、いくつものバトル場を中心周囲が通路になつており、その壁側には飲食店も多く立ち並ぶ。中には簡易的なポケモンセンターまであるらしい。

「昔は簡易的なポケモンセンターなんてなかつたし、飯も酷かつたんだよ。今は随分ましになつた」

傷ついたポケモン達が回復し切らないまま、連続で戦わされるなんて事も頻発したらしい。

気合いや根性で強くなるんだなんて、よく言われたもんだと里中さんは懐かしそうに語つた。

フードコートで軽食を買い、バトルまでの待ち時間を過ごすらしく、里中さんおすすめのゴーリキー握りをご相伴に預かつた。

力が強すぎて全て潰しかねない気がしたが、随分優しい手つきだつた。まつたく知ら

なつたがタマムシのB級グルメらしい。僕はタマムシ人としてあまりに何も知らないすぎる。

「さ、ちょっと腹ごしらえしたら、早速一戦行つてくるよ」  
席につくと、エネルギー・チャージとばかりにおにぎりを頬張る里中さんは随分やる気だつた。後で感想とか求められたらどうしようなんて考えるくらい、色々説明してくれる。

フロアの中心部にはバトル場がいくつもあり、アルファベット毎に部屋が別れてい  
る。それぞれのドアからトレーナー達は入り、中で対峙するようだつた。

トレーナーが立つボックスの後ろは長いガラス窓がついており、どうやらそこから観  
覧出来るらしい。

感想を求められても困るのだが、僕は里中さんのバトルが楽しみだつた。

「綾子ちゃんも来てくれて良かつたよ。貫太君、ちゃんと説得してくれたんだね」  
「説得をした訳じゃないんですけどね」

隣に座る綾子は、ただもくもくとお握りを頬張つている。

「ま、今日は楽しんでよ。興味が出てきたら、登録すればいいしさ。初心者同士でバトル  
出来るスペースもあるから、あんまり気負わずやってみるといいよ」

無理だろうなあ、と正直思う。ケーシイが誰かと戦つて倒すなんて、やっぱり想像出

来ない。そもそもテレポートも使えなければ、他の技も使えないんじやないか？ それじゃあ流石にバトルにならないだろう。

食事を済ませ、バトル談義に耳を傾けていると、度々流れていった番号と場所のアナウンスに、里中さんは反応する。

よし、と気合十分に立ち上がった姿を見たら、なんだかこちらが緊張してしまった。  
「B—1だから、その後ろで見ててよ」

分かりました、と返答すると、里中さんは慣れた様子でバトル場へ向かっていった。

「行こうか」

「うん。私も楽しみになつてきた」

楽しそうな表情。連れて来てよかつた。

この前少しだけはにかんだ表情を見せてくれてから、時折僕の前で表情を崩す。期待してしまふ。

これはもしかして綾子とのバトル場デートではないか？ 一般的には、彼女に良い所を見せようと舞い上がるつたりするんだろうなあとと思う。

「どうしたの貫太。早く一緒に見に行こうよ」

「……そうだね、行こう」

隣で並んでバトルを見るのも、きっと良いものだ。

## 【三十三】

里中さんのレートがいくつで、この階がどのレベルにあるのか僕にはまったく分から  
ない。

B—1の部屋の後ろで見守る中、相手が出したポケモンの大きさに驚き、恐ろしくレ  
ベルが高そうに見えて、あんなのと戦つたら危ない、とすぐに胸に抱いたケーシイを引  
き合いに出してしまう。当の本人はバトルには興味ないのか、既に眠っている。

「あれ、なんて言うんだつけ」

「オーダイル。何で貫太がはらはらしてるのよ」

「だつて、あんな怪獣と戦うなんて」

対して里中さんが繰り出したのは、青を基調とした身体に、胸部が紅色に膨らんでい  
るポケモン。

「ドクロツグ」

先回りされた。最早こっちに顔も向けない。

バトル開始のアナウンスが流れ、両者が何やら叫び出した。

オーダイルは走り、爪を立てた拳を振り上げる。それをドクロツグというあのまつた

く階級の違うポケモンに振り下ろすのだろう。両者の距離が縮まり、腕が振り下ろされようとしたその瞬間に思わず目を閉じ背けてしまう。

「わ、速い。避けた」

隣で綾子が声を上げたのが聞こえ、目を開け視線を戻してみれば、ドクロツグは既にオーダイルの脇へ身を躱し、力強く握られた拳についた、紫色の棘を突き刺した。ボディブローカミみたいだ。

苦悶の表情を浮かべたオーダイルだったが、その強固な顎を食いしばり、追撃を嫌つて腕を後方へ薙ぎ払う。

当たるかと思ったが、ドクロツグもまた一足飛びにそれを躱す。

「ハイドロポンプ！」

相手のトレーナーが叫んだ。飛んで躱したドクロツグは、まだ体勢が整っていない。

避けるのは諦め、腕を十字に構えて、耐えるつもりだ。

「ドクロツグに水技じや、だめかも」

綾子が呟いた。あの水の勢いに当てられたら、大概のポケモンはダメージを免れない気がするが。

「どうして？」

「ドグロッタの特性がかんそとはだなら、水技を吸収して自分の体力に変換出来るの」

へえ、と素直に関心する。本当に綾子は詳しい。ポケモンの特性まで語つて、バトルトレーナーみたいだ。

「かんそなはだじやなかつたら？」

「ダメージは大きい」

バトル場では、厳しい表情でドクロツグがオーダイルの放つ水流に耐えている。あの様子だと違うらしいが、いくら特性がかんそなはだでも、少しでも力を抜けば激流に飲み込まれ、そのまま壁に叩きつけられそうだ。

押し切れないまでも、ダメージを確認出来た事で良しとしたのか、オーダイルは水流を止め、再び突進する。

ぐらついたドクロツグに向かって、今度は顎を大きく開き、袈裟切りの如く鋭い歯を斜めに落とす。

今度は目を逸らさなかつた。

「どくづき！」

里中さんの声。どういう指示かは分からぬ。激しい水流によるダメージで怯んだところへ、鋭い顎の一撃が襲い掛かっているのに、里中さんの指示は恐らく攻撃の一手。決まつたかと見える刹那、僕には、ドクロツグがニヤリと不敵な笑みを浮かべたのが見えた気がした。

ダメージはどこへやら。上体を逸らして顎の一撃を躲し、身体を回転。勢いそのまま、今度は肘をオーダイルの横つ腹に差し込んだ。一瞬で苦悶の表情に変わり、脇腹を抑えて片膝をついた。同じ個所への連続ボディ。いや、レバー？ オーダイルの肝臓がどこにあるのかは知らないが、あんなもの二発も食らつたら、悶絶どころの騒ぎじやない。

追撃の手は止まなかつた。

「どくどく！ 突き！」

里中さんの指示とほぼ同時にドクロッグはその胸のふくらみを大きくし、勢いをつけ、どくを吐いた。

里中さんがどく、と言つたからどくなんだろう。浴びてはいけない、害のありそうな濃紫の液体だつた。身体いっぱいにどくを浴びたオーダイルだつたが、同じ個所への強烈な一撃が効いていて、まだ体勢を立て直せない。

ボクシングじゃないのでカウントはない。ドクロッグに容赦はなかつた。どくのかかつた身体。さつき二発目を食らわせた部分に、今度は溜を入れた一撃。力の籠つた拳を、棘を、どくを、あらん限り奥へ届かせるように、食い込ませる一撃だつた。波打つ衝撃と、一点集中の鋭い棘がオーダイルを苦悶の表情に変える。

ドクロッグはここまで有利でも油断はしない。渾身の一撃を入れるとすぐに距離を

取り、オーダイルの様子を伺つて構えを解かない。

誰がどう見ても、勝者はドクロツグだつた。例えオーダイルが立つたとしても、どくが回るのを待ち、ヒットアンドアウエイを繰り返せば終いだ。

「すごい」

素直な言葉が口から漏れる。小さい生き物が巨大な怪獣を鮮やかに殴り倒したその光景に、興奮を感じずにはいられなかつた。

ハイドロポンプのダメージはなかつたのか？ 特性とやらは？ 感想に困るかも、と思つていたが、聞きたい事は山ほどあつた。

「里中さん、強いね。あのドクロツグも」

綾子も驚いている。表情は崩さないが、華麗なバトルに昂つてゐる様子で、ガラスに手を押し付けた。

相手トレーナーが降参し、オーダイルの元へ駆け寄る。ドクロツグは勝ち名乗りをあげるように、右腕を突き上げた。

里中さんは特に喜ぶ様子も見せず、何かを考え込むように俯き、両手を腰に当てた。顔見知りもいるのか、素直にバトルを褒めたのか、観覧席ではちらほら拍手が鳴つた。初めてこんな真面目にポケモンバトルを見て、単純に興奮した。流行る訳だ。

## 【三十四】

里中さんはドクロツグを連れてバトル場から出て来ると、興奮気味に胸を叩き、もうちょっと続けたかつたなあ、と呟いた。もつと差し込めたよなあ、最初にどくを打つても良かつたかなあ、と続けてぶつぶつ言いながら歩き続ける姿に、僕と綾子は顔を見合させた。

あれ以上続けたらオーダイルを殺してしまいそうな勢いだつたと思うが、そうじやないのだろうか。

随分興奮気味でバトルに没入し、周囲が見えていない様子だ。勝つたり負けたりするのは日常茶飯事だと思っていたが、そんな人でも一回のバトルでこんなに感情を揺さぶられるんだと思うと、ポケモンバトルというのはそんなに興奮するものなのかと、興味どころか少しばかり恐ろしささえ覚える。

綾子と二人里中さんを追いかけ、再びフードコートの一席に座つた彼の前に僕等も腰を落ち着けた。

瞬きも碌にせず、爪を噛みながらぶつぶつ呟く姿はなかなか衝撃的な光景だったが、僕ら二人が目の前に座つた事で、どうやら我に返つたらしい。

「あ、いやあ、興奮しちゃって。ごめんごめん」  
 やつちまつたとばかりに頭を搔いて、里中さんはにへらと笑った。隣に仁王立ちしているドクロッグは、主人が表情を崩した事に安心したのか力を抜いてその場に座り込んだ。

「ドクロッグ、よくやつた。練習通りだな」

頭を撫でられ、仏頂面のドクロッグは満更でもなさそうな顔だ。

「お疲れ様です。凄かったです、本当に」

「私もびっくりしました。里中さん、凄く強いんですね」

綾子も珍しく素直に思つた事を口にしている様だつた。本当に凄いと思つたのだろう。

「こいつを褒めてやつてよ。あのどくづき、凄いだろ？」

胡坐をかき、腕を組んだドクロッグは得意気だ。バトルを通して里中さんと良い関係を作つてゐる。僕も何かケーシイと一緒に始めれば、もつと仲良くなれるのかも知れない。

「あの、里中さん  
 ん？ 何だい？」

綾子が興味深々に質問を投げかける。

「ドクロツグに、ハイドロポンプは効いていなかつたんですね？」

「お、良く分かつたね。相手のオーダイルが、ハイドロポンプで特性を判断しようとしながら分かつたから、ドクロツグには演技をさせていたんだ」

「なるほど。効いたと思わせ攻撃を誘い込んでいたという事なんですね」「特性かんそうはだとは言え威力を見誤ると、まともに食らつたドクロツグが反撃出来なくなつちゃうから、見極めが難しいんだ」

言つて いる 内容はだい たい 理解 出来 た。

あのバトルの一瞬一瞬で、色々な事を考へて いる んだなあと感心した。自分のポケモンだけでなく、相手のポケモンの知識や状態、強さ等を瞬時に見分けて指示を出さなければならぬ、という事だ。なんて高度なスポーツだろ う。

まだ理解の浅い小さな子がやるサツカーレ、ある程度理解した子がやるサツカーレを思 い 浮かべた。前者はボールに向かつてただ全員で集まつていいくだけだが、後者は味方や相手の動きを考へ、先を読み、連携を取つてボールを前に進めていく。その様は、まさにポケモンバトルの様に思えた。

今から僕がやるには大変だ。知識が無さすぎる。

サツカーレ だつて ほとんどうつた事ないが、サツカーレより始めるハードルが高い気がし た。

「久々にバトルが見られて楽しかつたです。ドクロツグも生き生きとしていて、格好良かつたです」

「ありがとう。楽しんでくれたみたいで良かつたよ。俺も気合い入っちゃつた」  
 綾子もやたらとポケモンに詳しい。店での対応で分かつてはいたが、今こうやって見たり話している様子を見ても、ポケモンが好きなのだ。やっぱりそれは間違いない。どうして新しいポケモンを持たないのだろう。世話をするのも慣れているし、もしもう一匹家にポケモンがいたら、ケーシーの友達も増える。

良い話だと思うが、新しいポケモンを持たない事情があるのだろう。まさか僕のような理由ではないと思うが、例えば、大切にしていたポケモンを何かで亡くしてしまったとか。

そういう理由だつたら、もう一度とポケモンは持たないというのも分かる気がする。

「次もまたドクロツグで戦うんですか？」

「そうだね。今日はそうしようかな。でも、俺らは一旦休むよ。同じポケモンでの連続バトルはポケモンの体調を考慮して原則厳禁なんだ」

特にダメージを負つていたとは思えなかつたが、目で見るよりもドクロツグのダメージは大きいのかもしれない。かんそくはだとは言えあの水圧だ。ダメージ無しと言う訳にはいかないのだろうか。

一対一のバトルみたいだし、他のポケモンすぐに参加すればいいんじゃないかと思う。

「ゴーストで参加はしないんですか？」

「それでもいいんだけど、今はお休み。この前、結構激しくバトルをさせたばかりだし

ね」

なるほど。それならドクロツグと休みつつ参加するしかないだろう。

「二人はどうする？　一回このバトル場を見て回つてくるのも面白いと思うけど。どのフロアもほとんど同じ作りだから、歩きやすいと思うし」

「そうですね。色々見て回つて来ようかなと思います。綾子はどうする？」

「私も行く。探したいものもあるし」

探したいもの？

ただの気分転換に連れ出したつもりだったが、目的があるとは知らなかつた。

「それじゃあ、ちょっと行つてきますね」

「こつちは気にしなくていいから、ゆっくり見ておいで。何か困つたら連絡頂戴」

「ありがとうございます」

一体何を探すんだろう？

立ち上がりつて歩き出した綾子の背中を、僕は追いかけた。

## 【三十五】

里中さんの言つた通り、一個下のフロアに下りても構造は変わらなかつた。バトル場を中心に、通路や店が取り囲んでいる。

大小色々なポケモンを連れ歩いているトレーナーがおり、僕は少し怖かつた。

爽やかで話しやすい、理性的に見えていた里中さんだつて、バトルの後はあんなに興奮していた。ポケモン達だつて同じだろう。こんな風に、トレーナーがポケモンを出しつぱなしで歩いていたら、すぐに何か問題が起きそうなものだ。

「綾子、何探してんの？」

キヨロキヨロしながら歩き続ける綾子の探しものは、僕には見当つかなかつた。

「何つて、エスパー・ポケモンを探しているに決まつてるでしょ」

言われてハつとした。そうか、ケーシイのために、テレビポートを使えそうなポケモンを探してくれているのだ。

「カツラさんも言つていたでしょ。色々試していたら、いつの間にか出来るようになつたつて」

だつたら少しでも出来る事をやろうという事か。綾子がこんなにケーシイを想つて

くれていて、僕は自分の事のように嬉しかつた。

むしろこんなこと、本当は僕から提案出来なくちゃだめだ。

「だからキヨロキヨロ見回していたのか」

「そう。貫太もちゃんと探して。出来たらケーシイかユングラーカ、フーデインが良いと思う。同じ種族だと、何か通ずるものがあるかもしないし」

よしきた、と首を振り、身体を回し、バトル場を歩き続けていると、不規則な揺れが気になつたのかケーシイが目を覚ました。

ふわあ、と欠伸をする顔が愛くるしい。「おはよう」と声をかけると、小さく鳴いて返事をし、よじ登つて肩車の体勢。

どうやら少しづつこの場所にも慣れてきたようだ。特に危害を加えられる事もないと判断出来的のだろう。タマムシデパートの屋上とは、また違つた種類のポケモンを見る事が出来るので、色々なポケモンを目にし、少しでもケーシイの刺激になれば良い。

「綾子。ちょっと考えたんだけど」

「なに?」

「もし色々やつて駄目だつたら、もう一匹ポケモンがいてもいいなあつて思うんだけど、

どうかな」

綾子は、バトル場の通路で足を止める。

「どういう事?」

僕も足を止め、二人で壁に寄り掛かった。視線の先では、ポケモンバトルが行われている。

「ケーシイに、もつと心を許せる友達を作つてあげたいんだ。デパートの屋上で、ガーディと仲良くなつたつて話したでしょ? あんな風に遊べる相手が、他にもいたらいいなつて。もちろん、ケーシイとその新しいポケモン次第なんだけど」「またゲームコーナー?」

「いや、今度はちゃんと捕まえに行こうと思つてて」

綾子はちらとケーシイを見やつた。

「バトル出来るの?」

「今のケーシイには、難しいと思う。僕もそういう気はないし。でも、綾子が一緒なら出来るかもしれないかなつて。ポケモンをレンタルしてさ、一緒にやつてくれると嬉しいんだけど」

そこまで連れ出せれば、綾子もポケモンとの距離をもつと縮められる。どうせ一緒に住んでいるんだから、一緒に育てる事になるのだ。

最近、僕がバイトで綾子が休みの時は、ケーシイをおいて行く時だつてある。ケーシイも凄く懷いているし、関係は良好だ。何があるのかは知らないが、ポケモンが好き

なら好きと言つて良いはずなんだ。

僕だつて、まだケーシイを正面から可愛がることに正直違和感がある。それでも、理由はどうあれ引き取つてきた責任と、向き合つて育てていく責任はあるはずだ。

燃やした事実とは、別の問題。

「育てられるの？ ケーシイだけでも一杯一杯に見えるけど」

「頑張るよ。それに、綾子もいるしね」

「甘えないで」

「言うと思つた。」

「じゃあ、だめ？」

「育てるのは貫太だからね」

「わかつた」

それでもいい。一緒に捕まえて、一緒に住んでいれば、それはもう綾子のポケモンである。

また今度、出掛ける予定を立てるとして。ポケモンを捕まえに、サファリゾーンまで一緒に行くつていうのもありだ。ケーシイと初めての遠出。綾子も一緒なら、それは楽しみだ。

色々想像しつつ、視界の先でやつてているバトルを眺めた。毎日もの凄い人数がここに

やつてきて、ポケモンを戦わせている。僕には接点のない世界だから、遊園地に来た時の気分とあまり変わらない。バトルというアトラクションを楽しむ感覺だつた。

こんなに色んなポケモンが見られると、色々知りたくなつて来る。勉強をするには遅すぎる気がするが、ケーシイと一緒にいる以上たくさんの中識があつても困らないだろう。

学生時代もつとちゃんと勉強しておけばよかつたなあ、なんて。

「虫が良いつて言われちゃうかな」

「え？」

つい口をついてしまつた。綾子の疑問に、僕はなんでもない、とだけ返した。  
最近、夢に出る。

この前、キヤタピーの焼死体を見た後からだ。

黒こげの死体が、僕に話しかけてくるのだ。どんな顔してケーシイと付き合つてるんだ？ 何で私は燃やしておいて、ケーシイは可愛がるんだ？

僕にまともな回答なんてなく、ただ黙つて俯いていた。朝起きると汗をかいていて、妙に寝覚めの悪い日々が続いている。

どうすれば許してもらえるんだろう。どこに答えがあるんだろう。ヒントもなく、黒く靄のかかった答えが僕の目の前には浮かんでいた。

「あ、まずい」

隣で綾子がぽつりと呟く。

目の前では、バトルが佳境に入っている。ガーディと対面するサイホーンが、弱つたガーディに迫っていた。

あれ？

「あの人……」

ぼんやり見ていただけで気づかなかつたが、背中を向けてバトル上に立つている姿になんとなく見覚えがあつた。

プリーツスカートに茶髪のボブカット。それにあのガーディとくると、沙穂さん、かもしれない。

こんなところでバトルとかするんだなあ。あのガーディ、元気余りすぎて暴れさせないと大変だらうしな、と考えていると、頭の上のケーシイが暴れ出した。

突然離れようとするので、落ちるかと思い身体を掴んで抱き寄せた。

「どうしたケーシイ。危ないじゃないか」

キイ！ と聞いた事のない珍しい声を上げたかと思えば、渾身の力で暴れ、僕の元から逃れようとする。

離しても良いものか悩んでいるうちに、感じことのない力で、手から離れて行つて

しまつた。無理矢理抑え付けるなんて無理だつた。

どこへ行くのかと思えば、ケーシイはそのまま前にすつ飛んで行き、おそらくポケモンの攻撃にも耐えうるであるろう強化ガラスに頭から突つ込んだ。

「ケーシイ！」

慌てて追いかけ捕まえようとすると、僕の事なんて最早見えていない。バトル場に入れないと分かれば、痛みも気にせずふわりと浮かび上がり、キヨロキヨロ辺りを見回した。

テレビポートが出来ればきっと瞬時に中へ入れるのだが、咄嗟の状態でも使う様子はない。

手の届かない所まで浮かび上がってしまい、もう見守る事しか出来ない。ケーシイ  
こつち！ こつちだよ！ と手を伸ばしても、ただキヨロキヨロするだけ。

扉を見つけたのだろう。ケーシイはすぐに飛んでいき、器用に取つ手を下してドアを押し開いた。

思わず僕もついて行く。何かあつては大変だ。

バトル場の中は、外から見るよりも広い気がした。

入つてすぐ目に入つたのは、サイホーンがガーディを角で突き上げ、放り投げた瞬間だつた。ポカンと口を開け、放物線を描いて飛んでいくガーディを目が追つた。

ドサリと地面に叩きつけられ、動かなくなるまで、視線を外せなかつた。

「ガーデイ！」

ボツクスにいる女性が叫んだ。やはり沙穂さんだつた。バトル終了。どう見てもそ  
うだ。

だが、サイホーンは前足でバトル上の地面を削り、もう一度突進の構え。それ以上  
やつたらまずい！ 僕でさえ、そう思つた。

「早く！ モンスターボールに！」

思わず叫んでしまう。ハツとした沙穂さんは、慌ててボールを掴んだ。今戻せば間に  
合う。ガーデイの方に視線を移すと、倒れた友達の前に、庇うように両手を広げたケー  
シイの姿が。

いつの間に！

「ば、ばつかやろう！」

叫ぶと同時に身体が動いた。

あんな鍛えてもいらない小さい身体でサイホーンに突進されたら、それこそ死んでしま  
う。目の前に再び敵が現れた事に興奮したのか、サイホーンが雄叫びを上げた。  
無我夢中で駆ける。地面を蹴つた姿が映つた。追いつき間に入つて、ガーデイを庇う  
ケーシイを抱きしめ、僕は蹲る。

目を閉じ、ぐつと歯を食いしばった。それだけで耐えられるわけない。無事じや済まない。

でも、ケーシイやガーディを守れるならそれで良い。誰かのために、瞬間的に身体が動く人間だとは思わなかつた。僕は少しだけまともな人間になれたのかも知れない。それなら、それで、もう……。

しばらく待つても何も起こらない。

助かつたのだろうか。おそるおそる身体を起こせば、バトル場にはケーシイと僕しかいなかつた。

沙穂さんも、相手のトレーナーも間に合つたのだ。互いに自分のポケモンをボールへ戻し、飛び出したケーシイと、それを庇おうとした僕だけが残されている。

「あ、あれ、貫太君？」

沙穂さんが僕に気付く。

「すいません！ 大丈夫ですか！」

きちんと僕達を心配してくれる、相手のお兄さんトレーナー。

「貫太！」

入口のドアで、綾子が声を上げていた。

観客からの視線も集めてしまつてゐる。

ケーシイは、無事胸の中。良かつた。  
お邪魔してすいません。身を小さくして、僕はその場をそそくさと後にした。

# 【三十六】

沙穂さんは、ガーディを簡易ポケモンセンターへ預けに行つた。

上の階と同じ作りなので、僕等は彼女を待ちつつ再びフードコートに腰を落ち着けていた。

びびりの癖して無理したのだろう。ケーシイは今更怖くなつたのか、注目を浴びてしまつた事に驚いてしまつたのか、僕に抱き着いて離れない。

友達を守ろうと身を乗り出していつた勇気と気持ちは褒めてやりたいが、無理はやめて欲しかつた。

「ケーシイがあんな事するなんてね」

「本当、驚いた」

綾子も、ケーシイの行動には驚いている。

あんなに速く、衝動的に動けるなんて知らなかつた。

僕の手から無理矢理離れた時、小さくてもやつぱりポケモンなんだと思つた。このバトル場を少し見ているだけでも、ポケモンという生き物がいかに人間よりも優れた能力を持っているか分かる。力もそうだが、使う力は最早超常だ。

「ガーディと、本当に仲が良いんだね」

綾子が頬杖をついて、愛しそうにケーシイを眺める。

「そうなんだ。あのガーディと燥いでいる時は、僕等と一緒に居る時とはまた違った顔をするんだよ」

「私も見てみたくなってきたな」

「今度一緒に行こうか」

「そうする」

驚いたのは、綾子と沙穂さんが知り合いだつたという事だ。

僕がバトル場からそそくさと去ろうとした時、沙穂さんは僕等を心配して駆け寄つて来たが、一緒にいる綾子に気づき驚いていた。

あれ、綾子？ と沙穂さんの驚いた顔は、彼女がここにいる違和感からだ。バトル場に来る事自体、やつぱり珍しいのだろう。

「でもまさか、沙穂さんのバトルだとは思わなかつた」

「私も驚いた。ぼんやりと見ていいだけだつたから、沙穂だと思わなくて」

綾子が沙穂さんと親し気に話している様子もまた新鮮だつた。僕と一緒にいる時とはまた違う、友達と一緒にいる時の顔をしていた。

ケーシイがガーディと一緒にいる時に見せる顔だ。

「お待たせしました」

綾子の後ろから、ガーデイを預けに行つていた沙穂さんが戻つて來た。僕と綾子が向かい合い、綾子の横に沙穂さんは腰掛ける。

「ガーデイは、大丈夫ですか？」

「ええ。別段問題はないそうです。こここの回復装置だけで十分間に合う程度だと」

「良かった。ケーシイも、喜びますよ」

ふふ、と沙穂さんは笑つて、綾子と同じようにケーシイを眺める。

「格好良かつたですよ、本当に」

「いやあ、飛び出しても何も出来ないのに、無理はして欲しくないですね」

「あ、先に褒めてあげなきや駄目ですよ？　この前教えたでしょ？」

沙穂さんは人差し指を立てる。

「そうでした」

後でたくさん褒めてあげよう。

「それにしても、二人が友達だとはびっくりしました」

「私も、綾子がこんなところにいるなんて思わなくて、びっくりしましたよ」

「別にいいでしょ來たつて」

綾子はなんだか照れ臭そうにしている。気持ちちは分かる気がした。

「沙穂さんはよくこちらへ？」

「ほんとバトルなんてしないんですけど、元気が有り余っちゃって大変で、齧つてみようかなと思いまして」

初心者トレーナーのお話は是非聞きたい。もしかしたら、今後僕とケーシイだつてやる事があるかも知れない。

「やろうとして、すぐ出来るものですか？」

「うーん。上手くは出来ないですけど、一応スクールでの知識とバトルの授業で経験はありますし、なんとかなるもんですね」

もちろんバトルの授業やポケモンに関する成績はは、軒並み壊滅していた。  
授業なんて寝ていたし、碌に聞いていない。

「やっぱりある程度経験や知識がないとしんどいですよね」

「どつかかりがないんで、難しいでしようね。でも、別に最初は相手がいなくたつて、技の練習だけしていても良いですし、初心者用のレッスンスクールとかもありますから、そういうの利用すると良いですよ」

小さい子ばかりのレッスンスクールを想像した。そこに入つて行くのは、中々難しそうだ。

「大人つて……います？」

「いりますいります！ 大人になつてから始める方も多いので、全然気にしなくて大丈夫ですよ」

僕等の会話を聞いていた綾子が、「やる気なの？」と呟き怪訝そうな顔を浮かべる。僕がどれだけポケモンと触れ合った事がなくて、どれだけ知識がないかよく知っているし、テレポートすら出来ないケーシイでどうしようと言うんだと言われたら、その通りだ。

「ケーシイが元通りになつて、運動に良いっていうならありかなとも思うけど」

「無駄に傷つけるだけになるのは、許さないからね」

「分かつてるよ。そもそも、ケーシイがやりたがるかどうかわからないし」

綾子も大概過保護だ。ケーシイを大切にしてくれるのは、とっても嬉しいが。「ケーシイちゃん、どこか悪いんですか？」

「あ、いや、体調が悪いという訳ではないんですけど」

ちらと綾子に目線を配ると、こくんと頷いた。

言つても特に問題はないだろう。

「テレポートが使えないみたいなんです」

「……なるほど、それは珍しいですね」

沙穂さんはうーんと唸つて考え込んだ。言つても返答には困る話だらうなと思う。

「色々試していけば、いつか使えるようになるかもしねないって話です。まずケーシイが落ち着いて、平穩に暮らせるところから始めているところです」

悩み顔の沙穂さんだったが、ぱあ、と顔を明るくして手を叩いた。綾子と違つて、アクションの多い人だ。表情豊かだし、感情をストレートにぶつけて来る。正反対だ。

「だったら、私とガーディがもつとケーシイちゃんと仲良くして、楽しく落ち着いた生活のお手伝いをしますね」

「是非是非お願ひします」

僕と一緒にいる時と違う顔を見せて いるという事は、沙穂さんとい う時はもつとオーブンなのだろうか。嬉々として自分の話をする綾子は想像出来ないが、 そうなのかもしれない。

「仲良くと言えば、二人の付き合いは長いんですか？」

綾子の交友関係なんて初めて知ったので、僕は興味津々だった。

沙穂さんに視線を配られた綾子は、今度は首を横に振つた。なんですよ。

「それなりですよ。細かい事は、ヒミツです」

人差し指を口の前に立てて、沙穂さんは言つた。まあ可愛らしい。でも、教えてはく  
れないようだ。

「余計な事は聞かなくていいの。ただの友達」

仲の良い友達でしょ、と沙穂さんが訂正して、そうだね、と綾子が返す。

うーん、入り込める隙はない。何を聞いても答えてくれなさそうなので、僕は諦める事にした。

「それより、里中さんをずっと一人にしておくのもまずいんじゃない？」

確かに、連れて来てもらつておいて、一人にしておくのも失礼か。きっと里中さんなりに僕等へ気を遣つてくれたのだと思うけど、もう一試合くらい彼のバトルを見たい。

「戻ろうか」

「それがいいと思う。沙穂、今日はまだ連れがいるの。ずっと待たせているのも悪いし、私達戻るね」

「分かった。意外などころでお話し出来て嬉しかったよ。貫太さんもデパートで会つたら、またお願ひしますね」

「こちらこそ、お願ひします」

里中さんはまだバトルをしているだろうか。今どこにいますかと連絡を入れて、僕と綾子は上階を戻ろうと立ち上がつた。

あのドクロッグがまた活躍するところが見られるのは、楽しみだ。

「あら、何か用?」

僕ではなく、背後に向かつて沙穂さんが言う。

誰かいるのかと後ろを向けば、まだ年端もいかない少年が立っていた。なんだか随分着ている服がボロボロな気がするが、大丈夫だろうか。迷子センターとか、あるのかな。どうしたの？　お父さんとお母さんは？

そう声を掛けようとしたが、少年は僕の顔をきつと睨み、指を刺す。

「そいつ？」

指を刺されているのは、胸に抱いたケーシイらしい。

「ケーシイが、どうかしたの？」

少年はもう一度強くケーシイを指さして、僕を睨みつけたまま言つた。

「僕のケーシイ、返してよ」

## 【三十七】

僕は何も返答出来なかつた。

少年の言葉を前に、固まるしかなかつた。返して？ ケーシイは僕の友達だ。短い間でも一緒にいて、良い関係を築けていると思つてゐる。きっとケーシイだつてそう思つてくれてゐるに違ひない。

でも、元の持ち主が現れた。僕はただゲームコーナーで引き取つたに過ぎない。もしこの少年が自分の意思ではなくケーシイを失つたのだとしたら、返してやるべきなのだろうか。

自分のポケモンを失う、という事実が思つたよりもずっとずっと大きい事に僕は動搖していた。ケーシイ次第だとは思うが、僕だつて今はトレーナーの端くれ。もし少年に返すんだとしても、ちゃんとケーシイが幸せな暮らしが出来ると確認出来なければ渡したくない。

固まつた空氣を突き破るように、僕と少年の間に入つてくれたのは綾子だつた。優しく話しかけ事情を聞いてくれたのだが、少年はただ僕のケーシイなんだ、返してよと突つ張るばかり。

綾子のおかげで、口をぱくぱくさせる事しか出来なかつた僕も、「事情が聞けないと渡すわけにはいかないんだ」と伝える事が出来た。いきなり返して、と言われてはいそですかとはいかない。

恨みが籠つたような目でただただ返してと突つ張り続ける少年に、綾子はじやあ確かめよう、と言い出した。返して、と言われてただ返さないと言い合つてゐるだけでは埒が明かないでの、少しでも進展させようというのだ。

僕も、それは確かめなければならぬ時が来るんじやないかと思つていた。このモンスター・ボールは、僕の所有物ではない。それは間違いない。

ケーシイのルーツは知りたいと思つていたし、どういう事情でのゲームコーナーにいたのか調べる事は、テレビポートを使えるようにする手掛かりにもなると思つていた。モンスター・ボールを調べこの子のものだと判断出来れば、ケーシイのおやはこの子だという事になる。それがきちんと判明してから、話をしていこう。綾子が僕の代わりに説明すると、少年は「わかった」と言い、折れた。

僕達はその約束だけ取り付けて、連絡先を渡した。少年は携帯も何も持つていなかつたので、これから予定があるから明日の昼間に僕の携帯へ電話をくれ、というところで場を収めた綾子には、感謝するしかない。

沙穂さんにはごめんねとだけ伝え別れ、逃げるようになつて少年から離れ、上階の里中さん

のところへ戻った僕は、もうバトルを楽しめる状態ではなかつた。何かに気付いた里さんは、「随分暗い顔してるけど、喧嘩でもしたの?」と耳打ち。喧嘩するだけの方がどれだけ良かつたか。

半ば放心状態のまま、バトルを何度か見た後、明らかに様子の違う僕を見て、里中さんは「今日はこの辺にしようか」と切り上げ、気を付けて帰つてねと去つて行つた。連れてきてもらつておいて、申し訳ない。いずれこの埋め合わせはしなければ。

綾子にもすいませんと謝らせてしまつた。動揺しているとはいゝ、二人には申し訳ないことをした。

とりあえず明日には伸ばせたが、状況は何も変わつていない。僕の中できちんと整理をつけなければいけない。

抱いているケーシイは、少年が目の前にいる時もずっと僕のところから離れなかつた。一緒にいたいと思う方にいてくれるのが多分一番良いのだが、ケーシイだけに判断を押し付けるのは、無責任である気もした。

僕自身もきちんと考えなくてはならない。自分の気持ちも、ケーシイの気持ちも、大切な物に間違いない。

その日の夜はバイトだつた。無心で勤務時間を使つた。疲れで鈍つて来る思考が、今は逆に心地よい。考えなくてはいけないのだが、考えたくない自分もいる。ケーシイ

と離れる可能性を、少しでも考えたくないのだ。

僕はケーシイが大好きだった。

あの小さな身体。無表情に見えて、時折見せる崩した表情。外に行くんだとなると、肩に両足をかけ、僕の頭に手が乗る感触。初めて他のポケモンと仲良くなっている時に見た、燥ぐ姿。

どれもこれも大切で、もうそんな姿が見られなくなつて、どこかへ行つてしまふ。それが耐えきれない。

あの少年から電話が来ても、無視してしまおうか。

綾子は、もうケーシイは貫太のポケモンなんだから、それを突き通しても良いんじやないかと言つた。あの子ちょっと怪しいよ、と言うのも分かる。

僕が自分でケーシイを捕まえていれば、当然無視だ。

だが、そうじやないのだ。僕はただゲームコーナーから引き取つただけ。どうしてもその事実が、無視を躊躇わせた。失う気持ちが少し分かつてしまつたからこそ、あの少年が辛い気持ちを抱えていたらと考へてしまう。

いくら考へても、思考は堂々巡つている。

バイトが終わり、綾子と二人アパートへ帰り、並んでベッドに横たわりながらこれまでの日々と今日一日を何度も思い返す。

ケーシイは随分甘えたで、今日は寝床ではなく僕の胸の上でぺとんと俯せになつてい  
る。その小さく柔らかな身体を撫でながら、眠れない夜を僕は過ごした。  
「罰、なのかなあ」

独り言ちて、僕は真っ暗な部屋で目を閉じる。  
あと何回思い返せば、今日は眠れるだろう。

## 【三十八】

正午。電話は鳴った。公衆電話だつた。一コールで心臓が跳ねて、二コールで逡巡。三コールで携帯を手に取り、四コールで唾を飲み込み、五コールで電話を取つた。

相手は当然、昨日の少年。

要件は同じ。綾子から、ポケモンセンターへ行けばモンスター・ボールの持ち主照会もやつてくれると言っていたので、時間と場所だけ伝えて電話を切つた。

すぐに動けるとの事だったので、一時間後の十三時に集合の約束を取り付けた。

僕の落ち着かない様子を敏感に感じ取つたケーシイは、朝からずつと僕から離れようとしなかつた。ボールに入るのも嫌がつたので、ケーシイを抱いたままポケモンセンターへ向かう。

綾子は私も行こうか？　と言つたが、僕自身で解決しなくてはいけない気がして、家で待つていてもらう事にした。

ケーシイは、あの少年の事をどう思つているのだろうか。ケーシイ自身がどうしてもあの子の元に戻りたいというような事があれば、それも致し方ないのだろうか。昨日の夜ひたすら考え続けていたが、僕の中ではまだ何も踏ん切りがついていない。

バトル場ではいまいちケーシイの反応を見られなかつたので、ケーシイ自身の気持ちや反応もよく分かつていなかつた。

僕はあの少年の言う事を馬鹿正直に受け止めてしまつたが、綾子の言う通り怪しさがあるのは事実だ。まともに対応するのはおかしいのかかもしれないが、はつきりさせておきたい部分もある。

やつぱり話はそれからだ。

自分を鼓舞し、まずは調べるところから、と言い聞かせながら街を歩く。ポケモンセンター近くまで着けば、目線の先にあの少年が見えた。

昨日と同じ、よれた服。ボサボサの頭で、こちらを睨む。近づけば、目の下にはくつきりとした隈。頬には紺創膏を張つてある。どうしたのだろう。昨日よりもまた少しボロボロに見える。

「お待たせ」

「そういうのいいから、早く調べて」

世間話も何も、取りつく島もない。話す気はないらしい。ケーシイに一瞥もくれず、僕だけを睨んでいる。

「わかつた。行こう」

少年はポケモンセンターへ入り、すぐに受付へ向かつた。僕も後を追う。後ろから見

ても、歳相応とは言えない、随分やつれた背中に思えた。

「すいません。このモンスター・ボールがこの子のものだという証明書が欲しいのですが」

ジョーイさんへモンスター・ボールを渡すと、トレーナーカードの提示を求められた。隣に立つ少年に視線をやると、ポケットからカードを取り出し、ジョーイさんに提示した。

少々お待ち下さい、と番号札を渡され、ジョーイさんは奥へ。しばらく時間がかかるらしい。今日は休日。外に出るトレーナーも多く、ポケモンセンターは忙しいのだろう。

受付ロビーに設置されたベンチに、僕等は少し間隔を開けて座った。

少年は、まだケーシイに一瞥もくれない。失った自分のポケモンを目の前に、何の感慨もないのだろうか。

「あのさ」

少年は答えない。僕はまだ名前も知らなかつた。

「君、名前は?」

「なんでも良いだろそんなの」

失礼な少年だ。

「じゃあ、どうしてケーシイが元々君のところにいたケーシイだと分かったの？ 中々判別出来ないと思うんだけど」

「見ればわかる」

「そういうもんか」

それ切り僕等は沈黙した。何か話しておかなければいけない事はないかと、頭を回す。

「……言っておくけど、君のポケモンだと判明しても、事情を聞けないとケーシイは渡せないからね」

その言葉に、少年はまた恨みの籠った横目で僕を睨みつけた。

「いくら睨んでも駄目だよ。僕は、曲がりなりにもケーシイと一緒に楽しく過ごして来た。安心して過ごせると判断出来ないと」

名前も名乗らない少年の言葉を待つた。ただのトレーナーには見えないのだ。事情があるなら話して欲しい。

「……なんでだよ」

水道からぽつりと落ちる水のように、か細い呟きだった。

「どうして、お前は幸せそうなんだ」

僕が言われたかと思ったが、少年はケーシイに向かつて言葉を吐いた様だった。ケー

シイは、語氣を強めた少年に一切顔も向けず、僕の胸の中でただ震えている。

「どういう事？」

「そいつが居なくなつたから、僕は優しくされないんだ」  
何を言つているのか分からぬ。

「ケーシイは、自分から君の元を去つたのかい？」

こくんと少年は首肯する。

「何故？」

「嫌だからだ。うちにいるのが」

言葉は決壊し、溢れ始めたら止まらない。

「うちにいるのが嫌で、ケーシイは逃げ出したんだ。代わりに痛い思いをしたのは僕だ。  
そいつが逃げたせいで。そいつさえ逃げなければ、僕は、ずっとそのまで！ 優しく  
されていたのに！」

ハツとした。ケーシイを引き取つて、テレポートが使えないという疑惑が出た時、図  
書館で色々調べた事を思い出した。その中には、トレーナーからの過度なポケモンへの  
ストレス、虐待の事例もあつた。

少年のみすぼらしさの理由が分かつてきたり。見ていて、きつくなつてくる。自分の辛さを、ケーシイのせいに出来るところまで追いつめられている。極限状態だと言つ

ていいだろう。

「言いたい事は分かつた。でも、それだとケーシイは渡せない」

これは、どうすれば良いのか。この子をこのまま放つておく訳にはいかない氣もするが、出来る事もない。僕が守らなきやいけないのはケーシイだ。僕をきつく睨むその視線に、こつちまで辛くなってしまう。今までケーシイを返して欲しいという理由で、そこまで睨む理由はなんだろうと思うだけだったが、今はもうあまりに痛々しい視線だつた。

目も合わせられずにいると、ジョーイさんからのアナウンスが助け舟になつた。  
無言で立ち上がり受付に向かう。事情が分かつて来てしまい、今度は妙な緊張感を覚えた。

「確認出来ました。こちら、五十嵐太一様のモンスター・ボールですね。そちらの方は、五十嵐太一様のご子息、悟様です」

提示された証明書に書かれた苗字と、返されたトレーナーカードの苗字が一緒だつた。

「分かったでしょ？」

「そうだね」

手数料を支払い、僕等は再び先ほど座つたベンチへ戻る。

「お父さんのモンスター・ボールなんだね。買つてもらつた物なの？」

「どうでもいいよそんなの。これで分かつたでしょ？ そのケーシイは、うちのポケモンなんだ」

公的な機関に登録されているのだ、それは間違いない。父親に買つてもらつたモンスター・ボールでケーシイを捕まえてもらつたか、自分で捕まえたのだろう。

「このボールは君の父親のものだ。手続き上のおやは君の父親という事になる。君に返してと言われても、やつぱり渡す事は出来ないよ」

こうなつたら、直接父親を問いただすしかないだろう。ケーシイを守らなきや駄目だ。

「君の家に連れて行つてもらえる？ 僕が親御さんと直接話すよ」

僕の言葉に、悟君は血相を変えてだめ！ と大声を上げた。ポケモンセンターにいる人達の注目を集めてしまう。親御さんという言葉に反応したのだろう。首を横に振り、強い拒絕を見せた。

「でも、そうしないと話の決着がつかない。これに書いてある住所へ行けばいいのかい？」

証明書に視線を落とした瞬間、悟君は僕からそれをひつたくり、立ち上がりて距離を取りとくしゃくしゃに潰した。

「じゃあどうすればいい？」

「わ、わかった。もういい！ そんなやつお前にくれてやる！ だから来るな！」

何かいつもと違う行いをして、酷い目に合う事を恐れているのだろう。少しも目立てはいけない、という恐れを悟君の表情が物語っている。

「それでいいんだね？」

「いいよ！ それでいい！」

こつそりケーシイを連れ帰れば、自分の盾になるかもしれない。そういう事なのだ。可愛そうな状況だと思うが、ケーシイが酷い目にあうのは許せない。こいつは、僕にとつて大切なポケモンだ。

そして、僕が守れるのはケーシイだけ。悟君の親御さんがどんな人であつても、それは僕には関係ない。

悟君なりの解決策が失われて、僕と会つている意味はない。ポケモンセンターから出て行く様子を眺めつつ、僕はケーシイを撫でた。

絶対酷い目になんか遭わせない。そう、固く決心する。

せめて彼がポケモンセンターから出て行くのを待とうと思い、ドアから出て行くのを見届けようと目で追つていると、悟君は入口付近で急に足を止め、その場に立ち竦んだ。ポケモンセンターへ入つて来た男性が悟君の前に立ち、何かを話している。すぐに分

かつた。あれが父親だ。

申し訳ないが、僕はすぐに二人の元へ向かう。

悟君がこちらを指刺した。僕を睨んでいたあの表情じやない。全てが終わり、怯えているのが見て取れる。肩をすぼめて、小さくなっている。

「すいません、息子がご迷惑をかけてしまったようで」

「いえ、とんでもありません」

軽い自己紹介と挨拶をかわし、ケーシイの元おやをまじまじと見つめた。ストライプのシャツにジーンズの、小奇麗な格好だ。息子の格好とは、やっぱり違う。

「ケーシイは、あなたが見つけて下さったんですね。どうですか？　そのまま、あなたが育てていただいても構いませんが」

捨てる。そう言つてているのだ。自分で捕まえ、家に置き、悟君をここまで追いつめるような事をケーシイにも行つていた。テレポートが出来なくなる程追い詰められたケーシイは、自分のモンスター・ボールだけを抱えて命からがら逃げ出したのだろう。そう思うと、沸々と煮えたぎる怒りが僕を包みつつある。

「ええ。そうさせていただきます。この子は、僕が責任を持つて育てますので」

迷わずそう言い切つた。どう言われても、僕は絶対にケーシイを渡す気はなかつた。

「では、よろしくお願ひしますね。モンスター・ボールだけ渡していただければ、ボックス

システムで逃がす手続きを行いますが、どうします?」

「お願ひします。僕はここでお待ちしておりますので」

このモンスター・ボールにケーシイを入れておくのももう嫌だつた。一秒でも早く、この枷から解放してやりたい。

モンスター・ボールを渡すと、二人は手続きを行いに向かつた。

後ろ姿だけぱつと見ればただの親子だ。あの親が、息子とケーシイにどんなに酷い事を行つていたのか。人間なんて何をするか分かつたもんじやない。

僕は自分で蠢いている怒りの矛先が、あの親に向かつてているのと同時に自分に向いている事を自覚した。

僕が燃やしたポケモンが、もし誰かのポケモンだつたらとを考えた。野生のポケモンかどうかなんて確かめていないのだ。あのキヤタピーを大事に思う人がいて、僕がそれを燃やしていたらどうする。燃やしただけでもとんでもない重罪なのに、さらに悲しみ、怒り、憤る人を増やしている。

自分の行いも、誰かに怒りや悲しみを与えていたという意味ではあの親と同じだ。

だからこそ僕は、ケーシイを世界で一番大切に育てて行きたい。僕に出来る事は、それくらいの事だけ。悟君を見ていると、本当にそう思う。

ロビーの壁に寄り掛かって待つていると、事もなげに歩く父親と、その横を小さく

なつて少しでも何もしないように心がける悟君が、並んで歩いてくる。

「手続きは済みましたので、後はよろしくお願ひしますね」

にこりとするその笑顔の下に、どんな顔が潜んでいるのか。

ほら、お前からもきちんと謝りなさい。そう言われた悟君が、能面のような顔をして、すいませんでしたと人形のように頭を下げた。

「それではこれで」

今度こそ父親と去つていく悟君にかける言葉はない。何も、持ち合わせていない。

それでも何か出来る事をするとしたら、役所かどこか、一本電話を入れておこう。さつきちらつと見た住所は、最後までは記憶出来ていなくてもどこの地区かは覚えている。それと名前を照らし合わせれば、特定はすぐだろう。

「……さ、綾子のところへ帰ろうか」

震えが収まつたケーシイが顔を上げ、僕と目があつた。笑つた顔につられて、僕も笑いかける。

よいしょ、と肩車をすれば、その手が僕の頭へ。この感触を、大切にしたい。デパートかどこかで、モンスター・ボールを買って帰ろう。

ケーシイのおやは、僕なのだから。

# 【三十九】

テレポートが出来ない原因は良く分かつた。もう今更の人達を咎めようとも思わない。今後一切関わりを持たなければ大丈夫だ。

彼等の事よりも、今回は原因が分かつた事が大きな収穫だと思う。これできつと対策を立てやすくなる。バトル場でのテレポートの出来る同種族探しも結局見つからず仕舞いだし、やれる事はきっと多い。突破口が見えた気がして、いくらか気分は軽かつた。今までには、色々試せばいつかどうにかなるかもしれない、というあまりにも先が見えない状況だった。気にしそぎても駄目だと、長い目で見てどうにかなればいいなど考え始めていたので、一歩踏み出せた事は大きい。

当のケーシイはテレポートが出来なくとも特に気にはしてなさそうなのだが、これが成長にどういう影響を与えるのか分からぬ。そう考えれば、使えるようにしてあげたい。

時間はかけられる。一つ一つ試して行こう。僕は、ケーシイとこれからも一緒に居られるのだ。

テレポートの件を考えてはいたものの、頭の中の大半を占めているのはその事だつ

た。僕にとつてはそれが一番大事で、何よりも嬉しい。

嬉しさのあまり、悟君達と別れた後ケーシイとタマムシデパートへ寄る事にした。安全のためもあるのだが、購入したボールの中にケーシイが入ってくれると思うと、楽しくて堪らない。

買い物がこんなに楽しいと思うのは初めてだ。子どもの時、父にゲームを買ってもらうためにタマムシデパートへ来た時の事を思い出した。父はお金を払っているだけなのに、喜ぶ僕を見て喜んだ。その気持ちが理屈ではなく感覚で理解出来た気がした。

「なあケーシイ、どれが良い？」

タマムシデパートのボールコーナーへ行くのは、ケーシイと初めてここに来た時以来。

ガラスのショーケースに並んだボールが全部宝石みたいで、玉石混淆ではない全てが素晴らしいものに見える。安いのに性能が良いとか、高い割にはあまりよくないとか、色々あるのだろう。そもそもポケモンをゲットする性能は今回必要ないので、多少高くてもビジュアルで決めようと思う。

ケーシイを肩から下し、胸に抱きながら一緒に選んでいるが、目移りして中々決められない。格好いいボールもいいが、シンプルなのも捨てがたい。

ケーシイはどれでもいいのかあまり興味無さそうだったが、何かが目に付いたのか突

然身を乗り出して指を指す。希望のボールがあるならそれが良い。

「え、それでいいの？」

そこにあるのはなんの捻りもない、一番安物、赤と白のモンスター・ボール。  
それじゃあ前と一緒じゃないかと思い、何となく僕が良さそうだと思ったボールを指し、これは？　これは？　とあれこれ聞いてみても、ケーシイが指刺すのはモンスター・ボールだけ。

これが良いなら値段も安いし助かるのだが、なんて金のかからないやつ。

「すいません、モンスター・ボールを一つ下さい」

店員さんに声を掛け、一つ購入。どうせならもつとキラキラしたやつとか、黒くてかつこいいやつにすれば良いのに。

「それでは、トレーナーカードの提示をお願いします」

そういうえばそうだつた。ただの身分証になつていたカードを財布から取り出し、定員さんに渡す。

一分程で手続きは終わつたのか、袋詰めされたボールと一緒にトレーナーカードが返ってきた。同じ赤と白のモンスター・ボールなのに、前に持つっていたモンスター・ボールとは違う。僕が初めて自分自身で使うボールだ。ゲームコーナーの交換所で、初めて手に取つた時とは感覚が違つた。

僕の個人情報が書き込まれたボールに、ケーシイが入る。これからもケーシイと一緒に居られる事が嬉しい。それと同時に、本当の意味で自分のポケモンを持つ事になつたんだと実感出来る。

今まで通りだけど、妙に緊張する。手続き上の問題だけじゃないかと思つていたが、儀式のようなその手続きが、繋がりを強くしている様な気がした。

こんな事を気にしているのは人間だけなのだ。ケーシイは前と同じボールの方が安心するからモンスター ボールを選んだに違いない。

モンスター ボールはただの道具。人間社会でケーシイが生きて行くために、持つていると便利な物という程度。本当はそれくらいで良いと思う。だが、この儀式の大切さも理解出来た。トレーナーとポケモンという関係性が、今確かに出来てゐる感覺がある。トレーナーとしての自覚を持つための儀式だと思うと、納得出来た。

アパートに帰ると、綾子が玄関まで出て来て迎えてくれた。僕の頭の上にケーシイがいるのを見て、少しだけ笑つて「良かつたね」と呟くと、部屋へ戻つて行く。「うん」とだけ僕は返し、後を追いかけた。

ただ帰つて来ただけなのに、初めてケーシイを招いたみたいだ。

丸机の上に袋から出したモンスター ボールを置き、僕はその前に胡坐を搔いて座る。ケーシイは頭から下りると、僕の足の上に乗つて寛ぎ始めた。初めてでもなんでもな

い、引き取つて來た時から、ケーシイの家はここなのだ。

「それで、どうだつたの？」

「ああ、うん。色々あつたよ」

経緯を全て説明する間、ベッドに腰掛けた綾子は黙つて僕の話を聞き、時折頷いて相槌を打つてくれる。

全てを聞き終え「なるほどねえ」と僕とケーシイを交互に見てから、綾子は言つた。

「貫太は、ケーシイみたいだね」

どういう事？ と聞くと、ガーディのために無謀にも突っ込んで行つたケーシイのように、悟君の父親のところに何の準備もせずに乗り込んで行こうとするところが似ている、と綾子は言つた。

その通りだ。悟君の父親に、じやあ返して貰おうと言わっていたら、僕はどう言い返す氣だつたんだ？ あなた達はケーシイに酷い事をするので渡せませんと言つたつて、手続き上ケーシイのおやは僕ではなかつた。「酷い事」の証拠もなければ、言い返す論理だつて碌に持つていない。

「でも、ケーシイと貫太のそういうところは、嫌いじゃないよ」

綾子は僕の足の上で寛ぐケーシイを抱き上げ、自分の足の上に乗せた。抵抗はない。どこにいても、居心地良さそうにケーシイは力を抜いている。

「ありがと」

僕が言うと、ケーシイも小さく鳴いた。

「それで、モンスター・ボールを買って来たんだ」

「そう。新しいやつ。僕、初めてだよ。自分でボールを買ったの」

丸机の上には、新品のモンスター・ボールが乗っている。

よくあるお涙頂戴のドラマでは、小さい頃にポケモンと生き別れになつた女性が、大人になつてから別れたポケモンと再び出会い、ずっと空だつたモンスター・ボールに入つて行く、なんていう展開はお決まりだ。こんな狭い部屋の中でケーシイをボールに入れるので格好つかないかなとも思う。

「貫太がモンスター・ボールを買ってくるなんて、信じられない」

「僕もだよ。まさかこんな日が来るなんてね」

「嬉しそうな顔しちやつて」

「そういう顔してる?」

「誰が見てもね」

公園でも行つてみようか。どこか広いところで投げたボールにケーシイが入つて行く。いい絵じやないか。

「ケーシイ、どうしたい?」

僕の言葉に適當な返事をしただけで、碌な反応せずだらだらしているだけ。新しいボールだという事は分かつているのだろうか。新品のボールに入るという意味を、理解は難しくとも感じ取つてくれていると嬉しいのだが。

「あつ」

綾子が声を上げる。ケーシイが机の上のモンスター・ボールに手を伸ばし、それを手に取つた。あちこち触つて、スイッチに触れたのかボールは手のひら大に大きくなる。それを上に放り、キヤツチされることなく頭にコツンと当たると、ケーシイはモンスター・ボールの中へ。揺れる事なく、モンスター・ボールのランプは数回点滅してから、消えた。

「……入つちやつた」

小さく呟いた綾子の中には、モンスター・ボールが収まっている。

「分かつてるのかな。こんなんで、良いと思う？」

綾子はさあ？ と軽く小首を傾げる。

「もしかしたら、遊ぶつもりで触つただけだつたりして」

「まさかあ」

ボールを開いて外に出すと、距離を取つて宙に浮かび両手を上げる。確かに遊んで欲しそうだ。

いつものキャッチボールをご所望らしい。入っていたボールを軽く放れば、ケーシイはそれをキャッチする。

楽しそうに、それを僕へ投げ返した。

「本当に、ただ遊ぶつもりだつたのかな」

「いいんじやない？ 貫太もケーシイも何も変わらないんだし」

そうだ。ボールを気にしてるのは、僕だけ。ケーシイが僕と一緒にいる事を良しとしてくれたら、それだけで良いのだ。

ケーシイは自然体でそこにいる。僕も気負い過ぎてはいけないのかも知れない。ケーシイと一緒にいるトレーナー。それだけ分かつていれば、きっと大丈夫なのだ。

# 【四十】

ケーシイが、晴れて僕のポケモンとなつた。特に今までと変わりはない。

ただ、自分がトレーナーだという意識が高まつたからなのか、ケーシイを店に連れて行くのが少し怖くなつた。綾子の話は僕の記憶にきちんと残つていて、そんなまさかと思ひながらも、そうなのかも知れないと思う時がある。

店長はあれから何も動きはなく、怪しい様子もない。姪相手の対応も一切出さず、いつも通りだ。綾子も以前と同じように振舞つている。

里中さんには、先日のバトル場での上の空を謝つて、また連れて行つて下さいと約束した。

端的に言えば、今まで通りの、変わらない日常がある。

キヤタピーの焼死体を目の前にした後は一体どうなるかと思つたが、落ち着いた日々が今あるなら、このまま何も起きないで欲しい。

店長が犯人だなんて、僕は嫌だつた。恩もあるし、人として尊敬している。いつだつたか社員にならなかつたか？ と言われた時だつて、本当は飛び上がりたい程嬉しかつたのだ。認められたい人から認められるというのが、あれほど嬉しいものだとは知らなかつ

た。

「貫太！　もう上がつていいで、明日もよろしくな！」店長の大きな声を聞いて、僕は今日も一日を終え

る。ここ数年、一日をあの声で締めるのが日常だ。休みの日は逆に締めの言葉がなくて落ち着かないくらいだった。

綾子のアパートとこの店の往復が僕のライフワークで、そこにケーシイとの暮らしが加わった今、充実している。

「お疲れ様です！」

手早く着替えて店を出て、先に上がつていた綾子と一緒に帰路へつく。

「やつぱり、少し変わったよね」

毎日懲りもせずタマムシは賑やかだ。横に並んで歩く綾子が、ポツリと呟いた。

「変わったって、何が？」

「貫太だよ。明るくなつたというか、前向きになつたというかさ」

「ケーシイの事があるからじゃないかな。しつかりしなきやいけない氣がするのかも」

綾子はどうだろう。前とそんなに変わった様子は見られないが、ケーシイを介して僕との距離は少し縮まつた気がする。くだらない話をする機会は、増えたと思う。家にいても世間話なんて碌にしなかつた。せいぜいニュースを見ながらぼつぼつと喋る程度。

今はテレビを見ていなくたって、何気ない会話を交わす機会が多くなった。

これは進展と言つて良いのではないだろうか。タマムシ公園での事は忘れていないが、アパート追い出されていない以上、僕はもつと綾子との距離を縮めたいと目論んでいる。

「人間二十歳を超えると変われないといつてい言うけど、きっと貫太はぎりぎり間に合つたんだね」

「綾子は、変わりたいの？」

「分かんない。私、どうしたいんだろう。分からなくなっちゃった」

弱気な言葉は珍しい。

いつもは僕が情けない事を言つて、綾子が発破をかけてくれる。逆の立場になると、うまい具合に言葉を掛けるのが難しい。

「何か、やりたい事とかないの？」

やりたいことかあ、と綾子は反芻し、タマムシの夜を見上げた。

新しい事を始めると、何かのきつかけになつたりするかもしれない。

「やりたい事というか、気になつてゐる事はあるんだけどね」「え、なになに？」

「事件の事」

「……そうじやなくてさあ」

僕が言いたいのは、新しいポケモンを持つたりするのがやつぱり良いんじやないかと  
いう事だ。事件をどうにかしたい気持ちは分かるが、それは僕等の仕事ではない。

焼死体の件が恐ろしくてもう色々と動く気もないと思っていたのだが、どうやらそう  
ではないらしい。

あんな危ない事件に首を突っ込むより、他の事をした方が良いに決まっている。

「あれから、どう思つてる?」

「事件の話?」

「うん」

話すしかないのか。結局そこに行きつくのを、僕は今まで避けていた。出来る事は少  
ないので、リスクだけやたら高いのは御免だ。

「権田さんは今まで通りにしか見えないかな、僕には。綾子の話で言えば、確かに疑いた  
くなる気持ちも分かるけど、僕は権田さんが本当に犯人だとは思えない。いや、思いた  
くないのかな」

「私もそう。犯人だと思いたくない。でも、分かつたでしょ? 権田さんがたまに見せ  
る気味の悪い視線」

綾子は、店長が犯人だと思い込み過ぎている。色眼鏡で見てているから、店長の視線が

まるでポケモンを燃やそうとしている狂人の視線に見えてしまうのではないか。

「それに、私のバッグにモンスター・ボールが入っていた件だつて、犯人は絞られると思わない？」どう考えたつて、うちの人間だよ」

分かってる。その通りだ。街ですれ違い様にモンスター・ボールを仕込まれた、というより店の人間が綾子のバッグにモンスター・ボールを仕込んだ、という方がしつくり来る。

でもそうなると、犯人は僕達バイトか、里中さんか、店長という事になる。

そして必然的にポケモンを誘拐し燃やしている犯人がその中にいる事になるのだ。

店の人間達を疑いたくない。僕は、あの店が好きだ。

「貫太。やっぱり私じつとしていられない。権田さんが犯人なら、私はその現場を抑えたい」

本気か。僕達だけでそれをやろうと言うのか。

「具体的には、どうするの？」

「ちょっとと考えがあるから、帰つたら聞いて」

アパートが見えてきた。僕はあまり気乗りしないが、このまま綾子を放つておいたら一人で突つ走つて行くに違いない。無理は絶対にさせたくない。

そういう意味だと、綾子が何をしようとしているのか、きつちり把握しておく必要が

あつた。

「分かつた。聞かせて」

何も起こらないで欲しい。このままであつて欲しい。ただそれだけなのに――。  
人は何をするか分かつたもんじやない。

僕を例とすれば、本当に人は想像を越えて行く事がある。

ポケモンを燃やしたのは、店長なのか。確認するのも嫌だが、どうやらそうせざるを得ないらしい。

# 【四十一】

「それで、どうする気なの？」

帰宅した僕は、早速綾子の考えを聞こうとベッドに腰掛けた。  
綾子は机の前に立膝で座り、バッグの中から手帳を取り出す。

「これなんだけど」

タマムシ公園で見せてもらったメモだ。来店したポケモンと日付が羅列しており、それぞれ右側に伸びた矢印の先に、同じポケモンの名前と日付、そして焼死体となつて発見された事を示すバツ印が書いてある。

「それがどうしたの？」

「店に来店していて、まだ殺されていないポケモンがいるでしょ？ 次そのポケモンが来店した時、注意して監視しようと思うの」

「次の犯行時期が分かるなら抑えやすいとは思うけど。……どうだろうなあ。それで、まだ被害に合つてなくて、燃やされそうなポケモンは？」

綾子はええと、と指でメモを追う。

これくらいなら、まだ危険は少ないかもしない。

「スボミー、タネボー、オタチ、カラカラ、ピカチュウかな。この子達は、狙われるかも  
しない。後は、このメモに載つていないポケモンが来たら、チエツクした方が良いと  
思う」

「よし。じゃあ、次対象のポケモンが来店したら、権田さんを監視しよう。やつぱり、後  
をつけるしかないのかな」

「それしかないと思う。やれる限りで尾行して、犯行を押さえたところで警察を呼ぶ」

「そんなにうまく行くだろうか。

だが、もつと良い案を提案出来ないのも事実。後をつけ、犯行を抑えるくらいしか思  
いつかない。だが、もし犯行場所が自宅だつたらどうする？ 一人ではなくグループで  
行つていて、仲間に見つかつたらどうする？ 犯行は店長が休みの日に行われていたら  
どうする？

考えれば考える程ハイリスクローリターンに思える。僕等は身を守る術を持つてい  
ない。丸裸で敵陣に乗り込んで、はい巻き込まれましたではなんと間抜けか。

「他にも助つ人を呼ぶべきか？」

「僕等だけで出来るかな。やつぱり危ないと思うんだけど」

「貫太がそう言うなら、私だけでやる」

そういう事を言う。綾子は言い出したら聞かない頑固なところがあつた。

「分かった。それは絶対駄目だ。僕もやる。でも、あまりに無防備過ぎないかな。他に、手伝ってくれる人はいない？」

「こんな事頼める人なんていないよ。何があるか分からぬんだし」  
だつたら僕は、綾子にだつてそんな事して欲しくない。

「だつたら、これだけは守つて欲しい。絶対に無茶せず、一人で行動しない事。僕もそうするから、頼むよ」

わかつた、と綾子は首肯する。

正直、変装して狙われるかもしれないポケモンを持ち歩くなどと言い出しかねなかつたが、そこまで突っ込んで行かない事に、僕は安堵した。

そういう提案をして来ないところを見ると、綾子はやっぱりポケモンを持つのは拒んでいるようだ。何度かそういう話を持ち掛けた時も、少しもそんな気は無さそうだった。

ポケモン達を危ない目に合わせられないという事以上に、綾子は身一つでやろうと、何かに突き動かされている。

「綾子」

「なに？」

「どうしても気になるから言うんだけど、何故そんなに事件に固執するの？」

僕はあの焼死体を目撃してからこの話題を避けて来た。それは、綾子に思い出させたくないかったし、僕も店長が犯人だなんて事考えたくはなかったからだ。

それなのに、綾子はあんな怖い思いして取り乱しても、まだ首を突っ込もうとしている。どう考えたって固執しているのだ。何か理由があるに決まっている。

「身内が犯人かもしれないんだよ？ 固執するというより、黙つていられないでしょ？」  
違う？」

表情一つ変えずに綾子は言った。僕は、それも本当の理由ではないような気がした。それよりも、もつとこう、犯行の内容が許せないという意思を感じる。初めてこの事件について綾子と話した時の、嫌悪感を抱いたあの表情を僕は忘れられない。

「違わない。そうだね、身内だとしたら、動かずにはいられないかも」

それでも、僕は今こう言うしかない。

「明日からやつていこう。何か気付いたら、情報は共有して」  
「わかった」

綾子は話を切り上げ、シャワーを浴びに行つた。部屋には、僕と寝床で眠つていてケーシイだけ。

店長が犯人だと分かつたら、僕は怒るか、悲しむか、どっちだろう。  
目を閉じて想像する。

人生で人の下で働いたのは初めてだつた。上司が店長で良かったと本当に思う。僕自身を否定せず、一人の人間として接してくれた。ポケモンを燃やした事を心の底でずっと引き摺っていた僕からすると、こんな僕でも何となく必要とされているような気になつて、心が落ち着いた。

僕にとつては、店長は感謝するべき人だ。その人がポケモンを誘拐し、燃やしている犯人だとしたら。

……想像は難い。悲しみも、怒りも沸いてこない。何故だ。いくら想像しても、何より一番先に来るのはどうして燃やしたんだ、という問い合わせだけ。

もしかしたら、その時に初めて僕がポケモンを燃やした理由が分かるのかも知れない。

怒りも悲しみも感じなくて、僕は自分を許せるのか？　問いかける自分は想像出来ても、店長に憤慨をぶつける自分が想像出来ない。

燃やした者同士、話をしてみたい。

ただひたすらに、そう思う。

## 【四十二】

綾子と今後の事を話した翌日、僕の頭はほとんど事件の事で一杯だった。

仕事を熟しつつ、店長や来店するポケモンに注意し、アパートへ帰れば綾子との日の様子を共有する。

今日は標的となるかもしれないポケモンは、現れていない。明日も同じ作業を行い、現れたら尾行スタートだ。

まだ一日目なのに、こんな事いつまで続けるんだろうと思ってしまう。早く終わりたい。店長もさつきと潔白を証明して、綾子を満足させてもらいたいものだ。

直接聞いてしまえばいいのに、とやりもしない事を考える。本当に犯人だつたら、僕等が危険だ。気長にやれる事でもないが、焦つて突っ込みすぎるのもリスクだと思う。なるべく落ち着いて、バレないよう注意を払つて熟さなければ。

明日は僕がバイトで、綾子は休み。今日と同じように、来店したポケモンをチェックし、綾子から貰っているメモと照らし合わせる。既にメモされているポケモンは頭に叩き込んだから、すぐに分かるはずだ。

実際、いつまで続けるのだろう。どこまでやつても、尾行しているだけでは店長の身

の潔白の証明は難しいと思つてゐる。尾行に気付かれて犯行を止めていただけなのだとしたら、僕等の行為は無駄だ。家に入つていくのを見届けてその日の尾行が終わりなのだとしても、その後に犯行が行われればそれも無駄。唯一、僕等が尾行している間に犯行が行われれば身の潔白の証明にはなるかも知れない。

犯行時刻は、カツラさんに聞いたら教えてもらえるだろうか。

ただそれも、一人で犯行を行つている場合の話。だが、単独犯の可能性はニュースでもよく示唆されていた。ポケモンをひたすら燃やす、という行為にメリットはない。複数人で共有出来るメリットがあるとは到底思えないため、単独犯の可能性が高いとテレビに出ていた専門家が言つていた。

無差別に狙われているというのも、理由の一つらしい。

複数人の犯行というのは、あまり考えなくて良いのかも知れない。

「……眠れない」

こんな事ばかり考えていると、寝つきが悪くなる。隣で横になつている綾子は既に眠つていた。半分以上は綾子が心配で付き合つてゐる面が強いから、続けるのは僕の方がしんどいかもしれない。

出来れば早めに結果が欲しいが、最近新しい事件のニュースは流れていなかつた。次

の犯行がないに越した事はない。このまま新しい被害ポケモンが出る事なく真犯人が捕まれば万々歳。だとすると僕達は捕まるまで続ける事になる。

それは、勘弁して欲しい。

翌日、綾子がいないため僕は昨日より店長に注意し、来店するポケモンに目を配つた。店に来る全ての人がポケモンを出して飲んでいる訳じやないので、考えるよりは大変な作業ではない。

「貫太、何をそんなにキヨロキヨロしてんだ？ 何かあるのか？」

「い、いえ、注文をされたいお客様を見落とさないようにしているだけですよ」

店を見渡せるところに立つていると、店長が僕の様子に気付いて話しかけて来た。いつもより不自然に店を見回しているのが分かったのだ。何故そうしているのか気付かれる事はないと思うが、自然な振る舞いも意識していかなければならなくなると大変だ。僕にそんな事出来るだろうか。

「仕事熱心なのはよろしい」

僕の言葉で納得したのか、店長は離れて行つた。

お客様からの声にすぐ反応し、僕は注文を取りに行く。キヨロキヨロしているのは仕事をきちんととしているからですよ、とアピールになれば良いが。

「あの、こここつてポケモンを出しても良いんですよね？」

「はい、大丈夫ですよ」

四人席に座った男女一組は、互いにモンスター・ボールを取り出し、自分の隣でそれを開いた。男性が開いたボールから出て来たのは、ワニノコ。過去、水タイプのポケモンが暴れて水鉄砲をぶちまけた事があり、その日は大惨事だつた。他の客は濡らしてしまふし、床もびちよびちよ。丁度その後処理を僕がやつたのだ。幸い濡らされたお客様は寛大な方で、ポケモンがいる居酒屋だからね、と笑つていた。やらかしたポケモンのトレーナーと一緒に床を拭いたのはよく記憶に残つていた。

もう片方の女性が開いたボールから出てきたのは——。

「オタチ……」

僕の口から洩れた呟きは、お客様には聞こえていなかつた。それで注文なんですが、と矢継ぎ早に口にするメニューのメモを、少しだけ遅れて取つた。

につこり笑顔を貼り付け、少々お待ち下さいと伝え、その場を離れる。メモをちぎつて厨房にオーダーを入れ、再びホールへ。

あのオタチがいる席と、店長の両方が見える位置へ陣取つた。カウンター席の中の店長からは、店がだいたい見渡せる。オタチの姿も確認出来てゐるはず。

これからだ。この後から本当に尾行をしなきやいけない。

打合せ通り、店が少し落ち着いてきた頃ごつそり綾子に連絡を入れた。店長が店を出

る頃には、とっくに近くで待機しているだろう。

まずは僕自身がおかしな素振りを見せないようにしなければいけない。

辺りを見回しているだけで、店長に不審がられて話しかけられてしまうのだ。僕がそわそわしている様子なんて、すぐ伝わってしまう気がする。僕からすれば店長に変化は見られないし、綾子程疑いが強くないのだが、現場を押さえてしまった時の事を考える

と気が気でない。

恐らく何も隠せていないまま時間は刻々と過ぎていき、気付けば閉店まで三十分。ラストオーダーを終え、僕は会計を行うためにレジへ入った。

今日も色んなお客さんが気分良さそうに帰つて行く。ポケモン連れ、盛り上がりまたまま二件目、三件目に行く人だつているだろう。僕はおいしかつたよ、と言われるより、楽しかつたよ、つて言つてくれる方が嬉しかつた。

「ポケモンと一緒に食事が出来て、お酒も飲めるつてやつぱりいいですね。賑やかだし、面白かったです」

オタチとワニノコを持つていた男女がレジの前に立ち、ほろ酔い顔でそう言つた。オタチは女性に抱かれ、ワニノコは男性の肩に乗つてゐる。ポケモン達もご機嫌なのが見て分かる。面白がつてくれて、嬉しい限り。

二人はたまにタマムシへ買い物へ来るようで、今日はポケモンと一緒に賑やかに飲ん

だり食べたりしたいと思い、うちを選んでくれたらしい。

また来ますね、と二人は去つて行く。

あんなに楽しんで貰えているのに、後日自分のポケモンと同種のポケモンが燃やされて殺害されていたら、どう思うだろうか。

そもそもこの事件、うちにとつては営業妨害でしかない。防犯対策をテレビでもネットでも促しているから、ポケモンの分の食事やドリンクの注文が減れば、売り上げは落ちるのだ。店長がそんな事をするとはとても思えないのだが、ポケモンを燃やすという行為にメリットデメリットで考えてはいけない。

僕も尾行を決めた以上は、ある程度店長が犯人だと決めてかかつて動かないと駄目だ。中途半端は良くない。

会計も全て終わり、閉店作業をしている間も僕は店長に注意を配る。オタチに向けられていたかもしれない、綾子の言つていた視線は結局感じられなかつた。

僕にはただ、店長が自分の店で楽しんでいるポケモンやトレーナー達の姿を微笑ましく見守つてゐるだけに思える。

これだつて僕の色眼鏡だと言われたら、そのなかもしれない。本当に綾子の言うような視線を向けているのだとして、僕がただそれに気付けていない可能性だつて十分にあり得る。

氣を引き締めなければ。中途半端は良くないと思つたばかりなのに、どうしても店長を見るとそんな馬鹿なと思つてしまう自分がいる。

やるからには出来る限りやらなければいけない。分かつてはいるのだが……。「貫太！ 明日団体の予約が入ってるから、準備だけしといてくれ！」

「分かりました！」

明日は金曜日。今日よりも更に忙しいだろう。尾行の事ばかり考えて仕事に支障をきたすのも良くない。こつちはこつちで、頑張らなければ。

## 【四十三】

バイトから上がつて店を出ると、すぐに携帯が鳴った。メツセージアプリには、綾子から今いる場所が書かれていた。了解、とだけ返事をし、僕はその場所へ向かう。

ビルを出て左手へ歩き、最初の路地をまた左に折れる。僕が、綾子と店長が一緒にいるのを目撃し、こつそり見ていた場所だった。

「おまたせ」

綾子は動きやすく目立ちにくく、紺のウインドブレーカー姿で待っていた。尾行の準備はバツチリだ。

「どうだつた？」

「送つた通り、オタチがいた。メモには載つているけど、まだ燃やされていないポケモンだよね？」

「そう」と言いつつ、綾子はビルの入口から視線を向けたまま首を縦に振る。  
「権田さんの様子は？」

見張りは任せ、僕は綾子の隣でその時を待つ。今日のバイト中に見た店長を思い返した。

「……僕には、綾子の言っていた店長の視線はよく分からなかつた。ただ、店に来ているポケモン達を微笑ましく見ているようにしか見えなかつたな」

「それ」

「それ？　あの視線が、綾子が言っていた氣味の悪い、恐ろしい視線だという事だろうか。

「それなの。あの、ポケモン達に向けた、何かを隠すような微笑んだ視線が怖いの。昔権田さんが自分のポケモンに向けてた視線と同じだから」

店長は過去、自分が行つた酷い仕打ちのせいで自分のポケモンを一匹亡くしていると  
いう。それからポケモンを持つ事なく、今に至るらしい。

あれは、自分の店で楽しんでいるトレーナーやポケモン達に向けた、微笑ましい視線  
じやなかつたのか？　僕は知らないから、綾子にそう言われればそうなのかなと思うしか  
ない。あの微笑みが、店にいるポケモンに対してもう一つをどうしてやろうか、と品定  
めでもする視線だとしたら、それは確かに恐ろしい。

「來た」

一気に現実へ引き戻される。僕は、これから店長を尾行する。今日いきなり現場を押  
さえたら、それで終わりだ。

その時を想像すると、緊張してくる。主観的ではない、客観的にポケモンを燃やす現

場が目の前に現れると思ふと、異様な緊張感を覚えた。

「こつち来るの？」

「いや、ビルを出て右へ進んだ。一応、自宅方向」

ウインドブレーカーのフードを被つて歩き始めた綾子の後ろを、僕はついていく。

タマムシの雜踏は、尾行にはうつてつけだつた。ある程度距離を取つていれば、余程の事がない限りバレる事はないだろう。

視線の先の店長は、何かを起こす様子はなく堂々と真っ直ぐに歩き続ける。家はタマ

ムシ公園の方だと綾子は言つていたので、それなりに歩くだろう。

「家に戻つたら尾行は終わりなんだよね？」

「打合せ通り。戻つて三十分程して何もなければ、その日は終わり」

合計すると一時間程だが、僕には随分長く感じた。

繁華街を過ぎれば、少しづつ街が暗闇を帯び始める。メインストリートが終わり、国道沿いへぶつかる交差点を左に折れた。姿が見えなくなつたので、僕等二人は駆け足でそこまで向かう。

角の雑居ビルからこつそり顔を出すと、その先に店長を確認出来る。

今まで明かりが多かつたからある程度距離を取つても平氣だつたが、ここからは暗がりも増える。

「行くよ」

「分かってる」

少し歩を速め、店長との距離を詰める。

小さく見えていた背中が、いつも通りの大きな背中になつてきた。近づくと動きがより分かる。少し蟹股で、道の真ん中をすんずん歩く様は店長そのもの。やはり変わった様子はない。

あんなに平然と歩いたまま、ポケモンを誘拐したり燃やし始めたら、あまりに理解の範疇を超えて過ぎている。良いとか悪いではない。人間とポケモンが共存する社会に存在してはいけない人間だ。

「また曲がった」

今度は交差点を右に折れ、タマムシの西側へ進み、マンションやアパート、一軒家が立ち並ぶ地域に入つていった。

タマムシ公園はその先だ。公園近くに住んでいるらしいので、もう半分は来ているだろう。

時間も時間なので、この辺は人通りもかなり少ない。僕が追われたあの時とは逆だつた。

夜の人気のない道を歩く時に気になるのは、足音だ。後ろからついて来る音がこの住

宅街の静けさに演出され、余計に恐ろしさを増す。それが、本当に聞こえているかどうかは関係ない。姿を確認してもしなくて、それが足音でさえなくとも良い。一度気になつてしまふと、後ろに何かいる気がしてしまふのだ。

一定の距離を保ちつつ、路地に身を隠しながら進んでいるとはいへ、僕と綾子はかなり足音に気を遣う事となつた。舗装された道路であつても、普通に歩いていると足音が出来る。後ろを振り向いて姿を確認されれば、バレるかもしれない。

店長が犯人だとすると、バレたら危ない。静けさは、緊張感も演出した。

街灯の光さえ、僕等をあぶり出す妖しい光に見え、尾行というものは難しいものだと思つた。それでもバレないのは、綾子が店長の自宅を知つてゐるからだ。ある程度距離が離れていても、自宅までの道のりを考えれば歩く道は予想出来る。

振り向かれても、街灯の下にでもいな限りは僕等だと判別するのは難しいだろうと、いう距離感を保つ。

少し後をつける事に慣れてきたかなと思えた時、一本通りを挟んだ向こうに、タマムシ公園の雑木林が見えてきた。

まさか森の中で？ 公園の中へ入つて行つたらいよいよだが、店長は入口前で左に折れて公園の外周を歩いていく。

尾行は驚く程うまく行つてゐる。一度もこちらを振り向いてはいなし、バレていな

いと思う。

外周沿いを歩いていた店長は、そのまま真っ直ぐ進み、公園から一区画離れたマンションへ入つていつた。

自宅での犯行の可能性はない、と思いたい。

「どうやら、何も起きないみたいだね」

「まだ。もう少し様子を見ないと」

店長の部屋は三階の二号室。僕等はマンション近くの路地角に立ち、綾子と交代でマンションから出て来る人間と部屋のベランダを見張つた。

店長は、不審な素振りも何も見せず、ただ店から家まで歩いただけだつた。

この尾行作業をずっと続けるとなると大変だ。綾子は犯人が捕まるまで続ける気なのだろうが、僕等の方が先に参つてしまふのではないか。

犯行時間はもつと深い時間かもしれない。僕等が見張りをやめて帰つた後に犯行が行われてしまつたらなんの意味もないのだ。

そう思うと、やっぱりこの尾行にどれだけの意味があるのか、僕には分からなくなつてきていた。

何もせずにいられないから、せめて出来る範囲で。その気持ちは分かるのだが、何かもう少し良い方法はないものか。

もう少しこれを続けて、綾子の気が少しでも収まれば、別の方針を提案したい。時間を狭めても良いだろうし、それとは逆にとことんやるならば、徹底的にやらなければ駄目だろうと思った。店長の服や鞄等、どこかバレない場所に小型の盗聴器でも仕込むらいはしないと、とことん調べるのは難しい。

危険な橋を渡る事にはなるが、本気で押さえるならそれくらいしないといけないのかかもしれない。

その日、結局何も起きないまま僕達の初尾行は終わつた。こんなものかと、まだ一日目なのに僕は高を括り始める。

綾子は満足気な様子もない。涼しい顔をして、明日も続けるだろう。次の尾行も、今日と同じ様子が予想された。踏み込んで行くのは危険だが、踏み込まないと追い詰められないし時間がかかる。綾子が危険な目に合つて欲しくない気持ちと、どうせやるなら、という自分の思いがごちゃまぜになつて、どうしようか僕を悩ませた。

いきなり根を詰めても続かない。何の収穫もない事に安心し、同時に気が抜ける。

明日からもこの作業が続くが、店長が犯人だという疑いが、僕の中ではもう薄れつてしまつた。だからこそ踏み込もうかななどと楽観的な事も考えられる。

もつと決めてかかつた方が良いのは分かるが、どうしても店長の肩を持つてしまう。そうであつて欲しくない。

現場を押さえたい気持ちより、潔白が証明されて欲しい。  
ただただ僕は、そう願う。

## 【四十四】

何も収穫が得られない日々が続いている。次の被害者が出る事もなく、ただ尾行を続けるだけの日々が続いていた。

次で一週間。メモに載つていないポケモンや、載つているけどまだ死んでいないポケモンは店に来店していたが、犯行は行われていない。

この間、店長が休みの日も一日だけあつたが、綾子と二人交代で店長のマンション近くで張り続けた結果、コンビニに行つた事を確認しただけだった。

後は一日中家におり、僕はもちろん、綾子だつてこの徒労感は感じ始めているようだつた。

素人二人で一人の人間を監視し続けるのはやはり無理がある。

シフトまで無理矢理いじつて店長が休みの日の深夜まで監視した割には、得られるものが無さすぎるのだ。せめて時間が絞られれば楽になるのだが、所詮僕等はただの一般市民。捜査情報を知る事もそれを確認する術もない。

一週間が経つたら、尾行は時間を絞り、自分達の事も考えた方が良いと綾子に提案しようと思う。綾子はあまりに事件に入れ込みすぎているようで、身体を壊しそうだ。そ

ちらの方が心配で、少し落ち着いて欲しい。

ポケモンを燃やす。その行為がもたらす惨たらしい結果や、後に残った虚しさや嫌悪感は、僕にも分かる。自分で行つた行為を振り返るだけなのだが、何度も思い返しても同じものを感じる。この前焼死体を目にした時からは、余計にそうだ。  
だからと言つて、絶対に犯人を捕まえたいとは思つていなかつた。捕まつて欲しいとは思うが、自分で捕まえたいとは思わない。

自分で自分を捕まえるような感覚と言つても誰にも伝わらないかもしれないが、この一週間犯人の事を考え続けていると、鏡を見るようで会いたくないと思い始めた。話を聞いてみたいという怖いもの見たさもあるのだが、対面した時に僕はきっと圧倒的嫌悪感と、憎悪を抱いてしまいそうだつた。

それは自分への嫌悪感と同種のものもあるし、憎悪をぶつけていれば、なくならぬ自分の罪を、そつくりそのまま、八つ当たりの様に相手へ叩きつける事だつて出来る気がする。

僕の罪は、僕が背負つていかなければならない。

事件の犯人が捕まつても、結局は何もなくならない。僕はずつと、燃やした事実を考え続けていくのだと思う。

七日目。

綾子と一緒にバイトへ入り、いつも通りに仕事を行う。店長の様子を探る事にも慣れてくれた。変に疑われる事もなく、閉店時間が迫つて来る。

今日もどうせ何もないのだろう。そんな気の抜けた考えが、逆に僕の不自然さを取り去つた。最早店長に疑われる事もない。

何事もなく業務を終え、店長や里中さんへの挨拶で一日が終わる。今日も綾子と一緒に尾行だ。

二人で店を出て、最早恒例となつた場所で待ち構える。綾子が店長の姿を確認し、尾行がスタート。いつも通り、自宅の方向へ歩き出した。

やる気が衰えない綾子の執念が、この尾行を支えていると言つて間違いない。僕の役目はブレーク役で、突つ込んで行かないように見張つている役割が大きい。フードを被らなくてはこの距離ならこちらには気づかない。何度も説明しても綾子は被るのをやめなかつた。両方同時に気付かれなければそれで良い。貫太だけ気付かれるなら、なんどでも言い訳出来る。綾子はそう言うが、僕等二人が並んで歩いていても、店長からすれば大した事ではない。尾行がバレなければ良いだけなので、普通にしていた方が良いと思うのだが――。

「二人とも、こんなところで何やつてるの？ 帰つたんじやなかつたの？」

慣れ始めてしまった尾行が、他への注意を散漫にしていた。店長の背中に注視して歩いていると、通り過ぎようとしたバイト先のビルから出て来た人間に、僕達は気付かなかつた。

店を閉めて出て来た里中さんが、僕達に声を掛けてきた。

いつもは店長より里中さんの方が早く帰つていたのに、今日は逆。綾子も慣れ始めていて順番を気にしていなかつたのだろう。店長の姿ばかりに注意を配つて、里中さんの事が頭から抜けていた。

「いやその、僕等もこれから帰るところなんですよ」

歩きつつ、店長の姿をちらちら捉えながら里中さんに返答する。

「でも、綾子ちゃんもそんな恰好で、フードまで被つて何事だい？　君達の家、こっちの方角じゃないよね？」

「いやあ、ちょっと遠回りですよ。散歩がてらつてやつです」

苦しい言い訳だつた。綾子もさつとフードを取つて、何でもないですよとばかりに取り繕つてはいるが、無理がある。

「ああ、そういう事？　店長か。何々、面白い事でもあるの？　何か秘密を探ろうつて事かい？」

隣を歩き始めた里中さんが、繁華街の雑踏の中、視線の先にいる店長に気付いた。僕

がちらちら見ていたせ이다。

「仲間外れにしないで、僕も付き合わせてよ」

僕を真ん中にして、右に里中さん、左に綾子が並んで歩く。僕は綾子にどうする？ という意味を込めた視線を送ると、首を一つ縦に振つて「しようがない」と小さく呟いた。

「分かりました。でも、絶対にバレないようにして下さいよ。事情は後で話しますから、今はただ後をつけて下さい」

尾行の理由は、後でどうとでも繕えるだろう。今は、黙つて一緒に歩いて来てもらうしかない。

幸い店長はいつも通りただ真っ直ぐに、堂々と歩き続けていた、はずだつた。

「え？」

僕も声を出しそうになつた。綾子が漏らした疑問の声は尤もだ。毎回まつたく同じ道を歩いていた店長が、初めて歩くルートを変えた。国道線にぶつかるまで真っ直ぐ歩いていたのに、今日に限つてそれより大分手前で左へ折れた。

里中さんに気付かれ、店長は別ルートを歩く。いつもと違う状況に、慣れていた尾行が途端にまた緊張感のあるものとなつた。

「何々？ どうしたの？」

「僕等にもよく分かりません。とりあえず、つけてみましょう」

繁華街を南下し始めた店長の様子は、いつもと変わらないように見える。ただ違うルートを通って帰るだけなら良いのだが、進んで行く方向は家とは別方向だつた。

綾子と顔を見合せたが、互いに言う事は何もない。僕等がやれることは、ついて行く事だけ。

背負つたりュックの中のケーシイが、途端に心配になつてくる。家に置いてくれば良かつたのかもしれないが、置いて来たら來たで心配したはずだ。絶対にこのリュックを離さずにいれば大丈夫だと自分に言い聞かせ、肩紐を持つて背負い直す。

「どこ行くんだろう。店長がこの時間から飲み直すなんて話あんまり聞いた事ないんだけどなあ」

里中さんも、店長の行先に心当たりはないようだつた。

それは僕等も同じで、店長は普段ゲームコーナーにしか行つていらないものだと思つてゐる。夜にどこかへ出掛けているなんて話は聞いた事がない。

「でも、どうして後をつけるの？」声を掛ければいいのに

それが出来たら苦労はない。里中さんへの返事はそこそこに、店長の背中を注視する。思い当たるのは一つだけ。綾子の疑い通りであれば、もしかしたら本当に現場を押さえる事が出来るのかもしれない。

繁華街から外れ、店長はどんどん歩いていく。もう少ししたら、役所やポケモンジム等の公的機関が並ぶ地区に入る。

後を追いつつ、段々と緊張感が高まるのが分かる。

「曲がったね」

里中さんだけが、ぽつりと呟く。店長がT字路を右に折れた。当然姿は見えなくな  
り、僕等は駆け足で曲がり角まで向かう。どこかに入るのだとすると、急がないとま  
い。

「見失っちゃう。急がないと」

分かつていてる。里中さんだけが、緊張感なく楽しそうな様子だつた。一人雰囲気を壊  
してくれるくらいが、逆に良いのかも知れない。僕等だけだったら、張り詰めすぎてい  
た。

ここまで来ると、住宅街並みに人が少ない。役場で働く人達もこの時間は流石に働い  
ていない。繁華街で飲み歩く人達もこの辺まではほとんど来ない。立ち並ぶ雑居ビル  
のほとんどに明かりは灯つておらず、怪しい雰囲気が漂う。知っている街が、随分違つ  
て見える。

「どう? 店長いる?」

小声の里中さんが、角まで来て様子を伺う綾子に話しかける。もう完全に無視してい

るが、動こうとしない綾子も不自然だった。

「何かあった？」

気になつて僕も声を掛ける。しばらく反応がなかつたが、やがて綾子はゆっくりとこちらを振り向いた。

その表情が、もしかしたら本当に犯行現場を押さえられるかもしないという事を物語つていた。真剣な表情の綾子は、唾を飲み込んで、大きく息をついた。

「中に、入つていつた」

「中つて、その辺の雑居ビルに入つて行つたつて事？」

「そう。多分、地下だと思う。お店つて感じじゃない」

さつきまでの緊張感の比ではない。横で里中さんが何か言つているが、もう何も耳に入らない。キヤタピーの焼死体が頭に思い浮かぶばかり。

身体が震える。動悸がするようだ。

本当にその現場があるのかもしれないとなると、異様な高揚感、緊張感、嫌悪感、いろんな感情がないまぜになつて、今すぐにでも走り出し、店長が入つて行つたというビルに突つ込んで行きそうになる。会いたくないんじやなかつたのか。そんな想像と、現実は違つた。

ポケモンを燃やすという感覚は、こんな感じだつたのかもしれない。普段感じられな

い、異様なものだ。人は何をするか分からぬ。自分の中に、こんな感情が渦巻く事を予想出来なかつた。

「私、行つてくる」

その言葉で、僕の中で蠢く異様な感情が、すん、と内に引っ込んだ。

綾子を止めなくてはいけない。そう思つたら、現実に今生きている自分が戻つて来る。この先に潜むかもしれない危険な現場に、綾子を行かせる訳にはいかない。これは僕が行かなければならぬ。半ば乱暴に、僕は綾子の腕を掴んだ。

「だめだ」

「どうして。今、行かないと」

「僕が行く」

手を振り解こうとする綾子は、必死の形相だつた。

お互ひ、普通じやない。一度落ち着いてからでなければ危ない。

深呼吸しつつ、綾子の手を離さない様にして頭を落ち着かせる。

僕等は店長を尾行していた。それは、犯人かも知れないという疑いを持つたからだ。

一週間近くも続けた尾行が、今こうして実を結ぶのかもしれない。どんな結果になつたとしても、僕等が出来る事は現場を押さえるところまで。間違つても犯人を捕まえよう

なんて思つてはいけない。

危険の一歩手前で僕達は引くべきなんだ。弁えなければ駄目だ。

「どうしても行くというなら、一緒に行こう」

僕は、ゆっくりと綾子に話した。落ち着いた様子に気付いた綾子もまた、振り解こうとするのをやめ、深呼吸を一つ。

「ここまで一緒に来たんだもの。貫太の言う通りだね」

どこまで踏み込むかはまだ分からぬ。とりあえず様子を見に行つて、少しでも怪しい様子を押さえられればそこで引くべきだと思う。中まで踏み込むのは危険だ。電話をかけて店長を揺さぶつたり、カツラさんに連絡したり、やれることはある。

「どうするの？ 店長が入つたそのビルに入つて行くのかい？」

「入つて行くかどうか、とりあえず判断は保留にしましよう。一先ず、様子を見てきます」

綾子と目を合わせ、互いに頷いた。

里中さんには待つていて貰おうと思つたが、状況を察したのか首を横に振り、腰のボールホルダーからモンスター・ボールを手に取つた。

「俺もついて行くよ。よく分からぬけど、様子を見ているとなんかきな臭そудし、いた方が良いでしょ？ 違う？」

なんとありがたい申し出か。あのドクロツグが咄嗟の事態に僕等を守ってくれるの

だとすれば、これほど頼もしい事はない。

「すいません。では、よろしくお願ひします」

数十メートル先のビルに向かって、僕と綾子は二人並んで歩き出す。その後ろを、里中さんがついてきた。

目と鼻の先だ。数十秒も歩けば現場についてしまう。

「こゝ?」

「そう」

ただの、何の変哲もない雑居ビルだ。四階建てで、ドアを抜けたエントランスに地下にだけ伸びる階段がある。この下か。階下には明かりがない。上から見れば、暗闇があるだけ。

下りて行くのは、やはり危険か。

「一旦引こう。僕等だけで突っ込んで行つて、警察の迷惑になるのも良くない」  
ついて来てもらつた里中さんにも、その旨を伝えようと振り向く。

綾子が小さく悲鳴を上げる。振り向いた目の前で、組んだ両手を振り上げ、僕の頭にそれを振り下ろす里中さんの姿が映る。鈍い音がして、頭に強烈な痛みが走つた。思わず膝をつき、綾子の短い悲鳴が続いた。

「しつ。静かにね。ご近所迷惑だから」

もう一発、同じ痛みが頭に走つて、僕は完全に地に伏せた。何だ、どういう事だ。綾子は、綾子はどうなつた。

無理矢理身体を起こせば、今度は腹部につまさきが刺さつた。空気とともに変な声が漏れ、僕は再び地に伏せる。僕の隣で、綾子がペタンと座つて怯えている様子が一瞬だけ見えた。

ああ、くそ。何がどうなつて。

考える暇なく、立て続けに腹部への蹴りが刺さり、ほとんど何も考えられなくなる。痛みと混乱で、どうにかなりそうだつた。

「あ、綾子……」

かろうじて漏れ出た僕の声は、届いているだろうか。

「ごめんねえ綾子ちゃん。女の子に手荒な真似は良くないと思うんだけど」

その声を聞き、痛みに弾けそうな身体を動かそうとするが、すぐに次の蹴りが僕の身体に刺さる。

「駄目だよ動いちゃ。君はこのまま寝ていて」

よ！ ともう一発蹴りが入り、僕は蹲つて痛みに耐える事しか出来ない。

鈍痛が意識を保ち、動けない身体が僕に異常を知らせる。蹲つた僕の髪を引っ張ると、里中さんは僕の顔を上げた。

目の前には、闇に紛れたゴーストがうつすら見える。その目を見ていると、鈍痛を感じつつも意識が遠のいて行く感覺があつた。ああ、眠い。僕は眠るのか。意識、が、飛びそうだ。痛い、のに。綾子。ああ、僕は、やつぱり……——罰を。  
「まつたくこんなところまで来ちゃつて。せつかくだから、歓迎するよ」  
最後に聞けた言葉はそれだけ。僕はされるがままに意識を奪われ、暗転した世界に落ちて行く。

## 【四十五】

薄暗かつた。

掃除のされていない、埃っぽい部屋の臭い。ツンと、食べ物の腐つたような臭いも混じっている。

ここはどこだろう。

動こうと思ったが、手は後ろ手でロープか何かで結ばれている。両足も同様だ。

僕は椅子に縛り付けられ、座らされていた。

意識が明瞭になつてくると同時に、身体への痛みが襲つてくる。身体をくの字に曲げたくても、身体が動かなくてどうにもならない。ただ、痛みに耐え続ける事しか出来なかつた。

どうなつてゐる。何が起こつてゐる。

記憶を辿つて一番最初に思い出せたのは、雑居ビルのエントランスで里中さんに殴られたという事。後覚えてているのは、綾子の怯えた表情。それにゴーストのニヤリとした顔だけだつた。

そうだ、綾子はどうなつた。綾子だけではない、背負つていたリュックがなく、ケー

シイもない。

少し目が慣れてきた。辺りを見回せば、場所が分かつてくる。丸型のソファ。ボックス席に、カウンター。店を飾る絵や、ラックへ並んだ歯抜けの酒瓶。

「……飲み屋？」いや、バー……かな？」

半年以上前だと思うが、付き合え付き合えうるさい店長に連れられて、そういう店へ一緒に行つた事があつた。見た目にはそう見えるが、僕が経験した場所とは、華やかさが違う。

一言で言えば廃墟だ。目の前の椅子はひしやげているし、ソファはカツターか何か鋭い物で切られた様な跡がある。焦げたように剥げている箇所もあつた。カウンターの椅子もまばら。足元には、割れた酒瓶らしき物が床に散らばっている。

ひどく荒されている場所だつた。

まずい、と直感的に思う。どう考へても、このままここに居たら殺される。

「貫太？」

日常とはかけ離れたこの異空間に、知つてゐる声が耳に届いた。

「綾子？　どこ？」

「多分、貫太から反対側のソファにいる。縛られていて、動けないの」

さつき見回して氣付かなかつたが、よく目を凝らして見れば、僕がいる位置とは反対

側のソファに、綾子と思われる人影がある。

「ここはどこ?」

「あの階段下にある店だと思う」

「携帯は?」

「だめ。取られたみたい」

僕のポケットにも携帯の感触はなかつた。何もされないよう、きつちり回収したのだ。あつてもとても使えるような状況ではないが。

「綾子は無事? 何もされてない?」

僕のように殴られてはいいか、心配だつた。

「一応無事。ただ、縛られているだけ。私よりも、貫太は平気なの? あんなに蹴られて」

「大丈夫だよ僕は」

うそだよそんなの、と綾子は呟いて、そのまま押し黙る。

「本当に大丈夫。死ぬような怪我じゃない」

僕の怪我より、もつと考えなくてはいけない事がある。

「それより、あれからどうなつた? これは一体どういう事なの?」

綾子だって聞かれても困るだろうが、今この状況に至るまでを少しでも確認したかつ

た。それに、僕は今、喋つていないと気がおかしくなりそうだ。

「分からぬ。私も眠らされて、気付いたらここにいたの」

「だとすると、ここはあのビルの地下ではないかもしないのかな」

「それはないと思う。里中さんは歓迎するつて言つてたから」

歓迎するつてどういう事だ。僕等は店長をつけてここまで来たのであつて、どうして里中さんがそこで出て来るんだ。

「まさか、グル？」

綾子の返答はない。

店長が尾行に気付いて、何か証拠を掴まれでもすると面倒だからと僕等を誘い出し、里中さんを使つて不意を突いて、まんまと捕らえたという事だろうか。

いや、そうだとしたら僕等はすぐにでも口を封じられていてもおかしくない。

話くらいは聞いてからにしようという事か？ どちらにせよ、このまま無事では済まないのは間違いない。

「……グル、だとは思いたくない」

熟考した上での返答は、どう考えてもグルだと思えてしまうが、そう思いたくない、という答えに思えた。

僕だつてそうだ。里中さんは、店長と同じように僕を可愛がつてくれた。仲の良い友

達のようになくなってくれて、店長の愚痴を一緒に零し合つた。

それを聞かれて怒られ、二人で笑つた時もあつた。店長に感謝するのと同じように、里中さんにも感謝しているし、その気持ちは今までと変わらない。

でも。もしもの事があつたら、絶対に許さない。 目を覚ましてからのこのわずかな時間で、吐きそうな程せり上がりつてくる不安な気持ちに襲われている。綾子なら、知つているかも知れない。もし僕が想像したような事をされていたらと思うと、聞くのが怖かつた。

綾子からは何も言つてはくれない。言い辛いから言えないのだと思うと、嘔吐物のような不安が口から漏れ出そうだ。

「あ、綾子」

「どうしたの？」

「綾子も、眠らさせていたんだよね？」

「そう、だけど」

「だつたら、ケーシイが今どこにいるか、知らないんだよね？」

僕の言葉に、綾子はすぐに返答しなかつた。

知らない、だけで良いんだ。それならまだ、今は無事かもしれない。助かるかもしけない。

ああなつた、こうなつた、なんて話は聞きたくないんだ。頼む。頼むよ綾子。

「あ、あのね、貫太」

申し訳なさそうに、まるでもう事が起こつてしまつたのを報告するかのようだつた。  
「きつとまだ貫太が眠つていた頃、里中さんが私を起こしたの」

何だ。何を言おうとしてるんだ。

「まだ私も朦朧としていたんだけど、里中さんは、少しでも怪しい動きをしたら分かつて  
るね？」って言って、貫太のリュックの中からモンスター・ボールを出して私に見せてき  
たの。ごめんなさい。直ぐに言わなくて。ショックを受けるだろうと思って、言い辛く  
て」

話の途中でもう心臓がはじけ飛びそだつた。でも、それならまだ、きつと無事だ。  
ケーシイを盾にしているなら、僕等が何かしない限りは危害を加えないだろう。きつ  
と、きつとそうだ。

根拠なんてない。僕等に有利はなく、圧倒的に不利な状況で、ケーシイを盾にする必  
要はないのだ。そんな事は分かつてている。分かつてはいるのだが、今は無事だと確認出  
来ないと、無理矢理にでもそう思つておかないと、まともに何も考えられなくなる。  
「綾子は何も悪くない。言い辛かつたよね、こんな話」

「でも、ごめんなさい。私、何も出来なくて」

「しようがないんだ。僕だつて同じ状況なら、どうせ縛られていて何も出来なかつた」  
こうして話していくも、事態は一向に良くならない。手足は縛られ、ケーシイを奪われ、僕等に出来る事は何一つない。

「……ねえ、貫太」

「何?」

綾子は、少しだけ間をおいた。

「私達、死ぬのかな」

不安そうな声だが、ある種の覚悟を決めたかのように、言い淀む事のない声だつた。  
そう考えるのも無理はない。何がどうなつてているのか本当のところは何も分かつてい  
ないが、僕等はポケモン誘拐、焼殺事件の犯人かもしれない人物に監禁されているのだ。  
希望は、捨てたくない。あの狭いアパートへ皆で戻りたい。そう思つたら、僕は自然  
と口を付いた。

「死にたくないなあ」

初めてそう思つた。

ポケモンを燃やすような人間は、殺されても仕方ない。心のどこかでずっとそんな風  
に考えていたし、自分の将来とか、明るい未来なんて考えた事もなかつた。どうせ碌な  
死に方しないんだと、そう思つていた。でも、僕はケーシイと出会つて、仲良くなつた。

初めてできた。ポケモンの友達だつた。

肩車をしたら喜んでくれた。ご飯を一緒に食べた。タマムシの街と一緒に散歩した。生まれて初めて、モンスター ボールを買った。

他愛のない事だが、僕には全てが新鮮で、キラキラしていて、夢のような時間だつた。そこには綾子も一緒にいて、今までより距離を縮められたような気がして、もしかしたら、僕に振り向いてくれるのかかもしれない、そんな事も考えた。

綾子と、ケーシイと、一緒に暮らす未来を、こんな僕が想像した。未来を、考えた。ああ、でも。

目の前の退廃的な光景が、死にたくない、という僕の淡い希望をぐずぐずに腐らせる。

「でも……死んじやうんだろうなあ」

ぱつりと漏らした僕の呟きに、綾子は「そうだよね」と続ける。

「貫太、私ね」

不安そうな口ぶりはもうなかつた。

芯のある声で、綾子は言つた。

「あなたをずっと、殺そうと思つてた」

## 【四十六】

人間なんて、何をするか分かつたもんじやない。

自分自身も禄に分からないんだから、他人なんて尚更だ。

店長は、自分のポケモンを一匹殺している。綾子はそう言い切らなかつたが、店長の仕打ちがたたつて、とはそういう事だ。

里中さんは、あんなに人畜無害そうな人柄をしておいて、僕等を今こんなところに監禁している。

僕は、過去にポケモンを燃やして殺した。

そして、綾子は僕を殺そうと思つていたと言う。

これは一体どういう事だ。

二年ばかり近くで見てきたはずなのに、僕は何も分かつちやいない。認められて嬉しかつたのも、仲良く出来ていると思つていたのも、距離を少しでも縮められたと思つたのも全て幻想なのかもしれない。

僕は一体、どれだけの罰を受ければ許されるのだろう。何もかも失つて、惨たらしい死に方をすれば、許してもらえるのだろうか。

もうそれならそれで良い。

「……殺そうと思つていたなら、殺してくれて良かつたのに」

僕の言葉に、綾子は「そうだね」と返すだけだつた。

綾子を殺人犯にするなんて、と偽善染みた事を言う気はなかつた。全ての罪と責任を取り覚悟があるのならば、そうすれば良い。

「初めて会つて名前を聞いた時から、ずっとそう思つていたのに、気付けば随分長い間一緒にいるんだよね」

「初めて会つた時？」

アルバイトとしてあの店に入つて、店長の次に挨拶をしたのは綾子だつた。初日のバイトが同じシフトで、随分緊張したのを覚えていいる。大した会話をしていない。そつけない態度で挨拶を返され、それだけだつた。

「そう。顔を見た時、びっくりしちやつた。まさかと思つて後から調べたら、私の知つてゐる人だつたから」

「綾子は、僕の事を知つていたんだ」

「どこだろう、過去にどこかで会つた記憶はなかつた。殺したいと思われる程、人に関わつてきてもいい。」

「分からぬ？　殺したいと言われる程の事つて、そうないでしょ？」

「……ああ、そつか」

僕の人生で、そんな出来事は一つだけだつた。誰にも言つていないし、僕だけしか知らない。死んだキヤタピーだけが、夢の中で僕への恨みつらみをぶつけてくるだけ。

その罪の重さは今でも僕にのしかかっていて、呪いの様に僕を包み込んでいる。

「もしかして、あのキヤタピーの」

「やつと分かつた？　あなたが燃やしたキヤタピーは、私が可愛がつていたポケモンだつたの」

ああ、そうか。そうだつたのか。綾子は、僕に罰を与えてくれる人だつたんだ。

そう思うと全てが納得出来て、僕はそれを受け入れようと思った。十年以上もの間、罪を隠してのうのうと生きてきた僕は、牢獄で裁きを待つ罪人のように、あのアパートで暮らしていたという訳だ。

「あの日、私は初めて買ったモンスター・ボールで、キヤタピーを捕まえようとしていたの。十歳になる前からあの公園で一緒に遊んでいて、触覚にリボンまでつけて、本当に仲が良かつた。ボールを置いて、キヤタピーに話しかければ、向こうから入つて来てくれそうなぐらいにね」

選んだ訳ではない。僕があのキヤタピーを燃やしたのは、たまたまそこにいたからだ。何の恨みも理由もない。

今なら理解が出来る。だからこそあまりにも外道で、愚劣で、救えない。

「捕まえようと思つたらすぐに行くべきだつたんだよね私も。丁度沙穂から遊びに誘われていて、後回しにしたのが失敗だつた。誰にも言わず、一人で捕まえたいなんて考えず、沙穂を連れて行けば良かつたんだ。今でも、本当に後悔してる」  
でもね、と綾子は続けた。

「どんなに遅くなつても、どうしてもその日にモンスター・ボールを持つて行きたかったし、公園に行つたのは間違いじゃなかつた」

「僕を、見つけたから」

「そう。いつもはキャタピ―を呼びつつ公園を歩き回れば、向こうからひよつこり出てきてくれたのに、その日は出て来なかつた。随分探したなあ。あの公園、広いから歩き回るの大変なの。知つてるでしょ?」

もちろん。広くて、人もいなくて、もう日が落ちかけて夜の帳下りて行く雑木林の中だつたからこそ、僕はあんな事を行つたのだ。

「歩いてたらさ、雑木林の中でゆらゆら揺れる変な光が見えたの。なんだろうと思つて近寄つたら、火なんだよね。焚火でもしているのかな、と思つたけど、どう見てもそんな感じじやないしさ。私も、もう日が落ちかけていて、薄暗い公園を歩き回るのが樂しくなつちやつて、その火がとても神秘的に見えたの。非日常というか、遊んでいてはい

けない時間に、普段見ないものがある気がして、近くの木に隠れてじつと見てた」

「そうしたらさあ、と綾子は楽しい思い出話をするかのように、語気を強めた。

「火が消えかけているところまで見ていて、私おかしいなと思つたんだよね。どうみても、燃やされている対象が動いてるんだもの。だんだん恐ろしくなつて、でも何故だか釘付けになつて、そこから動けなかつた。火が消えて、あなたが逃げるようにならから走り去つた後、その燃えていた物に近寄つたら、すぐに分かつたの。私が着けたリボンの一部が、そこに残つてるんだもの。怒りと悲しみで滅茶苦茶になつたけど、なんだかその現場にいると私がやつたみたいだし、益々怖くなつてきて私も逃げちやつた。これも私が本当に後悔してる事の一つ。翌日見つかつたキヤタピーは、私が埋めてあげる事もなくどこかへ連れて行かれた。私が遅かつたばかりにあんな仕打ちを受けたんだと自分を責めたけど、結局私の中に最後まで強く残つたのは怒りだつた。あなたの姿や顔は、近くで隠れて見ていたから覚えてたし、色々調べたら、すぐに自分の記憶と一致する人を学校で見つけたよ。まさか同じ学校の下級生だとは思わなかつた。でも、見つけたところで、私はどうやつたら自分の怒りや悲しみをぶつけられるか分からなかつたんだよね。殺してやりたい程憎んだし、親が心配して病院に連れて行こうとするくらい泣いたよ。でも、私にはその時、何をどうすれば良いのか分からなくて、ただ赤ん坊のように騒いで、塞ぎこんで、暴れたなあ。当時、下級生だつたあなたなら、まだ私の方があ

力も強くて、殺せたかもしれないのに、何で動かなかつたんだろうって、後になつて何度も考えた。そうしたらね、いつも同じ結論に落ち着くの。燃えるキヤタピーを見ていたあなたは、恍惚とした笑みを浮かべていた。それが私には恐ろしかつた。得体の知れない、あまりにも理解の範疇を超えた表情だつたよ。それを思い出すと、怒りと悲しみを抑え込めるくらいに恐ろしかつたし、関わり合いにはなりたくなかつた。そんな人間と一秒でも一緒にいたくない。もしあの表情が私を捉えたら、私も燃やされかねないとさえ思つた。だから、何もしない事にしたの。全てを抑え込んで、毎年毎年キヤタピーが燃えていたあの場所に花を供えて、私だけは絶対に一生覚えておこうと思つた。同時にあなたの事も思い出してしまうけれども、それはキヤタピーを助けてあげられなかつた私への罰だと思つて、受け入れる事にしたの』

僕は、全てを黙つて聞いていた。

何も言えないし、言うつもりもなかつた。綾子が今語つた事は、初めて聞く僕がポケモンを燃やした行為の客観的視点だつた。恍惚とした笑みを浮かべていたそうだ。

僕がポケモンを燃やした尤もらしい理由など、本当になかつた。言い訳もなく、ただ、燃やすと素晴らしいものを見られると思って、燃やした。案の定燃える姿が美しく、僕は、恍惚とした笑みを浮かべた。

それが眞実。

いくら考へても、理由など分からぬはずだ。燃やした理由は、燃やしたいと思つたから。本当に、ただそれだけだという事だ。

「十年近く経つて、キヤタピーの事は忘れなくとも、あなたの顔なんて記憶からだんだんと薄れた。でも、まだ私の中に怒りや憎しみは残つてたつてよく分かつた。あなたがバイト先に現れた時、曖気に記憶した顔を思い出したんだもの。名前を聞いた時、我を忘れて殺しそうになつたしね。でも、あなたを殺して私も捕まつちやうなんて、そんなのが嫌。どうしてポケモンを燃やす様な人間を殺して、私の人生を棒に振らなくちやいけないの？」つて、何度も何度も考へたなあ」

「何も話さないし、そつけないのはそういう事か」

「ううん。私のこの性格と態度は、あなたにキヤタピーを殺されてからずつとこう。私は、自分の大切なポケモンを燃やされた人間。それはもう、変わらないの」

「だつたら、その話をしてくれれば良かつたのに。そうしたら、僕だつて」

「あなたが最初から優しい人間だと分かつていれば、すぐにそうしたかもね。でも、そんな事を喋つたら、私に何かするかも知れないでしょ？ 小さい頃に見たあなたの表情を思い出したら、そんな事話せなかつた」

「だから、僕に近づいたんだ」

「自分の近くに置いておけば、うまく殺せるチャンスもあるかと思つたからね」

僕が働き出してから一年程経つた頃、綾子と暮らし始めた。話す機会がその一年で特別増えた訳でもないのに、アパートへ招かれた時僕はただ舞い上がっていた。その辺の青年男性と同じで、女性に家へ招かれた事がただ嬉しかったのと、自分の事も相手の事も、碌に分からぬままの関係が心地よくて、僕は綾子に惹かれて行つた。不思議な雰囲気のある綾子が、ありのまま受け入れてくれたと思つて、僕は甘え始めた。

何も、知らずに。

「どう？ アパートで暮らしていた僕は、隙だらけだつたんじやない？」

「もちろん。きつとうまい事やろうと思えば、いくらでもやれたんだと思う。でも、人殺しだよ？ いくら怒ついていても、憎んでいても、なかなか踏み切れなかつたよ。何時だつたかなあ、覚えてる？ あなたがポケモンを持たない理由を、ぼそつと語つたの。自分はポケモンのトレーナーになる資格なんかない。向いてないんだ、つて。まさかそんな事を言う人間だけは思つてなかつた。ちゃんと極悪人だつたら、思い切れたのかもしないのになあ。辛そうな顔してそんな事を言うあなたの顔を見た時から、私はもう迷い始めていたの。そこからだよ、だらだらと一緒に過ごして、気付いたら一年以上も一緒にいるんだもの。おかげで、私はもうあなたを殺せなくなつちやつた」

「あなたがケーシイを連れて來たからだよ。トレーナーになる氣ないなんて言つてたく

せにさ、何を思ったのか急にケーシイを連れて来た時は本当にびっくりした。キヤタピーを殺しておいて、そんな事許されると思つてはいるのかと憤つたりもしたけど、あなたは本当にケーシイを可愛がつてているし、何より、ポケモンを燃やした自分がケーシイのトレーナーである事をずっと悩んでるのも分かつてた。夜遅くまで眠らずにボソボソ呟いてるのも聞いた事あるし、ケーシイが好きなくせに、自分なんてつていつも卑屈なんだもん。一緒に暮らしていれば、それくらい私にも分かる。ケーシイだつてあなたにとても懷いているし、私とも仲良いしね。そうなつちやうと、私にはもう殺せない」するいなあ、と綾子は呟いて、喋らなくなつた。言いたい事は全て言い切つたらしい。どうせ死ぬなら言つてやろうという綾子の告白は、とても驚くべきものだつたけれども、同時に何かが腑に落ちた氣もした。綾子が僕に憎しみを抱いていたのなら、僕へのそつけなさや、何も話したがらない様子なのも、納得出来る。

普段から僕以外の人間と接する綾子の態度とは別だ。客への対応だつて人当たりの良い人にしか見えないし、壁は作つていても、他のバイトや里中さん相手にも、一定の愛想は見せる。僕相手にはそれがなかつたし、何故一緒に暮らしてくれているのか、正直分からなかつた。

「今回起こつている事件は、僕が犯人だとは思わなかつた？」  
綾子は、うーんと唸つてから、間を置いて答える。

「思つたよ。あんな事をする人間が、あなた以外にいるなんて考えられなかつたから。でも、ずっと一緒にいればいる程、あなたがポケモンを燃やせるような人間かどうかは、私の中でも分からなくなつてた。小さい頃のあの記憶が、全て幻だつたんじやないかつて思う程に、私も混乱していたんだね」

「でも僕は、本当にポケモンを燃やしている」

「そう、幻じやない。何で？　どうしてなの？　あなたは、ポケモンを燃やすような人間じやない。ケーシイに、不器用ながらもあんなに愛情を注げるのに、どうして？」

その疑問に、燃やしたいから燃やしました、とは答えられない。魔が差しました、と言葉にするのは楽だが、そうじやない。

「僕は、圧倒的なまでに無知だつた。無学だつたし、ポケモンが生き物であるという知識はあつても、その認識があまりにも薄かつたんだと思う。自分でも変な事言つてるのは分かつてること、そういう事なんだ。愚かで、成長のない子どもで、想像力が欠如していた。吐き気がする程卑劣だというのも分かつてる。殺されてしまるべきだとも思う。だからこそ、僕は一生消えることのない自分の行いを背負つて、考えて行かなきやいけないんだ。僕は臆病だから、自殺なんて出来ない。今あのキヤタピーに僕がしてやれるのは、僕が悩み苦しみながら地獄のような人生を生きて行く事だけなんだと、最近考え るようになつたよ」

「ケーシイが、そうさせた？」

「そういうこと」

かな、と僕が言うと同時に、静まり返っていた薄暗いこの場所に、扉が開く音が響いた。

店の入り口ではない。奥の部屋からだ。

歩く足音が聞こえると、今度は突然店の明かりが強くなり、僕は目を伏せた。

「いやあ、凄い話聞いたやつた。なるほどねえ、貫太君にはそんな過去があつたんだ。綾子ちゃんも殺すだなんて、出来もしないのに言うもんじやないよ」

扉の奥から出てきたのは、里中さんだつた。僕の知る彼そのものだ。人当たりよく、店を上手に回している彼が、僕等をここに監禁している。にわかには信じられないが、今この状況が真実を語っている。

「ごめんね盗み聞きしちやつて。ここ、監視カメラとマイクついててさ、裏で話聞こえるんだよ」

どうせ死ぬなら、聞かれたつてなんだつて関係ないだろう。それよりも、ケーシイだ。

「ケーシイは、無事なんでしょうね」

カウンターから出来た里中さんは、割れた酒瓶やお菓子の食べかす、空のコンビニ弁当などを雑に端へ寄せつつ、店をゆっくりと歩き回つた。床のついた焦げ後が、ここが

何に使われていたかを物語つていてる。

薄暗かつた時はそこまで気にならなかつたが、臭いがひどい。何も片づけず、随分と放置しているのだろう。廃墟に人が住み着き、片付けもせず散らかすと、こんな臭いになるものなのか。

里中さんは、僕と綾子が座らされている間まで来ると、カウンター席の背の高い椅子に腰かけた。

「たまには掃除するんだけどね。汚くて悪いね。それで、なんだつけ？ ケーシイか」  
ポケツトからボールを取り出し、それを宙に放つて、キャッチして見せた。まだその中で無事なのか。

「それ、ケーシイが入つてるモンスターボールなんですね？」

「そうだね」

「無事、なんですよね？」

「貫太君さあ」

里中さんは、僕の問いかけを無視して話し始める。

「まさか君も僕と同じ人種だと思わなつたよ。ポケモンを燃やすつて良いものだよね。存在そのものを蹂躪出来るというかさ、上に立つたつて感じするよねえ。気持ち良くて、やめられないよ。だから、燃やす理由なんてそんな難しく考える必要なんてないん

だ。もつと正直になりなよ」

そう語つて、ボールの中から赤い光線が伸び、ポケモンのシルエットが形成されていく。ぐにやりぐにやりと揺れ、段々、形が安定して……。

「ほうら、燃やすつて素晴らしいだろう？」

綾子のけたたましい悲鳴が、人が作り上げた欲望の空間に反響した。

「さ、里中あああああああああああああああ！」

僕もまた、その目の前の光景に、沸騰した頭で叫ぶ。縛られている事も忘れ、飛び掛かろうと全身に力を入れるが、動ける訳もなく椅子は倒れ、床へ横倒しになる。頬に裂けるような痛みが一瞬走った。瓶の破片か何かで切つたのだ。痛みを気にせず、椅子に座る里中を睨みつける。さも事も無げに出した“真っ黒こげのケーシイ”を見て、恍惚の表情を浮かべていた。

「お前！ ケーシイを！ この糞野郎！ 殺してやる！ 絶対に殺す！」

「何で怒ってるんだい？ 君だつてやつた事だろ？ 分かつてくれると思つて、わざわざ明るくしたのに。そんな反応されたんじや、燃やした甲斐ないなあ」

外道だ。屑だ。こんな行為、許されて良いものじやない。黒こげになつたケーシイに視線を向けると、まだ、生きているのか苦しそうに息をついて動いていた。

奥で綾子は震え、僕は怒りで気がおかしくなりそうだった。

焼けて苦しむケーシイを見る里中の表情を見れば、綾子の怒りが実感で理解出来た。よくこれを抑えたものだし、恍惚とした表情の恐ろしさも理解出来る。

僕は、こんな表情をしてポケモンを燃やしたというのか。ただ命を奪い、愉悦に浸つたあの表情は、人間じやない。こんな奴、生きていたら駄目だ。

「分かつてないなあ貫太君。仲間かと思つたのに。ちえ。つまんないの」

狂つてゐる。これが現実か？ 僕は、今罰を受けているのか？ この地獄のような場所で、かくも惨たらしい行為が行われていた？ 僕のケーシイがその餌食になつた？ それを目の前で見せられて、素晴らしいだろうつて？

頭が追い付かず、怒りで震える身体と、自分も同じ事をしたんだという内から湧き出る罪悪感と、全てがない交ぜなつて、ただただぐもつた声で僕は呻き続けた。

殺せ。もう殺してくれ。それが最後の罰なら、さつさとやつてくれ。

「せつかくのお披露目なのにな。まつたく分かつてないよ君達は」

里中のまつたく理解出来ない言葉が、現実離れしたこの異空間に投げられ、僕はもう、何も言い返す事は出来なかつた。

## 【四十七】

「気にする事ないよ。このケーシイは、君のじゃない」

呻き声を上げて汚い床に這いつくばる僕に向かつて、里中はそう言つた。

一言一言を理解するまでに時間がかかる。一体こいつは何を言つているのだ。僕のケーシイじゃない？

じやあ一体どこの誰だ。

直視する事も辛い。焼け焦げたケーシイの身体を見ても、僕には判断がつかなかつた。

「君のケーシイはこっち」

里中は、先ほどモンスター ボールを取り出した右ポケットとは反対のポケットから、もう一つモンスター ボールを取り出して見せた。

「ここので黒こげになつてるのは、次どこかに放置しておくケーシイだよ」

横倒しになつたまま、何も悪びれる事なくそんな事を言つてのける里中を僕は再び睨みつける。

「そんな睨んでどうするんだ。良いじやないか、君のケーシイじやなかつたんだから。

怒る理由はないだろう？　まずは安心したらどうだい？』

黒焦げのケーシイをボールに戻し、里中はそれをポケットにしまい込んだ。

『そのケーシイは、誘拐して来たのか？』

『そうだよ。俺のゴーストは優秀なのさ。闇に乗じてモンスター・ボールを掠め取る事も、ポケモンを操りここに来させる事も、何でも出来る。人やポケモンを深いところで操れば、時間差でここに連れて来る事も出来る。連れて来てしまえば、あとはドクロツグの出番だ。死なない程度に痛めつけて、最後に燃やして完成だ。後は誰かがそれを見つけて、広めてくれるのを待つのみ。どうだい？　君達は、こういう話が聞きたくてそこそ嗅ぎまわっていたんだろう？』

椅子の上で足を組み、里中はふんと鼻を鳴らしてご機嫌だつた。店長を尾行する僕等を見つけ、まんまとここに閉じ込める事に成功した訳だ。さぞ気分が良いだろう。

僕と綾子はここに捕まっているが、店長はどうした？　やつぱりグルなのか？　こんな理解不能な言動や行為を続ける奴と同調しているのだとしたら、綾子はとんでもない店で働いていた訳だ。同じ店に、憎み恨む対象が三人もいるなんて。

『店長はどうした。お前の仲間なのか？』

里中は、ケラケラとハウリングするスピーカーのような金切り声で笑い出した。くくく、と腹を抱え、涙を流して手を叩く。

「そつかそつか。君達が尾行していたのは店長だもんな。でも、仲間じやないよ。あいつはあいつで、僕を探つていたみたいだね。君達より随分前からこそそこそ嗅ぎまわつていたようだから、そろそろ始末しようかと思つてところだつたよ」

店長も、探つていた。

「僕等はあまりに失礼な疑いを掛けっていた、という事だ。

「店長も訳アリみたいだね。裏で縛つて痛めつけていたら、これは俺が受けるべき罰だつて、何度もボヤいていたよ。貫太君何か知つてる？」

きつと、自分のポケモンに行つてしまつた仕打ちを、店長は悔やんでいるのだ。どこまで行つても許される事のない自分が受ける罰として、全てを諦めたのだろう。

「……殺したのか？」

「うーん、どうだろう。多分、まだ死んではいないとと思う。氣絶してるだけかな」

既に店長がやらされているとなると、次は僕等の番。抵抗する手段は、皆無。

「それより、どうして君達は店長に疑いを向けたんだい？」

「……殺されたポケモンと、店に来店したポケモンが、一致するから」

「なるほどねえ。それは僕も無意識だつた。次はどういつを燃やしてやろうかなつて考える時、自然と考えるのは店の光景だもんなん。偏つちやつてたか。最後に俺じやなくて店長だと思つてしまつたのは、店長の訳アリに何か関係があるんだろうね」

里中はわざとらしく額に手をやり、あちゃー、と呟く。

「……なあんてね。途中から、意識して店に来たポケモンと同じ種類のポケモンを燃やしていたよ」

「何故？ わざわざ疑われるような真似を？」

「最終的には、人間を燃やしたいのさ僕は」

黒焦げたケーシイを見ている時と、同じ表情で僕を見つめていた。綾子の言つていた、そんな顔をするやつと一秒でも一緒にいたくない、というのが良く分かつた。

「意味が分からぬ。そんなリスクを冒したら、自分が捕まりやすくなるだけだ」

「それが良いんじやないか。カツラさんが来た時なんか、イキそうな程興奮して大変だつたよ。流石に貫太君達と一緒に会いに行くのは攻め過ぎだつたかもしれないけど、スリルあつたよ本当に」

本当に楽しんでいたんだ。そう分かるくらい、ニヤニヤと虚空を見上げて思い返している姿は、気味が悪い。

「狂つてる」

「いいんだよ狂つてて。俺は始めから、一生捕まらないなんて思つてない。それを承知でやつてているんだ。ただ、この衝動が抑えられないだけ」

「結果的に僕等三人と一緒に捕まえて、あんたは満足という訳か」

「うまく行き過ぎだと思つてゐるよ。そもそも、身の回りの人間には手を出す予定はなかつたんだ。すぐに捕まつても面白くないしね。ただ、店にいる見知つたトレーナーのポケモンを燃やしたら、凄く良いだろうなつて思つてたから、もしかすると今日みたいな状況になつて、やれるかもしない。そんな願いを込めて、店に来たポケモンを燃やしていたんだよ。君の言う通り、僕は満足さ」

期待せず垂らしていた釣り針に、僕等はまんまと刺さり、そのまま釣られてしまつた。

間抜けすぎる。

「綾子のバッグに、死体の入つたモンスター・ボールを入れたのもあんたか？」

「もちろん。あれは流石にやり過ぎだつた。若干ポケモンを燃やすという行為に飽きが来始めていたからね、急ぎ過ぎたよ。おかげで、多分僕はそう遠くない未来に捕まるんだと思うよ。警察がどんな手を使つて調べてるのか知らないけど、きっと無能ではないだろう。だからね」

こつちも始めようか。

里中はそう呟くと、先ほどポケットから出したモンスター・ボールを開く。中からは、まだ黒焦げていないケーシイが現れる。ただ、僕等と同じように縛られ、身動きはとれない様だつた。

「……どうする気だ」

分かっていても、これから受ける拷問のような仕打ちを思うと、恐怖が靄のように身を包む。

「せっかく人間を捕まえたんだから、楽しませてよ。たっくさん痛めつけてあげるから、頑張って意識を保ちなよ。もし君が気を失つたら、今度こそ君のケーシイを燃やすね」つい数秒前まで僕を包んでいた、鳥肌が立つほどの恐怖を上書きするように、瞬間的に怒りが渦巻き、頭を再び沸騰させた。

「お前、ケーシイに手を出して見ろ。絶対に殺してやるからな」

何を言つても、今僕に出来る事はない。でも、ケーシイが燃やされる事だけは我慢ならない。それだけは、止めてくれ。

里中は、貼り付けたような笑みを浮かべつつ、立ち上がりつてこちらへ寄つて来る。

「貫太君がケーシイを持ったと聞いた時から、もしこの状況になつた時、目の前にいるのが君とケーシイだつたらいいなつてずつと思つていたよ。ケーシイを痛めつけて苦しむ君を見るのか、君を痛めつけ苦しむケーシイを見るのか、どっちがいいか、中々決められなくてね。……でも、決めたよ。君を痛めつけ、ケーシイが苦しむ姿を楽しんだ後、目を覚ました時の前に焼け死んだケーシイの姿があるつて、どうだい？」

背中を向けた状態でボールから出されたケーシイを見ると、声のするこちらを見よう

としているのか、縛られたまま小さな身体を動かし、目が合つた。僕を心配そうに見て、甲高い鳴き声を上げる。

「ケ、ケーシイ……」

悟君の家で酷い目にあつて、ゲームコーナーの景品になり、僕のような人間の元へ流れ着いて来た。少しの間心穏やかに暮らせたかと思えば、これだ。僕はケーシイにテレポートを使えるようにするどころか、まともに守り切る事も出来ていない。

やつぱり僕は、トレーナー失格だ。

ポケモンを燃やすような人間には、それ相応の仕打ちが待つていた。

ただ、それは僕だけで良い。ケーシイだけは、どうか、心穏やかに、幸せに。

「そのケーシイがテレポートを使えないっていうのも、ぞくぞくするよ。本当だつたら縛られていてもテレポートで抜け出せるのに、君が思い出させてあげなかつたせいですれが出来ない。ああ、なんて不幸なんだろうねえ、君も、ケーシイも」

里中は、椅子ごと横倒しになつた僕を元の状態で座らせた。ケーシイが僕を、僕がケーシイを視界に入れられるよう目の前からずれると、腰のホルダーについているボルから、ドクロツグを出した。

「やめて！　お願ひ！」

反対側で綾子が叫ぶが、里中の黙れ！　の一言で押し黙つた。

「綾子ちゃん。下手に動いたり喋つたりすると、君からにしちやうよ？ 正直貫太君とケーシイがメインだから、君なんてどうでも良いんだ」

綾子にも手を出さないで欲しい。どうか、どうか僕だけにして下さい。今は、それさえ口に出す事が出来ない。僕がそう懇願したら、里中は満面の笑みで喜び、綾子やケーシイを痛めつけるかもしれない。そういう人間だ。

「さ、始めようか」

僕の前に立つドクロツグが、オーダイルを仕留めたあのどくづきを打つかのように、腕を振りかぶつて構えた。

「いけ」

里中の一言で、僕の腹にきつい一撃がめり込む。ぐぐもつた声と共に、肺から息が漏れる。

「どくは流さないよ。貫太君には、痛みを味わつてもらう。ドクロツグ、次だ」  
さらに一発、左側から脇腹へのボディーが突き刺さる。痛みに悶え、顔をしかめる。駄目だ、どうしようもない。僕は、今日ここで死ぬ。本当だつたらあのオーダイルが動けなくなるほどの一発だ。僕なんて一発で失神だろう。

手加減されている。本当にこいつらは、僕を斬る気だ。

顔面への一撃は、僕の意識を飛ばしかけた。脳が揺れ、前も後ろも左右もわからなく

なる。つんざく痛みが、少し遅れてやつてくる。

腹部への殴打は、顔や頭を殴られた時とは違う。痛みに悶え、のたうち回りたくなるほどどの痛みが襲う。ある程度感覚を空け、僕が最大限苦しむように殴つてくる。

もう今の時点で何発殴られているのか分からぬ。

里中が何か言つているが、僕はその内容もいまいち分からぬ。

後頭部、顔、腹、脇腹、足の甲、脛。身体の至るところを殴打され、痛みはもう全身を貫く。

「あ、あ……」

口はだらしなく開き、視界はぼやけ、意識だけが、まだ。僕が眠つたら、綾子もケーシイも死ぬ。その言葉だけが、僕をつなぎ止めた。

これが罰。ポケモンを燃やし殺した人間への罰だ。店長がこうして拷問を受けた時、自分が受けるべき罰だとつたらしいが、その通りだと思う。

何も出来ないまま、圧倒的な痛みと苦しみを味わい死んでいったキャタピールは、きっと今僕の様に苦しんだ。

そして、その苦しみから逃れられない。逃れたら最後、僕の一番大切な人とポケモンが、僕と同じ苦しみを味わう。

このまま一生地獄の業火に焼かれ続け、全てが終わり、何もかも焼け落ちて、もし助

かるような事があれば、僕は初めて、綾子やケーシイに笑いかける事が許され……る、の、かも、しない。

「やめて！　お願ひ！　もうやめて！　ねえ！　ねえ！」

子どものように、声を張り上げて叫ぶ綾子の声が聞こえてくる。最後に一度だけ、綾子とケーシイを目に入れておきたい。

殴られ続けて、飛びそうになる意識をかろうじて保ちながら、ぼんやりする視界でなんとか綾子とケーシイに焦点を合わせようと顔を上げる。

ケーシイの泣き叫び暴れた姿、綾子が動けないまま叫ぶ顔。僕が出来る事は、もう、ただこうやつて意識を保とうと頑張る事だけ。せめて、自分から諦める事なく、断ち切られて意識を失いたい。こんな僕でも、最後は頑張りました。零点の人生、一つくらい、三角があつたつて、いいんじや、ないかなつて。

里中の高笑い。ドクロツグが、僕から距離を取る。終わらせようとしている。ああ、せめてその一撃で全てを刈り取つて……あれ、駄目だ、僕の視界から、ケーシイが消えて、こんな瀬戸際でも、僕は頑張れない。

突如、頭の上に重さが加わった。意識がなくなる、もう、だめ……。

「なっ！」

里中が驚きの声を上げる。距離を取つたドクロツグは、助走をつけた。

振りかぶった拳を僕の顔面へ打ち込み、きつとそれで全てが終わ……。

視界がほんの数舜暗転した。頭の中は、殴られて元々ぐちやぐちやだつたが、それとは違う。脳が回転し、訳の分からぬ気持ち悪さが込み上げて来て、吐き気が僕を襲う。かろうじて保つた意識で僕が見たのは、里中とドクロツグの後ろ姿。そして、隣には綾子がいる。

「あ、え？　貫太？」

綾子も、泣き腫らした顔で僕と顔を合わせる。何が起こつたのか分からぬ。ただ、僕と綾子の間にいるケーシイが、左手で僕の右腕を、右手で綾子の左腕を掴んでいる。「貫太あ！　お前何やつてんだあ！　せつかくの楽しみを！　至高の時間を！」辺りを見回し、僕等を見つけた里中が叫んだ。

「行け！」

里中の声に反応し、ドクロツグがこちらへ一足飛びに近づいてくる。振りかぶった腕が、今度こそ僕を捉えようという瞬間、ケーシイがギュッと強く手を握る。

また数舜の暗転。頭が割れそうな程痛み、今度は上も下も右も左も、前も後ろも分からなく、ぐるんぐると視界が回つて、ああ、吐き気が強い。

次の瞬間、背中が固かつた。今度は真っ暗な世界が広がり、風が僕の傷を撫で……風？

「え、外？」

視界に広がるのは、タマムシの上空に広がる、ビルで切り取られた四角い空だつた。

「貫太、これつて」

僕達は、三人仲良くなつきいたビルの前に転がつてゐるようだ。

「う、うん。きつとそうだ」

綾子が今どういう表情をしてゐるか分からぬ。ケーシイも、ただ横で一緒に寝転がつてゐる。

「貫太君！」

また、知つてゐる声が僕を呼ぶ。多くの足音が駆け寄つて來る。うるさいなあ。せつかく、良い氣分で横になつてゐるというのに。

「これは酷いな。……まさか君、奴に」

僕を抱き起こしてくれたのは、カツラさんだつた。気づけば周りには警察が取り囲み、僕等を見守つてゐる。

「僕より……そこに、寝転がつてゐる綾子とケーシイを、先に」

「あ、ああ、そうだね」

カツラさんが指示すると、警官一人が寝転がつた綾子とケーシイを持ち上げ、そのままパトカーへ連れていつた。

「私より先に貫太を！」

「いいから！」

綾子の声に立ち止まつた警官は、カツラさんの領きに反応してそのままパトカーへ乗り込んだ。

「病院まで送らせよう。君達にはとても悪い事をした」

「それより、この下にまだ怪我人がいるので、あとはお願ひします」

「分かつて。私達は奴を追い詰めに来たんだ。逃がしやしないし、全員助けるさ」

カツラさんの言葉を受け取ると、途端に僕の身体には安心が襲う。あれだけ頑張って保とうとしていた意識を、もう、保てない。途端に眠くなつた僕は、カツラさんに抱きかかえられたまま、目を閉じた。

# 【四十八】

目を覚ました時、目の前には白い天井が広がっていた。

辺りを見回そうとすると、首や顔、頭が軋んで痛む。足を動かそうとしても、刺すような痛みが襲つた。腕はかろうじて動く。視界は、片側が塞がつている。右目が腫れているのかほとんど見えない。音は……正常に聞こえているのかどうか分からぬ。それほどに静かな場所だった。

消毒液のにおいが鼻腔をつき、僕は、この場所が病院なのだと悟つた。

「あ……」

声を出すと、唇が痛む。いつも通りに喋るのは、難しいかも知れない。

僕は、入院している。生まれて初めての経験だった。今まで大した怪我も病気もなく過ごしてきた。初めての入院が、ボコボコに殴られた怪我によるものだとは。

最近、僕の人生は初めて経験する事ばかり。

少し環境を変えるだけで、こうも色々な事が起ることは思わなかつた。

あれからどれくらいの時間が経つてゐるのだろう。見える範囲にはカレンダーも時計もなかつた。身体の痛みからすると、長く眠つていた感覚もない。綾子やケーシイ、

店長は無事だろうか。

それにしても、ドクロツグに随分とボコボコにされたものだ。地下での記憶を思い出してしまう、僕は咄嗟に強く目を瞑つた。しばらくは、夜眠るときに悪夢を見そうだ。カツラさん達は、きちんと里中を捕らえたのだろうか。もし逃げ出していたらと思うと、その辺から飛び出してきて、僕に止めを刺そうとしてくるかもしれない。明るい病室にいながら、僕はぶるりと身体を震わせた。

あの悪夢が昨日だとすれば、日付的に今日はバイトだつた。

「何を考へてるんだ僕は」

戻つて来たんだと、妙なところから実感が湧いて來た。

この身体で、働ける訳がない。随分とあのバイト先に調教されてしまつてはいる。僕がシフトに穴を開けたつて、誰かが埋めるだけだ。

自嘲気味な考へも、生きているからこそだ。東側の窓から差し込む太陽光が、僕の身体をポカポカと温める。

……いや、暑い。もう随分と暖かくなつた。夏は目の前。今年はどんな夏になるだろう。

そもそも、この傷はいつになつたら治るのだろうか。一夏の間、こんなベッドの上で寝転がつてゐるだけではしんどい。早々に退院したいものだ。

座りたくなつて、身体を起こそうと力を入れる。幸いまつたく動けない訳ではなく、激痛に耐えつつなんとか座る事が出来た。

今何がどうなつてているのか。それを知るにはどうしたら良いのだろう。起きて病院を歩き回つてみようかと思ったが、足はどうしても動かすことが出来ない。痛みが強すぎる。

困った。

軽く見回しても携帯はない。誰か来てくれたりするだろうか。

何も知る事が出来ずに途方に暮れていると、ベッドを囲んでいたカーテンが勢いよく開く。

「目、覚めたんだね」

開けたのは綾子だつた。

見た限りは、特に怪我もなさそうだ。自分以外が無事である事を確認出来ると、やつとほつとした。

「寝てなきや駄目だよ」

「分かつてる。それより、あれからどうなつた？ ケーシイは？ 店長は？ 里中はどうなつたんだ？」

「いいから先ずは横になつて」

綾子が優しく背中を支え、僕は再び白い天井を見上げた。

「綾子は、なんともないの？」

「縛られていたところが少し痛むけど、それ以外は大丈夫」

「良かつた」

端に置いてあつた丸椅子を引き寄せ、綾子は座つた。肩に掛けたバッグを足の上に下し、中をこそぞと探る。

「ほら」

その手に握られていたのは、モンスター・ボールだつた。

渡されたそれを受け取ると、僕は初めて部屋でケーシイと出会つた時のような気持ちになつた。変に緊張してしまう。あんな目に合わせて、申し訳ない。

「出してあげないの？」

「そ、そうだね」

スイッチを押し、ボールを手のひら大に。恐る恐る両手でそれを開いた。

真っ白な布団の上に、不釣り合いな赤いシルエットが現れ、僕の知つている形になつていく。

ぽとりと布団の上に落ちたのは、両足を伸ばして座つたケーシイ。

「良かつた……無事だつたんだな」

「カツラさんがね、モンスター・ボールを届けてくれたの。幸い怪我もないし、凄く元気だよ」

綾子とケーシイが無事だった。こんなに嬉しい事はない。視線の読み辛いその糸目も、無表情のようで意外と豊かな表情をするところも、初めて会った頃から変わらない。もちろん、変わった事もある。

ケーシイは、僕と綾子を前にびくつく事はなくなつた。ご飯の時と、外へ出る時はつきりと嬉しそうな顔をするようになつた。遊んで欲しいと、甘えるようになつた。僕等は一緒に過ごして、仲の良い関係を築いた。それが誇らしく、嬉しい。

しばらくぼうつとしていたケーシイだつたが、またすぐに遊ぼうな、と声を掛けると、糸目は緩ませ、キュウ、と甲高い鳴き声を上げ、ゆっくりと這つて来て、僕の顔に抱き着いた。

「痛い痛い」

心配してくれていたんだ。痛くても、その気持ちが嬉しい。小さな身体を撫でると手に伝わる、柔らかな感触がケーシイの無事を感じさせた。

よく全員生きて帰れたものだ。

どうやつても生き延びる事は出来ないと思つたあの状況で、僕等が今安心して集つていられるのは、ケーシイのおかげだつた。

僕が殴られ続けていたあの状況で起こった不思議な事態は、ケーシイが起こしたものだ。ポケモンという摩訶不思議な生き物は、かくも僕等の想像を超えて行く。

あんなに守りたいと思つたケーシイに、僕と綾子は守られた。小さい身体に秘められた大きな力が、僕等を助けた。

そんな不思議な生き物も、今は僕の顔に抱き着いているだけのかわいい奴だ。ゆつくりゆつくり撫でていると、だんだんと落ち着いてきたのか、ケーシイはしがみついたまま眠ってしまった。

僕とケーシイの再会を黙つて見守っていた綾子は、眠りについたケーシイを抱き上げ、僕の胸の上へ俯せに寝かせた。

「あの時、ケーシイがテレビポートを使つてくれたんだよね」

そう言つて、何も警戒する事なくだらんと力を抜いたケーシイを、綾子は愛おしそうに眺める。

「そうだと思います。あの時は咄嗟の出来事で何がなんだか分からなかつたけど、僕等二人を一瞬で外へ運び出したのは、間違いなくテレビポートさ」

「使えたのかな。使えるようになつたのかな」

分からぬが、ケーシイが痛めつけられる僕を見て、なんとか助けたいと咄嗟に眠つていた力を引き出せた。そう思つた方が格好いいじゃないか。

「どつちだと思う？」

「分かんない」

「でも、と綾子は一言置いた。

「どちらであつても、ケーシイが私達を守つてくれた事には変わらない」

「そうだね」

「僕等は無事だつたが、他はどうなのか。

「綾子はきつと、ケーシイを渡しに来ただけではないだろう。

「それで、どうなつた？」

「モンスター・ボールを持つて来てくれたカツラさんに聞いたんだけど、あの人は捕まつたつて。一人で椅子に座りながら大笑いしていて、随分と大人しく捕まつたらいいよ」  
しつかり捕まつたのなら良かつた。燃やすという行為に取りつかれた悪魔は、火がついたように狂つていた。大人しく捕まつたのも素直に諦めたというより、彼にしか分からぬ、誰にも理解出来ない考えがあるのかもしね。

「店長は？」

「貫太と同じくらい酷い状態だけど、命に別状はないつて」

「良かつた……。店長には、悪い事しちゃつたな」

綾子は申し訳なさそうに目を伏せた。

でも命があつて本当に良かつた。後でいくらでも謝れる。

店長もまた過去の行いを悔い、悩み続けていた。今回の事と自分がやつてしまつた事は別であり、僕達は、今後も同じ様に悩み苦しんでいくのだろう。そうでなくてはいけないと思う。

「色々あつたけど、落ち着いたんだね」

タマムシを蝕んでいた狂人は去つた。事件の最中でも街は賑わつていたし、人の営みは変わつていなかつたが、それでも皆心のどこかでは不安を感じていたはずだ。この大きな街には、僕を含め社会に適合しない連中はまだたくさんいるだろう。それでも、あの大きな不安材料が取り除かれた事は大きい。

人は何をしでかすか分からない。それを考えれば、今後も時折、今回と同じではなくても、恐ろしい事件は起くるのだと思う。僕等が人間である限り、それはなくならない。「生きてて、良かつた」

お前が言うな。そう言われかねない言葉だつたが、綾子はただ、頷いた。

# 【四十九】

カツラさんと警察が事情聴取にやつて来たり、親が様子を見に来たり、綾子とケーシイが一緒にやつて来て他愛もない話をしたりと、やつて来た人に応対する生活が数週間程も続いた。頭をしこたま殴られた影響があるかも知れないと言う事で、仰々しい精密検査が行われ、随分とあちこち調べてもらつてているようだ。

今のところ問題ないが、右耳の聞こえがすこぶる悪い。不便極まりないのだが、僕は例の事件を象徴する、ポケモンを燃やすという行為を行つた者の罰として、この右耳と付き合つて行く覚悟が出来てゐる。特にショックも落胆もなかつた。

綾子はやたらと自分を責めて謝つてくるが、本当に恨んでも怒つてもいしないし、むしろ僕で良かつたと思つてゐるくらいだ。

右耳の聽力一つで皆が生きて帰つて来られたなら、儲けものだと思つた方が良い。

店長とだけはまだ一切話していなかつたが、僕があと数日で退院だというところで、松葉杖姿の店長が僕の病室へやつて來た。

お前とは回復力が違うんだ、と豪快に笑い、事情は聞いた、無事で良かつたと言い、痛いと言つてゐるのに頭をぽんぽんと叩く。どこをどう見たら無事だと言うんだ。相変

わらず大雑把な人だ。

「来ていただいて、すいません。良くなつたらこちらから挨拶をと思っていたんですが。  
もう、大分体調はいいんですか？」

「まだまだお前に心配されるような俺じゃない。先に退院して店で待ってるから、早く  
お前も出て来いよ」

この状態で店に出るつもりらしい。豪快というか、最早馬鹿だ。

「里中が犯人で良かつた訳ではないが、お前が犯人じやなくて良かつたよ」

「お互い様、ですね」

「そうみたいだな」

綾子からは店長へ話したと聞いているし、店長が最初は僕に疑いを掛けていたという  
話も聞いた。

互いに的外れな事をしていた訳だ。両成敗として謝り、僕等は元通りただの店長とバ  
イトに戻った。

もう一つ聞いてみたい事もあつたが、それを口にするのはやめた。これもきっと、お  
互い様。

結局店長が犯人ではないと信じ切れなかつたのは、タマムシで僕を後ろから追いかけ  
た不審人物が、店長その人かもしれないと思つたからなのだが、話を聞いたらどうやら

本当にそうだとの事だつた。

紛らわしい事をしてくれる。

店長は店長で事件の不審さに気付いて、こここそ調べ回つていたそうだ。  
「じゃあ、今度は店でな」

「来ていただき、ありがとうございます。また、お店で」

会話もそこそこに、店長は松葉杖をついて去つていった。あれで厨房に立つのは不可能な気がするが、どうする気だろうか。

「行けば分かるか」

早く退院したい。病院生活も、飽きて来た。

退院後、まだ店では働けないものの、挨拶しようと思い、同じ松葉杖姿で開店前の店に顔を出した。久しぶりに戻つてみれば、随分賑やかに皆が歓迎してくれる。

綾子は珍しく笑つていたし、他のバイトも騒がしい。店のカウンター席に座つていた店長の元へ挨拶へ向かうと、よう、と手を上げ「働けるな?」と無理を言う。

「馬鹿言わないで下さい。悪化しますよ」

「いやあ、そればかりはお前の言う通りだ。俺もしばらくは座つて出来る仕事に専念するさ」

何故家でゆつくり休んでいないのか。どうやら店長は本当に数日間店で働いたそうだ。

皆は賑やかにしてくれるし、店の皆も明るい。でも、この店の賑やかさが、僕には少しばかり空元氣に思えた。里中が犯人だつたのだ。色々暗くなる話題も多いだろう。何より皆、明るく人当たりの良いあの人しか知らないんだ。僕でさえ、この店にいた時の“里中さん”がいないのは、寂しく思う。

こうして目の当たりにすると、本当にあの人人が犯人などと実感が湧いて来る。頭では分かつていたのだが、店にいた時の“里中さん”は、本当に親切で、店長の扱いがうまい良い人だつた。

人は何をしでかすか分からぬ。自分も含め、身に染みて理解出来た。

「おら！ 開店までもう少しだぞ！ 働け働く！」

店長の声が店に響く、ああ、この声だ。これがなくちや締まらない。

## 【五十】【了】

足の骨折が治り松葉杖がとれ、生活するのに問題なくなるまで数カ月の時間を要した。最後の精密検査が終わり、病院でもういいよと言われた時、僕はやっと今回の全てが終わつた気がした。

ワイドショーでやつていた事件の犯人逮捕のニュースも、もう落ち着いて次の話題に飛びついている。僕のところにも取材が来るものかと思つたが、カツラさんや警察がきつちり止めてくれたらしく、大変感謝していた。

全てが元通りに、僕の生活は落ち着き始めている。予定していた通りサファアリゾーンにでも繰り出してみたい。ケーシイと初めて一緒に行つた居酒屋にも顔を出し、またあのおばあさんとお話ししたい。あそこに通つていれば、カツラさんともいざれきちんとお話出来る機会があるだろう。ケーシイが本当にテレポートを使えるようになつたのか、それも確認したかった。

「ケーシイは、何がしたい？」

その日は、僕の怪我が完治してから初めて綾子と二人で入つたバイトだつた。一足先に上がり、一階のエントランスで綾子を待つてゐる間、次の休みには何をしよ

うかと考えていると、いくらでも時間を潰せる。

僕の言葉に鳴き声で返答し、肩車されたケーシイが僕の上でゆらゆらしていた。ご機嫌だ。またゆっくり考えるとしよう。

「お待たせ」

綾子がエレベーターから降りてきて、僕等は帰路についた。

もう尾行をする事もない。ケーシイを堂々と肩車して、夜のタマムシを歩ける。随分と開放的な気分だ。

相変わらず、僕等の間には会話が少ない。他愛のない会話をちらほらとして、煌びやかなタマムシを歩き続ける。

僕と綾子は何も変わつていらないように思えるが、そんなはずはない。僕はあの場所で聞いた話を忘れていないし、綾子だつて話した事は覚えているはず。

もう死ぬもんだと思つて話したのに、生きて帰れてしまつたものだから、なんとなく互いに触れ辛くて、曖昧なまでここまで来た。

変わるのは変わり、色々落ち着いた中で、僕等だけが曖昧なままだつた。

「綾子。この前の話なんだぞさ」

怪我も完治し、全てが落ち着いた今こそ話をする時かと僕は思う。

「私は、もう言いたい事は言い切つた。あれ以上話す事はないよ」

「今後はどうする？ 僕みたいな奴と暮らしていくのは、綾子にとつて辛いんじゃないかな」

「どうするか、私が決めていいの？」

「もちろん。僕は、贅沢を言える身分じゃない」

顔を上げ、綾子は考えるようになタマムシの空を見上げた。

「あなたの罰は、私と暮らして行く事。私の罰は、あなたと一緒に暮らして行く事」

「……なるほど。それは酷い罰だ」

ちらと見た綾子の横顔は、無表情で何を考えているか分からぬものではなかつた。どこか憑き物が落ちたように、スツキリとした顔をしている。

「今度、一緒にタマムシ公園へ行つて。全てを悔いて、謝つて。今後は私が貫太をしつかり監視していくから、もう二度としないと一緒に誓つて」

「分かつた。行かせて貰えるなら、僕もそうしたい」

ポケモンを燃やした事実は、一生消える事のない罪だ。僕はそれを絶対に忘れないし、綾子が隣にいる以上、一生悔いて生きて行く。

それが僕の罰だというのなら、もちろん受け入れようと思う。  
僕は、ポケモンを燃やした。

それがどういう事なのか、理解させてくれた綾子とケーシイが隣にいるならば、少し

だけ、まつとうな人間になれるのかかもしれない。

頑張って。

そう声を掛けたかの様に鳴いたケーシイが、僕の頭をポンポンと叩いた。

【了】